

教会学校教案誌

2012.4.5.6月号



No.45

日本キリスト改革派教会
中部中会日曜学校委員会

2012年度4～6月カリキュラム (第45号)

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第1年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参考教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単元の目標			
4月1日 進級・受難週	十字架のキリスト	—	子24、ウ小教理27
		マタイ27:32-50	マタイ27:46
十字架の犠牲を支払われた神の極みまでの愛の中で、感謝と喜びに生きよう			
8日 復活祭	復活されたキリスト	—	子24, 25、ウ小教理28
		マタイ28:1-10	マタイ28:9
今も生きておられる復活のキリストの明るい光の中で、希望と勇気に生きよう			
15日	人生の目的—礼拝—	問1	ウ小教理1
		ヨハネ17:3	ヨハネ17:3
神を知るとは神とのまじわりの中で生かされること。人の生きる道がここにある			
22日	神の栄光をあらわす	問1	ウ小教理1
		ローマ11:36-12:2	コリント一10:31
人も被造物も神の栄光をあらわすよう定められている。気張らずに生きていこう			
29日	救われた喜び	問2	ウ小教理87, 34、ウ大教理76
		ルカ15:11-24	ルカ15:24
主イエスに救われて歩む幸いと喜びを知ろう。ここに私たちの人生がある			
5月6日	神の子とされた喜び	問2	ウ小教理34、ハイデ1
		ルカ19:1-10	ルカ19:9, 10
神の子とされている喜びに生きよう。ここに中心があり、出発点、ゴールがある			
13日 母の日	礼拝こそいのちの源	問3	ウ小教理88
		ヨハネ4:1-26	ヨハネ4:23
人は神なしに生きられない。礼拝は神との交わり。潤される礼拝をささげよう			
20日	いのちのパンで生きる	問3	ウ小教理89, 90
		ヨハネ6:1-15	ヨハネ6:35
公同の礼拝は日々の祈りの源、また目標。祈りと御言葉に親しむ日々にも励もう			
27日 聖霊降臨祭	神と人を愛する (一)	問4	子34、ウ小教理42、ハイデ4
		使徒2:1-4, 43-47	コリント二8:9
神の愛によって愛する幸いを与えられている。神と人を愛する愛に生きよう			
6月3日	神と人を愛する (二)	問4	子40、ウ小教理42、ハイデ4
		ルカ10:25-37	ルカ7:47
御言葉を聞くことと行うことは一つのこと。善きサマリア人イエスにならおう			
10日 花の日	キリスト証言	問5	ウ小教理2、ウ告白1章
		ヨハネ5:39	テモテ二3:15b
聖書はキリスト証言である。キリストとの交わりによってすべてが始まる			
17日 父の日	神の御言葉	問6	ウ小教理3、ウ告白1章
		ペトロ二1:16-21	ペトロ二1:21
聖書はキリストの福音を告げ知らせている。神の愛と福音を聞き取る			
24日	霊なる神	問7	ウ小教理4、ウ告白2:1, 2
		ヘブライ13:8	ヘブライ13:8
神は霊であり、変わることはない。変わることはない主イエスの愛を知ろう			

も く じ

2012年4・5・6月カリキュラム

まえがき	辻 幸宏	4
巻頭説教	吉田 隆	5
本誌の基本方針		
教会（日曜）学校像について	相馬伸郎	7
副読本のご案内		10
自由募金のお願い		11

聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例

4月 1日	14
4月 8日	21
4月15日	28
4月22日	36
4月29日	44
5月 6日	52
5月13日	60
5月20日	68
5月27日	76
6月 3日	84
6月10日	92
6月17日	100
6月24日	108

2012年7・8・9月カリキュラム

2012年度年間カリキュラム	118
執筆者よりひとこと・あとがき	120

まえがき

辻 幸宏（岐阜加納教会協力牧師・大垣伝道所担当）

〈宣教師ヘボンによる宣教の業〉

日本におけるプロテスタント宣教が始まった1849年に来日した宣教師の一人にヘボン博士（James Curtis Hepburn, 1815-1911）がいます。一般の人たちにもヘボン式ローマ字において親しみのある人です。彼は米国長老教会に属し、医師でもあり、宣教師でした。

ヘボン業績は多方面（医療・教育・教会）に及びます。医療活動に関しては、来日初期に限られていますが、生麦事件（1862年）において負傷したイギリス人を治療したことで知られています。しかし、彼の業績において代表することは、和英辞典（和英語林集成、初版1867年、第二版1872年、第三版1886年）を編纂し、その過程でローマ字を確立したことです。

また彼は、教育のためにヘボン塾（1863年）を始め、後に明治学院大学を創設（1887年）に至ります。

しかし、ヘボンのこうした教育への貢献は、すべてが福音宣教・教会を立て上げるために必要なために行われたのでありました。彼は聖書翻訳（明治元訳、1887年完成）を中心的に担い、山本秀煌と共に聖書辞典の編纂を行いました（1892年）。

また、横浜第一長老公会（現在の日本キリスト教団横浜指路教会、1874年）を設立し、キリスト公会の時代にあつて長老主義を表明する教会を建てたことは特筆すべきことです。

こうしたヘボンの業績の中で、あまり知られていませんが、ウェストミンスター信仰告白（ウェストミンスター信仰簡条、1880年、1881年改訳）と同小教理問答（いみす耶蘇教略問答、1876年、1877年改訳、ウェストミンスター略問答、

1895年）を翻訳していることも忘れてはなりません。つまり、長老主義改革派教会を建て上げるためには、組織だった教理としての信条がとて大切であり、共通した教理の理解の下に聖書が理解され、教会が建てられる必要があります。彼の行ってきた働きは、その裏付けにおいて行われていったと言つてよいのではないのでしょうか。

〈ヘボンから学ぶこと〉

つまりヘボンの業績の一つひとつをとおして、私たちが福音宣教を行うにあたって何が必要であるかを確認することが出来るのです。

- ・福音を宣べ伝える前提として、言葉を理解すること（和英辞典、学校設立）。
- ・聖書を読むこと（聖書翻訳）。
- ・聖書を理解すること（聖書辞典）。
- ・教理に基づいて聖書を語ること（信条翻訳）。
- ・教会を建てること（教会設立）。

〈カテキズムの学びを始めるにあたり〉

教会学校教案誌では、この4月から、二年間にわたり、子どもカテキズムに基づく教理のカリキュラムから学びます。カテキズムは、聖書全体の枠組みから、神の救済について組織立てて語られています。だからこそ、これからカテキズムの各項目を学んで行くにあたって、カテキズム全体の枠組み、ひいては聖書（神の救済）の枠組みを理解し、それぞれの教理の位置づけを確認した上で、学び、教えていくことが求められます。

「福音宣教のプロとして」

～コリントの信徒への手紙一 9章3～18節による説教～

吉田 隆（仙台教会牧師）

もっとも、わたしが福音を告げ知らせても、それはわたしの誇りにはなりません。そうせずにはいられないことだからです。福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです。……では、わたしの報酬とは何でしょうか。それは、福音を告げ知らせるときにそれを無報酬で伝え、福音を伝えるわたしが当然持っている権利を用いないということです。

（コリントの信徒への手紙一 9章16, 18節）

牧師や宣教師は“プロフェッショナル”として福音宣教に従事している人々です。それが意味することは、専門的な知識と技術を持っているということ、そしてそれを生業としているということでしょう。他方、“サラリーマン牧師”などという表現があります。資格はあっても、給与だけをもらっていて召命観や熱心に欠ける、少なくともそれが伝わってこない働き方に対する批判的な表現です。批判的という以上に、そのような働き方は福音宣教者に相応しくないという意味も込められているのではないのでしょうか。つまり、これらの背後にあるのは、たんなる資格や報酬という問題ではなく、福音宣教における“プロフェッショナルリティー”とは何かという問題だということです。

日曜学校の教師は、教会の中で牧師や宣教師について福音宣教に従事している人々ですが、“プロフェッショナル”との認識を自他ともに持っているわけではないでしょう。それでは、福音宣教の“プロ”としての意識を持たないでよいのか。こう言われると、何か答えに窮してしまうのはなぜでしょう。「福音宣教」における“プロ”意識とは、そもそも何なのでしょう。

この問題は、実に新約聖書とともに古い問題です。上にあげたコリント書のテキストは、そ

のことを巡る問題を扱っています。ギリシャはコリントの教会はパウロの懸命の働きの実りとして生まれた教会でしたが、彼が去った後で彼を批判する人々が出てきたようです。もちろん伝道者も人間ですから、批判を受けることは避けられません。が、パウロに対するそれは福音宣教者としての彼の資格と報酬に対する疑惑でした。パウロに対するこの批判または疑惑は、第一の手紙のみならず第二の手紙にも出てきますから、そうとう執拗に長く続いたようです。

これに対してパウロは、自分の資格の問題はさておき、そもそも働く者に対してそれに見合う報酬を与えるのは当然のことだと答えます。一般の労働倫理からしても人道的見地からしても（牛に対してさえ！）当然のことだと。

その上で、しかし、パウロは「わたしはこの権利を何一つ利用したことはありません」と言い放ちます（15節）。それは、何も自慢をしたいからなのではなくて、そうせずにはおれなくてしているのだ、と。この働きは、主から強いられて委ねられた務めなのだから、報酬をもらわないことが報酬なのだというのです（18節）。

一方で、それはボランティアに似ています。何か人に親切にした時に、相手が喜んでくれるという達成感が自分への報酬になるからです。しかし、ボランティアと同じでもありません。

自分から思い立って始めたわけでも、自分にできるという自信があって始めたわけでもないからです。また、その気がなくなったり都合が悪くなったらやめるというものでもありません。

今日、宣教の働きは、宣教者がある契約のもとに就職し、ある決められた課題を遂行するという意味では仕事でしょう。しかし、生活の資を得るためにするわけではありません。給与があろうがなかろうが、福音宣教に召された以上、主がもう良いと言われるまで続けるものです。パウロが言うように、そうせずにはおれない、主から委ねられている務めなのです。

とはいえ、人はパンなしで生きていけるものではありません。それで、それに専念するためあるいはしてもらうために周りでサポートするという働き方と、自分で生活の資を稼ぎながら同時に宣教するという二つの仕方が、教会には昔からありました。前者の極端な形が修道士で、毎日ひたすら瞑想や祈りや宣教に没頭する生活をしていただけです。これら二つの全く違う二つの生活、ちょうど福音書のマルタとマリヤのような違いのうち、どちらがより優れているのかという問いがいつの時代でもありました。

この問いに対して、アウグスティヌスという人は次のように言いました。「たくさんの時間の中で瞑想や宣教をする生活と、体を使って働く生活と、あるいはそれらが混ざった生活に関しては、それぞれの信仰が健全である限り、それらの生活のいずれを営んで永遠の報いに至ることも可能である。大切なことは、ただ真理への愛によって何を求めるのか。また、隣人への愛の義務にとって、どのような役に立っているかである。何人も、時間があつたとしても隣人の幸せを考えないほど暇であってはならない

し、また神の瞑想を必要としないほどに活動的であってもならない」と。問題は心なのです。十分サポートされて祈りと宣教のための環境が整えられていれば良い働きができるかと言えば、必ずしもそうではない。あるいは逆に、日常の働きで忙しいということが神に心を向けることも宣教することもできないという言い訳になってもいけない、と言うのです。

パウロはなぜ自ら働きながら宣教する方法を取ったのでしょうか。それは何よりも「福音」のためでした。福音が本当に福音として、人々に純粋な“喜び”を与えるものとして伝わるためでした。先生は自分の名誉のためにしているとか、あれで生活していくためにやっているんだという、福音と全然関係のないことに人々の心がそれで行かないためなのです。そういう枝葉のことではなく、このイエス・キリストの福音に集中してほしい。神様が、主イエスが、無償で自腹を切って、一方的に私たちを愛して赦して救ってくださったという、この福音をどうか純粋に真っ直ぐにあなたたちも受け入れてほしい、という願いからくる選択でした。

神は、私たち人間に“喜び”を与えようとして福音をくださいました。それを伝える者も、受け取る者も、その“喜び”に生きることを神は望んでおられる。それは働きの大きさや種類によりません。講壇から語られる説教であろうと、日曜学校で子供たちに語る時であろうと、友人に語る証であろうと、報酬であろうと無かろうと、それが「福音」である以上、“喜び”をもたらすものでなければならぬ。福音宣教の“プロ”意識とは、そのことに対する私たちの心の姿勢なのだと思います。

教会（日曜）学校像について

相馬伸郎（本誌編集長）

1. 子どもの「礼拝共同体」としての日曜学校

教会をあらわす聖書の表現の一つに「祈りの家」（イザヤ第56章7節、マタイ第21章13節）があります。神の民の祈りの家である教会はまた、古来、「学びの家」と称されてまいりました。

教会は、神の御言葉によって立ちもし倒れもするので、教会が御言葉（教会の教え＝教理）を教える、つまり学びを施す場所として整えられ、考えられて来たことは当然であったと思います。学びは、必然的に、神の生ける言葉なるイエス・キリストへの礼拝を生み出します。むしろ礼拝においてこそ学びの対象となる生ける神との交わりが与えられ、深められてまいります。つまり、礼拝なしに、教会の学びは成立しないのです。

子どもは、「日曜学校」と称して自らの営みを致しておりますから、うっかりすると「学校」の真似事のような営みへと傾斜してしまうのではないかと思います。日曜学校を学校と称しますが、何よりも、教会自身が学びの家、学校です。そうであれば、日曜学校は、まさに教会独自の「学びの家＝学校」になります。

現住陪餐会員によって組織される言わば大人の教会は、礼拝共同体です。このすべての営みを通して、キリスト者が生み出され、その成長がなされます。また、教会が形成され、成長させられます。日曜学校の営みもまた、「子どもの礼拝共同体」の営みとして捉えること、これが本誌の基本的な日曜学校像です。

日曜学校のことを、外部向けに「子どもの教会」と呼ぶ教会もあるようです。もちろん教会は大人と子どもを含んだ契約の民の集いですから、大人の教会、子どもの教会という言い方は

神学的には疑問が投げかけられてしかるべきです。しかし、日曜学校を、子どもたちの礼拝共同体として捉えようとする意味であるなら、むしろすばらしいことであると思います。

日曜学校の礼拝式を、私もはどれだけ真剣に礼拝式として理解し、捧げているか、これは常に問われて良いことと思います。「大人が中心の主日礼拝式は本物だけど、日曜学校の礼拝式はその真似事……」このように考える奉仕者は誰もいないと思います。礼拝の真似など不可能です。日曜学校の礼拝式にも、キリストの臨在が確保されています。神の御言葉を語る説教者は洗礼を施されたキリスト者なのですから。

未陪餐会員や地域の子どもたちを対象にした日曜学校とは、現住陪餐会員である日曜学校教師の交わり（教会）の中に子どもたちを迎え入れてなされます。聖餐における交わりの共同体の中に、子どもたちを招き入れ、彼らに届く言葉と式次第（プログラム）を整えて捧げられるのが子どもの礼拝式です。つまり、そこには鮮やかにキリストが臨在しておられるのです。日曜学校の礼拝式に出席して、その後の主日礼拝式（朝拝）に列席する契約の子は二回の礼拝式にあずかっていることになります。

2. 分級中心より、礼拝式中心

子どもの礼拝共同体の形成という視点から日曜学校の働きを位置づけるとき、必然的に、日曜学校の働きの比重は、分級に置くのではなく、礼拝式に置くこととなります。

正直に申しますと、おそらく平均的な日曜学校教師の奉仕の姿は、土曜日の午後になって、切羽詰ったように焦る……。もちろん、それは

良いことでないことは明らかです。そこでこそ、準備の手間を軽減させてくれるような教案誌やワークブックを求める……。本誌が、繰り返し申し述べて参りましたことは、「分級展開例をそのまますることが大切なのではありません。分級では、子どもと共に祈りを捧げることができればそれで良いのです。」準備したものの全部をやれたかどうかということが分級運営の良し悪しの基準にはならないと思います。礼拝式で、きちんと福音が届いていれば、分級は「オマケ」くらいに考えてくだされば良いと考えております。ただし、子どもたちがそのオマケに目がないことは、お互い良く知っていることでもあります。

3. 子ども礼拝式における説教の重要性

—日曜学校の目標—

日曜学校の目標を、もし一言で言い表すなら、「祈りの生活へと導くこと」となります。「信じることは祈ること」であり、それゆえに日曜学校の目標は、自分の言葉で祈れる子ども、祈る生活を確立できるように導くことにこそあります。しかもそれは、まさに公同の、共同の祈りである子ども礼拝式の充実によってこそ、正しく担われます。個人的な祈りの生活の訓練だけに焦点をあてるようなアプローチを改革教会はとることはできません。主日礼拝式（公同の大きな祈り）に支えられ、あずかってこそ、個人の小さな祈りの生活は生み出され、健やかに立つことができます。

またそうであれば、当然、子ども礼拝式の中心が神の言葉の説教に求められることは、明らかとなると思います。何故なら、祈りとは信仰の業であり、それは御言葉を聴くことから始まるからです。外からの言葉つまり御言葉によって、信仰が与えられ、祈りの言葉は与えられ、生み出され、紡ぎ出されるのです。ですから、日曜学校の働きにおいても、あるいはそこでこそ説教の重要性が強調されることになるでしよ

う。そうなれば、牧師こそが日曜学校の奉仕、礼拝説教を担うことが求められるのではないのでしょうか。

本誌の説教展開例は、要旨、ポイントだけではなく、ほとんど完全原稿を掲載しています。それは、一つのモデルを提示する試みです。もちろん、大切なことは奉仕者自らが、これを参考にしつつ、御自分の言葉で説教の言葉を紡ぎ出していただくことです。そこでわかまえるべきことは、聖霊御自身が、聖書を説く自分の言葉、声を用いて子どもたちに届けてくださることを信じることです。主イエスへの愛と子どもたちへの愛があれば、必ず、子どもの心に主イエスを紹介することができます。届くことができます。

4. 説教の完成としての牧会—分級の目標—

さて、しかしながらまたここでこそ、分級の固有の意義、重大な意義も明らかになります。神の言葉の説教を通して子どもたち全体になされる御業は、また一人の子どもの固有の状況、心の奥底にも届きます。しかし、一人の子どもの魂の状況に、よりの確に触れ、届けるためには、「牧会」が求められます。私どもが、分級の目標を「共に祈る」こととしておりますのは、子どもへの牧会を指し示すあり方を指し示しているのです。この牧会に奉仕するのが分級なのです。この分級イメージは、「牧会」のイメージ、子どもと向き合う姿勢です。子どもの心、気持ちを聞き出すこと、聴き取ることが求められます。そこでこそ、教室において生徒全体に均一の知識を提供する「学校」のイメージは薄くなるはずです。

説教（神の言葉の共同的伝達）と牧会（個人的伝達）が有効になされる時、日曜学校は正しく豊かな実りを結ぶことを確信致します。

5. 教会形成の一環としての日曜学校

—教師会と教師—

およそ教会的な奉仕の在り方は、いずれも共同的な奉仕の業です。とりわけ、日曜学校の働きは、共同の働きによってこそ正しく担われ、正しい実りが結ばれるのです。つまり、担任教師の力量に基く、それぞれの分級の力に期待するよりむしろ、教師会（全員）の奉仕と祈りを束にして子ども礼拝式の充実を求め、そのために努力するあり方こそ求められていると考えます。

例えば、礼拝説教を担うのは、担当日の奉仕者一人です。しかし、その時こそ、その背後の教師たちの祈りがどれだけ集められるかが問われます。教師たちの祈りに支えられてこそ説教や、その礼拝式は必ず聖霊の豊かな働きのなかで捧げられることを確信いたします。

教師会が、単に教師たちの実務的会議で終わるのではなく、日曜学校の働きを担う核としての「共同体」として形成されることが大切なのです。具体的には、充実した教案研究がなされ、全体の課題と一人ひとりの課題とを共有できる教師会を持つことです。本誌は、その一助となるために発刊されたものです。

さらに申しますと、教会全体の祈りに支えられなければ、日曜学校の業が、教会形成そのものとしての結実を求めることは難しくなくなります。日曜学校の働きとは、各個教会の形成と伝道の働きそのものと直に繋がっているのです。そうでない働きは、少なくとも改革教会の教会形成の筋道とは異なる日曜学校となってしまいます。だからこそ、礼拝指針の第31条にある通り、小会の監督、配慮が定められているのです。日曜学校の営みとは教会形成そのものの営みなのです。いわゆる賜物のある牧師とか専門家の牧師だけが担うものではありません。

6. 伝道する日曜学校像

日曜学校は契約の子の信仰継承のためにもあります。しかしこれまで、宣教地である日本の教会は、日曜学校を地域の子どもたちを捉える伝道の場として考えてまいりましたし、今なお同じ状況にあると思います。

私どもは、今日の日本の荒廃は、教会の福音伝道の力の低下の責任であると考えております。社会から、教会の責任を問う問いはどこからもあがっておりません。しかし、神からは、問われています。

私どもの目に子どもたちは、どのように映っているでしょうか。彼らは、天地の創造者なる神、罪の赦しの福音に飢え渴いて、倒れています。真の教会で説かれる福音が届きさへすれば、子どもらこそはっきりと霊的な反応を示してくれるのです。現実の困難さを理由に、日曜学校を通して、地域の子らに伝道しようとする意欲と働きを減退させてはなりません。

私どもは、教案誌を作成し、出版すればそれで良いとはまったく考えておりません。日本キリスト改革派教会をはじめ日本の諸教会から子どもたちの讃美の声、祈りの声が溢れるようになることをこそ目指しています。

「子どもたちを私のところへ来させなさい」と命じられた主イエスの御前に、共に悔い改め、祈りの叫びをあげたいと思います。忍耐と労苦が求められます。けれどもその光景を夢見ながら、主と共に、皆様と共に、戦い続けてまいりたいと祈り願っています。

本誌へのご批判、ご意見をお寄せ下さい。改革派日曜学校像を確立するために神学的、実践的な広い論議を心から期待致しております。

Soli Deo Gloria! (ただ神の栄光の為に！)

(中部中会日曜学校委員会委員、
名古屋岩の上传道所宣教教師)

副読本のご案内

『主は羊飼—中高生のための教理入門—』

価 格 800円

著 者 木下裕也

(名古屋教会牧師・教会学校教案誌編集員・神戸改革派神学校講師)

ぜひお買い求めください。ご注文は教案誌編集部まで。

● 人生の目的—神礼拝

もうかなりのお年になってから教会に連れ始められた方と聖書の学びをしていたときのことです。そのときたまたま一緒に、ウェストミンスター小教理問答の問1を読みました。その問いは「人のおもな目的は何であるか」です。

この問いを読まれて、その方はつぶやくようにおっしゃいました。一わたしはもう何十年も生きてきたのに、人生のほんとうの目的などということを考えたこともありませんでした、と。

人生の目的とは何か。このことをはっきり知っているのだ、知らずにいるのとは、やはり生きかたが大きくことになってくるのではないのでしょうか。

さまざまなことが人生の目的になり得ます。お金をもうけること、地位や名誉を得ること、仕事で成功をおさめること、熱烈な恋愛をすることなどです。これらのことは人生にある幸せをもたらすでしょう。

けれども一方で、そのどれもが不確かです。お金は一瞬にして失われることがあります。地位や名誉を得たとしても、たった一度のあやまちでそのすべてを棒にふることもあります。熱烈な恋もさめることがあります。とすれば、これらはいずれも人生の究極の目的とはなり得ないでしょう。

さらに、私たちの命そのものも不確かなものです。明日この地上に生きているという保証を、私たちはだれひとり持たないのです。

では、私たちはついに人生の確かさ、人生のほんとうの目的を見出すことはできないのでしょうか。

いいえ、私たちは人生の眞の目的を知ることができます。ほんとうに確かで、生きがいのある命と人生を生きることができるのです。

もういちどウェストミンスター小教理問答の問1を見ましょう。

問 人のおもな目的は何であるか。

答 人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことである。

もうひとつ信仰問答を見ましょう。ジャン・カルヴァンの手にするジュネーブ教会信仰問答の問1はこうです。

問 人生の目的は何ですか。

答 神を知ることです。

人生の目的は神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜ぶことにあります。すなわち、神さまを礼拝することこそが人生の眞の目的なのです。

人生の確かさは私たち自身にはありません。私たち自身何かを頼りにしているかぎり、私たちの人生は不確かです。

けれども神さまは確かなお方です。神さまこそ私たちの人生のゆるぎなき土台、岩、命のとりです。なぜなら神さまは天地の造り主であられ、私たちの命の与え手であられ、この世界のいとなみと私たちの人生の歩みのすべてをみ手のうちに握っておられるお方だからです。

『教会学校教案誌』発行のための 自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあげます。

中部中会日曜学校委員会（2007年4月中部中会第一回定期会で教育委員会から改組）は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに12年目に入り、第45号まで発行して参りました。中部中会ではほとんどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ70教会で採用されています。大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会日曜学校委員会では、あわせて皆様からの自由募金によってご支援いただきたいと願っています。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと募金のご支援をいただきたく、よろしく願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額 30万円／年

送金先 郵便振替 伊藤治郎

00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。

聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例

〈背景と文脈〉

ローマの総督ピラトは主を十字架につけるように要求する群衆の声に負け、死刑の判決をくだした(27:15-26)。兵士たちは主を侮辱した後、十字架につけるために引いて行った(27:27-31)。

このようにして、神の救いのご計画が実現していく。このとき、そのことを知っていた者はいない。今日の箇所は、主イエスの十字架の死が罪人を救うための犠牲の死であり、歴史的事実であることを力強く示している。

〈十字架につけられる(27:32-44)〉

当時、十字架刑に処せられる犯罪人は、自ら十字架を負って刑場まで歩いて行くのが常であった。兵士は、ちょうど通りかかったキレネ人シモンに、十字架を強制的に担がせた(32)。ヨハネ19章17節は、「イエスは、自ら十字架を負い、ゴルゴタ(されこうべの場所)へ向かわれた」と告げている。ゴルゴタへの途中で、肉体的な限界のため十字架を負えなくなった主に代わって、シモンが強制的に担がされた、と推測される。

ゴルゴタで主は十字架につけられた。ここは公開の死刑場であり、受刑者は多くの人々によって死んでいくさまが見られた。マタイは35節で、「彼ら(兵士)はイエスを十字架につけると」だけ記し、磔の様子を詳細に書かないで、むしろ淡々と記述している。他の福音書の記者も同様である。決して読者の感情に訴えようとはしない。むしろ、主の十字架の意味に重点を置いている。この後に続く記事は、間接的ながら強力に十字架の意味を証している。

頭上に「これはユダヤ人の王イエスである」と罪状書きが掲げられた。皮肉をこめて書かれたが、まさに真理を語っていた。しもべとして来られた主は御国の支配者、後に裁き主として来られる王の王、メシアである。

マタイは人々の嘲りの言葉を記している。「神の子なら、自分を救ってみろ。そして十字架から降りてこい」と通行人は嘲った。「他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい」と祭司長、律法学者、長老たちは嘲った。一緒に十字架につけられた強盗たちも同じようにののしった。一人はのちに悔い改め主を信じた(ルカ23:40-43)。

主は十字架から降りることができなかったのではなく、意志的に降りられなかったのである。主は多くの病人をいやされ、救われた。しかし、意志的にご自分を救われなかった。それは、罪人を救うために死ぬことが父の御心である、と知っておられたからである。

このように、人々から激しい敵意を向けられつつ、主は十字架刑の苦しみを耐えられた。それにより、罪人の贖いという神の計画が完璧に成就したのである。神の子だからこそ、ご自分を救われず他人を救うことを意志的に選ばれたのである。

〈息を引き取られる(27:45-50)〉

主は朝の9時に十字架につけられたが、3時ごろ、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ(わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか)」と叫ばれた。人間イエスとして、「なぜ」という疑問を投げかけながら、なおも「わが神」と呼び、父なる神に絶対的な信頼を寄せておられる。まさにこのとき、主は罪人の身代わりとして審かれ、その刑罰を一身に負われていたのである。それまで「わたしと父とは一つである」(ヨハネ10:30)と言っておられたが、初めて父から離され、実際に見捨てられたのである。そして最後に大声で叫ばれ、息を引き取られた。最後の言葉は、「成し遂げられた」(ヨハネ19:30)であった。罪人の救いのために、死に至るまで従順だった主の愛と救いの恵みに感謝しよう。(後藤公子)

4月1日

十字架のキリスト

説教展開例

テキスト

マタイによる福音書 27章32～50節

参照カテキズム

子どもカテキズム 問24

〔単元のねらい〕

今年も受難週を迎えて、私たち教師がおぼえたいことは、聖書の教えの中でも、最も大切なことを大胆に喜んで語れる時が、今年も来たということである。受難週とイースターは、クリスマスよりも、大事な記念日だと筆者は考える。使徒パウロも、次のように書いている。「最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりのわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりの三日目に復活したこと」(コリント一15:3,4)。復活へと至るための苦しみと十字架の死、このイエスさまが神さまに見捨てられた出来事にこそ、私たちの誰もが根差すべき罪からの究極の救いがあることを改めて黙想し(よく考え)、イエスさま、そして、天のお父さまへの感謝と喜びをおぼえながら、子どもたちに語りたい。

わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになられたのですか

こどもの教会(日曜学校)の愛するお友だち、おはようございます。

今日から四月。もうすぐ、幼稚園や小学校は新学期。M幼稚園では〇〇日が入園式、T小学校とかT西小学校では、〇〇日が入学式です。ところで、日曜学校では、たぶん、どんな幼稚園、小学校よりも早く、今日、進級式を行います。お楽しみの進級式はこの後ですが、まず、聖書の御言葉を聞いて、神様を礼拝しましょうね。

さて、毎年、3月から4月にかけて、この季節になると、日曜学校では、あることをお祝いしています。毎年、12月25日にお祝いしているのは、イエスさまのお誕生です。そう、クリスマス。そして、毎年、この季節にお祝いしているのが、イエスさまの復活なのです。今年は、来週の4月8日の日曜日が、復活祭、イースターです。

ところで、イエスさまの復活には、なくてはならないお話があるのです。それは、何かと言えば、さっき読んだところ、「マタイによる福音書」の第27章32～50節に書いてあったことです。そうです。イエスさまが十字架で死なれたことです。ですから、イエスさまの復活というのは、イエスさまの十字架の死からの復活ということになります。そして、今日からの一週間は、そのイエスさ

まの苦しみと十字架の死をおぼえる一週間、受難週です。

イエスさまは、どこも悪いところがないのに、イエスさまを憎む人たちによって、逮捕され、裁判にかけられて、死刑判決を受けられました。そして、午前9時頃に、ゴルゴタというところで、十字架にはりつけにされました。イエスさまの右側と左側には、それぞれ、強盗がやはり十字架にはりつけにされました。近くを通りかかる人たちは、十字架にはりつけにされているイエスさまを馬鹿にしました。このように言って、イエスさまを馬鹿にした人たちがいたのです。

「他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば、信じてやろう」(27:42)。

イエスさまは、病気の人を治してあげたり、悪霊に悩まされている人を助けてあげたり、いつもたくさんの人たちを救われました。ところが、最後の最後は、十字架にはりつけにされて、本当に力がなくなって、自分のことを救うことができないように見えたのです。ですから、イエスさまを馬鹿にする人たちは言ったのです。「超能力によって、今すぐ十字架から降りることができたら、救い主と信じようではないか！」って。

イエスさまは、このようなリクエストに応じて、十字架から降りて来られたのでしょうか？ 降りて来られなかったよね。どうしてでしょうか。それは、十字架で死なれることが、私たち、ぼくたちを罪への罰から救うためには必要だったからです。実は、イエスさまは、私たち、ぼくたちが神さまから罰を受けないように、「あんな奴、あんな娘、いなかったらいいのにな」と思うってしまう罪とか、友だちとか兄弟に悪口言ってしまう罪とか、嘘をついてしまう罪、そんな罪への罰を私たち、ぼくたちに代わって、十字架の上で受けてくださったのです。ですから、イエスさまの十字架の死は、私たち、ぼくたちが罪への罰から救われるための十字架の死だったのです。このことは、イエスさまが十字架の上で叫ばれた、その言葉に示されています。

「三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。『エリ、エリ、レマ、サバクタニ』。これは、『わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか』という意味である」(27:46)。

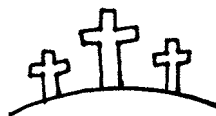
イエスさまは、父なる神さまの独り子で、いつも、父なる神さまに愛されています。しかし、そんなイエスさまが、神さまから見捨てられたのです。それは、私たち、ぼくたちの身代わりに、神さまから見捨てられたということです。神さまから見捨てられることが、罪への罰なのです。私たち、ぼくたちが罪への罰から救われるようにと、イエスさまは、神さまから見捨てられたのです。

このようにイエスさまは、私たち、ぼくたちのために、十字架で死んでくださいました。ところが、イエスさまは、三日目に復活なさって、お墓の中から出て来られたことをお祝いするのが、復活祭、イースターです。来週、イースターですが、イエスさまの復活ととても深い関係のある十字架の死のことをおぼえましょう。そして、イエスさまが私たち、ぼくたちを罪への罰から救うために、十字架で死んでくださったことをおぼえながら、この受難週も、イエスさまに感謝して生活しましょう。(長谷川潤)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 27章46節

「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」

これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。



〈ねらい〉

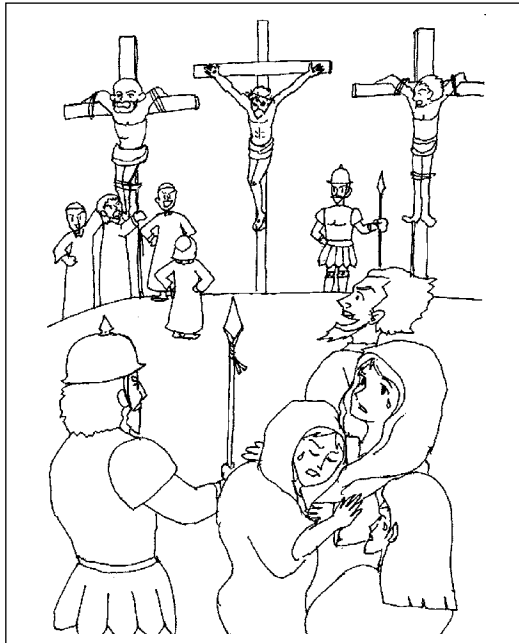
イエスさまの十字架の姿を伝えたい。それは人々（通りがかりの人々、祭司長、律法学者、長老たち）にののしられ、ばかにされ、たったひとりぼっちで苦しみに耐えておられるお姿です。すべては私たちの救いのためでした。

〈お話〉

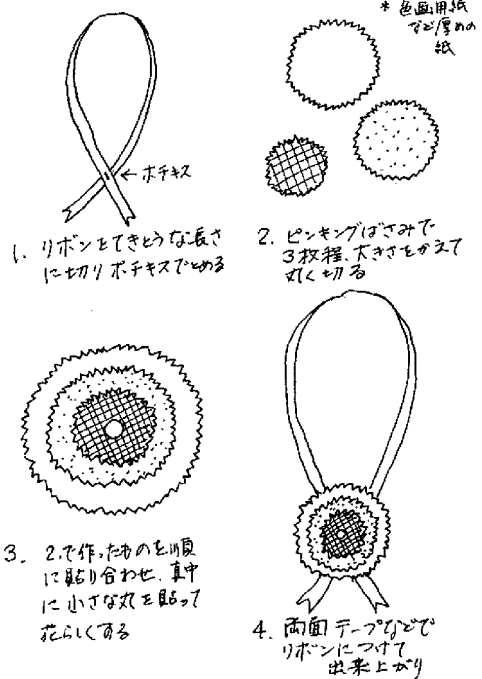
みなさんはひとりでトイレに行けますか。スーパーやデパートでひとりぼっちになっても平気ですか。一人って心細いし、ときにはこわいですね。大人になれば一人で電車にのれるし、夜のトイレもあまりこわくありません。でも大人だってずっと一人だったらさみしくて泣いちゃうでしょう。

ましてや苦しい時、悲しい時、誰かがそばにいて慰めてくれたり、励ましてくれたりするととても嬉しいです。元気になります。

イエスさまは、ついに十字架の上で死刑になりました。罪のない正しい人でしたが、イエスさまのことをねたんだ人々によって死刑にされてしまったのです。でもイエスさまはだまって十字架に付けられました。誰もたすけてくれません。ひとりぼっちです。どんなにか悲しく、苦しかったことでしょう。イエスさまはわたしたちの罪の罰を全てひきうけて死刑になってくださったのです。イエスさまの十字架はわたしたちのためだったのです。



〈工作〉 進級おめでどうペンダント



〈ねらい〉

受難週を知り、イエス様の十字架の死が私たちが罪から救うために必要であったことを覚え、感謝する。

〈展開例〉

来週4月8日はイースターです。イースターはイエス様が死から復活されたことをお祝いする日です。

その前に今日は、イエス様がどうして死なれたかをお勉強しましょう。イエス様はどのように死なれたか知っていますか？

イエス様は十字架にかかって死にました。しかし、十字架は悪いことをした人がかけられるものです。イエス様は何か悪いことをしたから十字架にかけられたのでしょうか？

そうではありません。イエス様は病気の人を治したり、悪霊に悩まされている人を助けたり、たくさんの人を救われる神様で、罪のないお方です。

その反対に、私たちはお友達をうらやましく思ってしまう罪や、悪口を言ってしまう罪、嘘をついてしまう罪、たくさんの方がいます。そんなたくさんの方の罪の罰から救われるためには、イエス様が私たち人間の代わりに十字架にかかり、死ななければならなかったのです。

さて、本当は私たちが受けなければならない罪

の罰とは何だったのでしょうか？

マタイ福音書27章46節を読んでみましょう！

イエス様は十字架にかかり、大きな声でこのように叫び、死なれました。「神様！ どうして私をお見捨てになったのですか？」

神様から見捨てられること（放っておかれて、何も助けてもらえないこと）が、罪への罰です。本当は私たちが神様から見捨てられるはずですが、私たちが罪の罰から救われるようにと、イエス様が私たちの代わりに神様から見捨てられました。

みんなも、お家の人から、学校の先生から、お友達から見捨てられたら、どんな気持ちですか？

とっても悲しくて、辛いですね。イエス様は何にも悪いことをしていないのに、私たちの代わりに父なる神様から見捨てられ、悲しく辛い思いをしました。苦しんだイエス様のことを忘れず、また感謝して、イースターまでの一週間を過ごしましょう！！

〈お祈り〉

私の罪のためにイエス様が十字架にかかって死んでくださって、ありがとうございます。イエス様は、とっても苦しかったと思います。どうか私が悪いことを思ったり、したりしないように守っててください。



〈ねらい〉

イエス様のお苦しみは復活へとつながる神の救いのご計画の根源である。イエス様が人々のあざけりに対し自らをお救いにならなかったのは、決してそれがお出来にならなかったからではなく、ご自身が十字架に架かって死ぬことが父の御心であることを知っておられたからである。イエス様が決して神のご計画の前から逃げることなく、神のご意思に従うために十字架の苦しみに耐えてくださったからこそ、罪人の贖いという神のご計画が完璧に成就し、私たちの罪がいま赦されていることを受難週にあって覚える。

〈展開例〉

- みなさんは、聖書の内で何が一番大切だと思いますか？ もちろん聖書に書いてあることは全部大切で、全てのことが真実ですが、その中でも来週のイースターと、その前の今週の受難週は、ある意味クリスマスよりもっと大切だとも言えるのです。
- クリスマスに、私たちの救い主としてお生まれになったイエス様は、何も悪いところがなく、何一つ罪を犯されたことがなかったのに、イエス様を憎む人たちによって捕らえられ、裁判にかけられ、死刑の判決をお受けになったのです。それなのに人々は十字架に架けられたイエス様に向かって「本当に神の子なら、自分を救って十字架から降りて来い。」「他人は救ったのに、自分は救えないのか。」など口々にののしったのです。
- その言葉を受け、イエス様は十字架から降りて来られたのでしょうか？ 決して降りて来られませんでした。それは、イエス様が十字架から

お降りになることがお出来にならなかったからではなく、ご自分の意思でお降りにならなかったのです。罪人を救うために死ぬことが父なる神様の御心であることを知っておられたからなのです。もしイエス様が十字架から降りてしまっておられたら、私たちの身代わりになることはできなかったわけです。イエス様はご自分を救うのではなく、人々を救うために十字架に架かってくださったのです。

- イエス様は朝の9時に十字架につけられ、3時ごろ「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」と大声で叫ばれました。これは「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。」という意味です。神様の独り子であるイエス様が、私たちの身代わりとなるために完全に神様から見捨てられたのです。
- イエス様がこの世に来てくださっていなければ、救い主はいなかった。イエス様が私たちの罪の身代わりとなって十字架上で苦しみ、神に見捨てられていなかったら、私たちの罪が拭い去られることはなかった。さらにそのイエス様が罪に死に、三日目にお甦りくださったからこそ、死に打ち勝ってくださったからこそ、私たちの罪は赦される。このように、イエス様のお生まれになったクリスマス、受難、復活の三つの出来事は私たちの救いに切っても切れない大切なことなのです。

〈お祈り〉

神様、何の罪もないイエス様が、私たちの罪の身代わりとなって苦しんでくださったことを、本当に自分のこととして覚えさせてください。



「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。」

およそ救い主にあるまじき発言とを感じる方はいませんか。キリストには最後まで潔く、悟りを開いたような面持ちで死んでほしい……そんな風に思っている子どもたちもいるかもしれません。

〈イエス様は本当に、神様から見捨てられたの？〉

そうです。見捨てられたのです。

〈どうして？ 神の大切な独り子のはずでしょ？〉

だったら見捨てられるわけないじゃん……〉

そうです。見捨てられるわけがない、いと尊き方なのです。でもそんな方が、私たちのために、私たちの代わりに、神に見捨てられたのです。そのことの意味を考えることが重要です。

この叫びに先立って、ゴルゴダの丘を暗闇が包みました。33節には昼の12時になると全地は暗くなり、それが3時まで続いたとあります。真昼のエルサレムを暗闇が支配したのです。この暗闇と、イエス様の叫びが示していることは、神に見捨てられる恐ろしさをキリストが味わわれたということです。

イエス様は、神から見捨てられた者の完全な孤独を、私たちに代わって味わわれました。神からもっとも遠く離れたところで、惨めに呪われた死を味わわれました。私たちの誰も経験したことのない、神から完全に見捨てられる恐ろしさを一人で引き受けてくださったのです。

それは、私たちの救いのためです。私たちが、決して神様から見捨てられないように、イエス様が代わりに見捨てられてくださったのです。私たちが滅びないように、イエス様が滅びを味わってくださったのです。このイエス様を信じるなら、もう私たちは神様から見捨てられることはありません。滅びることはありません。

イエス様は、本当に私たちすべての人間の罪を背負って死なれたからこそ、一人の人間として愚かなほどに叫び苦しむ必要があったのです。全ての人の身代わりに死ぬということがそんなに楽なことであるはずがないのです。人間として神の裁きを一身に受けるというとき、そんなときに悟りを開いたような顔をしているわけがありません。

なぜならこの方は最後まで徹底して、私たちと同じ人間であられたからです。キリストは神になろうとした超人ではなく、人間となって、私たちのところに下りてきてくださった神です。最後まで人間として私たちに代わって完全な絶望を味わってくださったから、この人の最後はみじめなのです。それはこの世の誰も味わったことの無い絶望です。

イエス様が、私の代わりにその絶望を味わってくださいました。だからもう、私たちは決して絶望しないのです。どんな苦しい場面でも、そこには、十字架の主イエスが共におられます。そして、お前の苦しみを、私は全部知っているよと、慰めてくださって、心を高く天へと押し上げてくださいます。



〈背景と文脈〉

主イエスの復活は十字架の死とともに、聖書の最も中心的な使信である。復活は、主イエスの贖いのみわざが父なる神に完全なものとして受け入れられ、完成したことを示す。パウロが「キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお、罪のなかにあることになります」（コリント一15:17）と言っているゆえんである。

マタイ福音書は他の福音書と同様に、主イエスがいつ、またどのように復活されたかについては記していない。墓が空であったこと、よみがえられた主が数人の女たちに顕現されたことを通して復活の事実を証している。

マタイは特に、祭司長たちとファリサイ派の人々がピラトに願いで番兵たちに墓を守らせたこと（27:62-66）を記している。彼らは、主イエスの死体が弟子たちによって盗みだされないように、とできる限りの対策をとった。

〈天使の顕現と使信（28:1-7）〉

「週の初めの日の明け方」に「マグダラのマリアともう一人のマリアが墓を見に行った」（1）。ちなみに並行記事（マルコ16:1、ルカ24:1）を見ると、彼女たちの目的は主の御体に香料を塗るためであったことがわかる。もう一人のマリアはヤコブとヨセフの母マリアであり（27:56）、ヨハナ（ルカ24:10）、そのほか名を記されていない他の婦人たち（ルカ24:10）も一緒だったことがわかる。福音書の記事の間に矛盾があるのではなく、誰に焦点をあてているかによって異なっている。ちなみに、ヨハネ福音書はマグダラのマリアの名だけを記している。

2節の「すると」と訳されている語は「見よ！」という意味であり、読者の注意を喚起している。大きな地震が起こり、天使が天から降って来て、墓の入り口にあった大きな石（27:60, 66）を転がした。これは、婦人たちが墓の中に入り、空になっ

ているのを確認するためであった。「座った」（2）は直訳すれば「座っていた」（原語では未完了過去が使われている）という意であり、これは婦人たちが墓に到着する前に起こった出来事と考えるのが自然である。

天使の顕現に接し、番兵たちは恐怖のあまり全身が麻痺し動けなくなった。彼らはピラトの命令によって、主の遺体が弟子たちによって盗みだされないために番をしていた（27:65）。人間的な安全対策（封印された大きな石、番兵たち）は、神の御力の前には何の意味もなかった。

天使は婦人たちに、主イエスの復活とガリラヤで主に会えることを弟子たちに伝えるよう命じた。墓に行った彼女たちの目的は主の御体に香料を塗るためであったことから、主の復活をまったく予測していなかったことがわかる。婦人たちにとって復活のニュースはまさに喜びの訪れ（福音）であった。彼女たちは、恐れながらも大いに喜び、その使信を弟子たちに少しでも早く告げようと走って行った。

〈復活の主の顕現（28:8-10）〉

9節の「すると」も「見よ！」という意味である。まだ墓から遠くない所で、主イエスは婦人たちにご自身を現わされた。「おはよう」（9）は直訳すれば「喜びなさい」という挨拶の言葉である。婦人たちは主の前にひれ伏し礼拝した。主は、弟子たちへの伝言を婦人たちに託された（10）。主はその伝言のなかで「わたしの兄弟たち」と弟子たちを指して言われている。主が十字架にかかれたとき、ヨハネ以外の弟子は逃げた。しかしそうした彼らを赦され、弟子たちを「わたしの兄弟たち」と呼ばれたのである。マタイは、主が約束通りガリラヤで弟子たちにご自身を現わされ、そのような弱い弟子たちに、出て行ってすべての民をわたしの弟子にしなさい、という大宣教命令を与えられたことを記している（28:16-20）。（後藤公子）※第37号（2010年4月4日分）より再掲載。

テキスト

マタイによる福音書 28章1～10節

参照カテキズム

子どもカテキズム 問24、25

〔単元のねらい〕

今年もイースターを迎えて、子どもたちが、聖書を通して、イエスさまの復活を聴く時が来た。イエスさまの復活による救いの祝福の中でも、特に復活のイエスさまがいつでもどこでも一緒にいてくださる、まさにインマヌエルという救いの祝福を伝えたい。聖書に証言されている復活のイエスさまと同じお方が、今も、子どもたちといつでもどこでも一緒にいてくださることこそが、子どもたちにとっての救いであり、希望であり勇気となる。

復活なさって、今も一緒にイエスさま

こどもの教会（日曜学校）の愛するお友だち、イエスさまのご復活、おめでとうございます。

イエスさまは、私たち、ぼくたちの罪、悪いことが赦されるために、私たち、ぼくたちの代わりに十字架で神さまから罰を受けてくださって、死んでくださいました。私たち、ぼくたちの身代わりに、神さまから見捨てられたの。このことは、先週、お話ししました。その後、イエスさまのお体は、アリマタヤのヨセフさんによって、岩に穴を掘って作ったお墓に納められました。そして、お墓の入り口は、大きな石で塞がれました。

さて、神さまの独り子イエスさまは、十字架で死なれてお墓に入れられて、それで、おしまいだったのかな？ そうではないよね。今日は、何の日かもう分かるよね？ そうです。イースターです。イースターというのは、イエスさまが十字架の死から復活なされたことをお祝いする日ですね。イエスさまは、金曜日に十字架にはりつけにされて死なれましたが、日曜日には死者の中から復活なされたのです。それで、イエスさまが復活なされた日曜日の朝早くにあったことが、さっき読んだところ、「マタイによる福音書」の第28章1～10節のところに書いてあるのです。

日曜日の朝早くに、マグダラのマリアさんともう一人のマリアさんが、お墓を見に行きました。その時、天使さんが天からくだって現れました。そして、お墓の入り口を塞いでいる大きな石を脇

へ転がして、その上にドシンと座ったのです。そうすると、大きな地震が起きました。お墓を見張っていた兵隊さんがいたのですが、恐ろしくて、気絶してしまいました。天使さんは、マリアさんたちに言いました。「十字架につけられて死なれたイエスさまは、復活なさって、このお墓を出て行かれました。そして、お弟子さんたちの故郷ガリラヤに行かれました」。マリアさんたち、とても恐かったけれど、とてもうれしくなって、すぐにお弟子さんたちのところに行きました。そうしたら、途中で、イエスさまが現れて、「おはよう」とおっしゃったんだね。

イエスさまは、私たち、ぼくたちの罪のために確かに十字架で死なれて、お墓に納められました。ところが、イエスさまは、三日目に復活なさって、お墓を出て行かれたのです。そして、イエスさまは、復活なさって40日目に、天国へと昇って行かれたのです。昇られる前に、イエスさまは、ガリラヤでお弟子さんたちと会われました。その時、イエスさまは、お弟子さんたちにこうおっしゃったのです。「世界中の人たちにわたしのことを伝えなさい。わたしは、世の終わりまでいつもあなたたちと一緒にいます」。そして、やがて、イエスさまは、お弟子さんたちの目の前で、天国に昇って行かれるのですが、天国に昇って行かれたイエスさまが、いつまでも一緒にいてくださるというのは、どういうことなのでしょう。天に昇って

お弟子さんたちから離れられるのに、いつまでも一緒にいてくださるといのは、どういうことなのでしょう？

今、復活なされたイエスさまは、天国にいらっしゃって、私たち、ぼくたちの目には見えません。ところが、イエスさまは、今も、私たち、ぼくたちと一緒にいてくださって、私たち、ぼくたちを守ってくださるのです。天国から、御自分の御霊、聖霊なる神さまを遣わしてくださって、その御霊によってイエスさまは、今も、私たち、ぼくたちと一緒に守ってくださるのです。イエスさまは、

神さまの独り子、神さまでいらっしゃいますから、死の力を打ち破ることがおできになる御方です。そして、実際に復活なされて、今も、生きていらっしゃいます。そして、私たち、ぼくたちといつも一緒にいてくださって、守ってくださいます。私たち、ぼくたちのために十字架で死なれて復活してくださったイエスさまに「ありがとうございます」と感謝して、そして、イエスさまがいつも一緒にいてくださって、私たち、ぼくたちを守ってくださることを信じて、今日、このイースターの日曜日を過ごしましょう。(長谷川潤)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 28章9節

すると、イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われたので、
婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。



〈ねらい〉

死の恐ろしさ、怖さを本当に理解している人はいないでしょう。しかしわたしたちは、主イエスへの信仰によって、本当の死を味わうことなく、イエスさまとともに死んだ者となりました。しかも三日後にイエスさまがなされた御業によって、わたしたちはイエスさまとともに、永遠に生きる者とされたのです。復活もわたしたちのためです。

〈お話〉

イエスさまが十字架の上で死んだのは金曜日。土曜日が過ぎ、日曜日の朝になりました。イエスさまの弟子であった二人のマリアが、イエスさまのご遺体に香水をぬるために、お墓に行きました。すると大きな地震が起き、お墓の入り口の大きな石がごろごろと転がりました。「イエスさまはよ

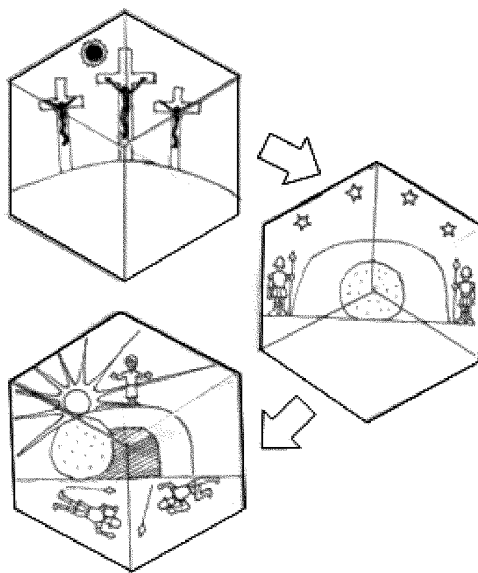
みがえられました！」と天使は言いました。それを聞いた二人のマリアはびっくり！みんなに伝えるためにいそいでかけていくと、なんとイエスさまが現れて「おはよう！」と声をかけてくださいました。イエスさまがよみがえったのは本当だったのです！

「おはよう」とは、まるでさっきまで寝ていた人のようですね。死んだ人は二度と目をあけませんし、声も出しません。でも私たちは生きていますので、毎朝目が覚めて、「おはよう！」って言えます。生きていて素晴らしいですね。イエスさまは今も生きておられます。そしてイエスさまを信じる人は、いつまでも毎朝「おはよう！」と言えるように、永遠の命を、イエスさまからいただくことができるのですよ。



〈工作〉六角変わり絵（イースター）

※型紙と作り方はP 116参照



〈ねらい〉

イエス様の救いの働きは、十字架の死で終わることなく、復活されたことを伝える。復活の主は今も生きておられ、私たちと共にいてくださる。

罪、十字架、死んで、お墓、石、いいえ、十字架、復活、生きて

〈展開例〉

今回は、ワークです。
○ワークの答え（上から順に）

〈お祈り〉

イエス様が十字架で死んで、復活してくださったことをありがとうございます。今も生きて、いつも私と一緒にいてくださることを忘れずに過ごさせてください。

〈ワーク〉

空白には言葉を入れ、あるいは、どちらか正しいほうに○をしましょう！

1. 先週のおはなしを思い出して、書いてみましょう！

●イエスさまは、わたしたちの（ ）がゆるされるように、わたしたちのかわりに（ ）にかかって（ ）くださいました。

2. それでは、きょうのおはなしです。

●十字架で死なれたイエスさまのお体は、岩にあなをほって作った（おはか・おうち）に入れて、入り口は大きな（石・ドア）でふさぎました。

●イエスさまは十字架で死なれて、おはかに入れられて、それで終わりでしたか？
はい・いいえ

3. せいしよのマタイ福音書28章1～10節をよんでみましょう！

イエスさまが十字架にかかって死なれてから三日目の日曜日の朝早くにあった出来事が書いてあります。

マグダラのマリヤさんと、もう一人のマリヤさんがイエスさまのおはかを見に行くと大きな地震がおこりました。それは、天使が天からおりてきて、イエスさまのおはかの入り口の大きな石をころがして、その上にすわったからです。

●天使はいいました。

「おそれはいけません。（ ）につけられて死んだイエスさまは、前から言われていたように（ ）して、このおはかにはいません。」

イエスさまは私たちの罪のために本当に十字架で死んで、おはかに入れられました。ところが、三日目に復活して、おはかから出て行きました。

●今、復活されたイエスさまは天国にいらっやあって、私たちの目には見えません。けれども、イエスさまは今も（死んで・生きて）いらっやいます。そして、いつも私たちといっしょにいて、守ってくださいます。

★今日はイースターです。私たちのために十字架で死なれて復活してくださったイエスさまに「ありがとうございます」と言って、いつも一緒にいてくださることを信じて過ごしましょう！！

〈ねらい〉

イースターの喜びとはどんなものなのかを学びたい。

〈展開例〉

イースターは何をお祝いする日か知っていますか。

クリスマスはイエス様のお誕生をお祝いする日でしたね。神様が人となられてこの世にお生まれになった、その信じられないような嬉しい出来事をお祝いするのです。

イースターもそれと同じくらいすばらしい奇跡の出来事をお祝いする日です。私たちの罪のために、とっても苦しい十字架に架かれてお亡くなりになったイエス様が、三日目の朝に復活されたことをお祝いする日なのです。

ゲームやマンガの中では、あるキャラクターがもし死んでしまったとしても魔法やなにか不思議な力で生き返ることがあります。でも実際に生きている本当の人はそんな風に簡単に生き返るものじゃない、ということはみなさんもよく知っていますね。「死んだら生き返らせればいい」、そんな簡単なものじゃないですね。「死」というものはとっても大きな悲しみを残すものなのです。

イエス様も十字架の上でお亡くなりになって、亜麻布にくるまれ、お墓に葬られました。イエス様のことがとても大好きだった人たちが、イエス様のことを「先生」と慕っていたお弟子さんたちは本当に悲しくなり、希望を失って落胆してしまいました。マグダラのマリアさんをはじめ、イエス様におしたがっていた女の人たちは泣きました。イエス様を失ったお弟子さんたちは、こわくなって家に鍵をかけて閉じこもってしまいました。だれもがもうおしまいだと思っていました。

ところがその悲しみはいつまでも続きませんでした。香油を塗ってせめてイエス様のご遺体をきれいにしておこうと思った女の人たちが、日曜の朝にお墓に行くと、大きなお墓の石が転がされて、イエス様のおからだはお墓の中になく、代わりにまばゆいばかりの天使がそこに座っていたの

です。天使は「こわがらなくてよい。イエス様はお墓の中におられるのではない、復活されたのだ」と女の人たちに伝えました。女の人たちは大喜びしました。真っ暗だと思っていたお墓の中には輝く天使がいて、ご遺体があると思っていた場所には「イエス様は復活なされた」という喜びの知らせがあったのです。天使は「このことをお弟子さんたちに伝えなさい」とも言ったので、女の人たちはその知らせを急いでお弟子さんたちのところへ伝えにいきました。

この復活の出来事の喜びは、当時のお弟子さんたちだけのものではありません。お弟子さんたちから何年にもわたって伝えられ続け、今の私たちにも届いています。後の時代の「もうおしまいだ」と思っていた何人もの人たちが、この知らせによって力づけられたのです。イエス様は死んでしまっただけで過去の人になったわけではありません。復活されて今も生きておられるのです。よみがえられて天にのぼられましたが、私たちに聖霊を送ってください、目には見えなくても「いつもいっしょにいるよ」というしるしを与えてくださっています。

イエス様を信じている人には、「もうおしまいだ」ということはありません、復活されたイエス様がいっしょにおられるのですから。この喜びをともお祝いするのがイースターです。この大きな喜びを与えてくださった神様に感謝しましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神様、私たちの罪の身代わりとして十字架で死なれたイエス様を復活させてくださってありがとうございます。今も生きておられるイエス様がわたしたちとともにいてくださることを感謝します。わたしたちが「もうだめだ」と思ってしまうようなとき、ともにいてくださるイエス様に気づくことができるようにしてください。また、私たちも復活されたイエス様のことをお伝えすることができるようにしてください。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。

〈イエス様は本当に復活したの?〉

そうです。

〈そんなこと、本気で信じているの?〉

信じているよ。神様には何でもできる。

〈証拠はあるの?〉

証拠? そうだね、一番の証拠は、「弟子たちが生まれ変わった」ことだと僕は思うよ。イエス様を三度否んだペテロをはじめとして、弟子たちはみんなイエス様を裏切って逃げてしまった。迫害を恐れ、神様の御心がよくわからず、信仰の薄い者たちだった。でもそんな弟子たちのところに、復活のイエス様は来てくださって、命を満たしてくださいました。その時から、弟子たちは生まれ変わって、「イエス様は復活された!! この方こそまことの救い主だ。神の救いが成し遂げられた」と伝えるために、勇敢に世界中に飛び出していったんだ。もしもイエス様の復活がなかったとしたら、この弟子たちの大変身は説明できないと思うよ。

以下、筆者が執筆した2010年4月4日小学校上級の分級展開例より引用します。

復活を信じるというのは、ただその出来事があったと信じるということではありません。その出来事の意味を理解して、イエス様が、何のために復活してくださったのかを知ることが大切です。そしてイエス様が私たちに与えようとしてくださっている希望を受け取って、この復活の希望

に生きること。それが、復活を「信じる」ということです。そうでなければ、イエス様の復活というのは、ただ恐ろしくて摩訶不思議な出来事にすぎません。

復活の希望とはどういうことでしょうか。例えばある牧師さんは、子どものころ、死んだらどうなるのだらうと考えると怖くて怖くてたまらなかったそうです。どうせ死んだら無駄になると思うと、勉強も何もやる気が起きない。変にはしゃいでバカなことばかりして、怖さをごまかしていたそうです。

でもある時、イエス様の復活の福音を聞いて、すべてが変わりました。イエス様が私たちに代わって死んでくださり、私たちのために甦ってくださいましたから、もう罪の裁きを受けて永遠の地獄の刑罰に苦しむことはない。神様の平安の中で、永遠の命が与えられ、そしてイエス様と同じように栄光の体に甦ることができる。死は、その希望の入り口であって、決してもう恐れることはない。それを知ること、生きる勇気がみなぎって、その日から猛烈に勉強を始めたんだって。イエス様の復活を「信じる」ことは、大きな力を生むのです。

※「復活の希望」を学ぶために一番最適なテキストは、ハイデルベルク問45だと思います。「キリストの復活によって私たちは、①キリストの義に与ることができる。②罪から解放された新しい命に生きることができる。③やがて同じように復活できる」という希望が教えられています。



テキスト ヨハネによる福音書 17章3節

〈神を知ることが永遠の命〉

最後の晩餐の席で主イエスは、祈りをささげられます。「大祭司の祈り」とも呼ばれるこの祈りの最初で主が祈られたことは、「父よ、時が来ました」という言葉でした。「時」とは、父の栄光をご自分が現わす時だと言われます。神の栄光を身に帯び、輝かせる時が来た、それも世が造られる前から、永遠の昔から父と共にあっておられた栄光です。この「時」とは、ヨハネ福音書においては、十字架の時です。「人の子が栄光を受ける時が来た。はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば多くの実を結ぶ」(12章23、24節)。主が一粒の麦として死ぬ、その死によって多くの人を生かす時、十字架によって多くの人を救う時が来た、と言われたのです。十字架こそ神の栄光の輝きだと言われるのです。人間の目には、恥と愚かさに他ならない十字架、徹底的な敗北としかいえない十字架こそが、神の栄光なのです。神の栄光、神の臨在とは、神の救いのことであり、神による贖い、主イエスの十字架でした。十字架を通して、苦難を経て栄光に至るということではなく、十字架そのものが神の栄光なのです。十字架でこそ、神の贖いと救いが成就するからです。ですから神の栄光とは、神の救い、神の憐れみ、神の恵みのことなのです。そしてそれは、わたしたちにご自分の命を与えてくださるということなのです。

ここで主は、「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、イエス・キリストを知ること」だと、神とキリストを知ることが永遠の命だと言われます。この「知る」とは、単に知的に理解し、事柄を了解するというのではなくて、人格的に知り合い、深い心の通い合いの中で共に生きることです。自分なしには相手もないといえるほどに、相手から自分が必要とされ、愛され、受け入れられている、そのような愛と信頼の関係の中で、相手と共に生きていることです。そのよ

うな知られ方で相手から受け入れられ、理解され、必要とされる、そのような生きた愛の交わりの中にあるということです。実際、わたしたちは、自分がそのように受け入れられ、必要とされ、愛されていることで、生き生きと生きることができ、輝いて生きることができます。しかしそれほど自分が必要とはされず、理解もされず、受け止められていないところでは、わたしたちは心萎え、心において死んでいきます。命とは、生き生きとした交わりの中で愛され、必要とされていることです。永遠の命とは、そのような生きた愛の交わりの中で神と共に生き、神の愛の中で支えられ、神への愛と感謝の中で生きていることです。こんな自分が、それでも神にとっては大切な宝物で、神から愛され、必要とされている、その神の愛の中で生かされていることです。命とは交わりです。父と子とが、そのような溢れる愛の交わりの中で愛し合っておられ、一つとなっておられる、その神の交わりの中にわたしたちも加えられ、その交わりによって生かされていくことが、永遠の命なのです。「父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちの内にいるようにしてください」(21節)と祈られる、そのような生きた交わりの中に生かされていくことが、永遠の命なのです。

わたしたちが罪から救われ、死から命に至るために、神がご自分の命を代わりに差し出して、この命によって生きなさいと言ってくださいました。神は、十字架によってご自分の命を差し出しながら、わたしたちに「生きよ」と呼びかけてくださいました。この愛の呼びかけに答えて、神の愛である命を受ける時、神との生きた交わりの中で生かされる者とされ、神の命の中で生きる者とされていくのです。(三川栄二)

※第29号(2008年4月6日分)より再掲載。

子どもカテキズム 問1

子どもカテキズム

問1 私たちは何のために生きるのですか。

答 私たちが生きるのは、私たちの神さまを知り、神さまを喜び、神さまの栄光をあらわすためです。
これが私たちの喜びです。

ウェストミンスター小教理問答

問1 人のおもな目的は、何ですか。

答 人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことです。

〈人生の目的〉

「何のために生きるのか」。このことは、誰しも一度は自らに問いかけるべき大切な事柄です。現代は、このことに真剣に悩むことが少なくなっていますから、まずこのことを「問わせること」、口に出して試みることでそのものが、たいへん大切なことではないでしょうか。

この問いに答えることは、たいへん難しいことです。学校などの公教育の場では、この問いに答えることは困難でしょう。まことの神を知り、神に喜ばれる生き方を教えてくれるところは、教会のほかどこにもありません。教会は、聖書が語ることに基づいて、「何のために生きるのか」ということを、共に考え、学ぶ場なのです。教会また教会学校こそが、「これが人生の目的です」、「これが道です」と指し示すことができます。この特権を与えられていることを喜び、感謝してこのことに励みましょう。

〈神を知り、神を喜ぶ〉

子どもカテキズムの問1は、ウェストミンスター小教理問答の問1を土台にしています。加えて、カルヴァンのジュネーブ教会信仰問答に基づいて、「神を知ること」を挿入しました。人生の目的は、神を知り、神を喜び、神の栄光をあらわすことにあります。今回は、前半の、神を知ること、神を喜ぶことについて。

信仰は知ることに始まります。知識のない信仰はありません。「実に信仰は聞くことにより、

しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです」(ローマ10:17)。もちろん知識が信仰を生み出すわけではありません。ですから、生けるキリストを提示し、指し示す「言葉」が求められます。また、私たちにおいて働かれる聖霊の御業を求めて祈ることが大切です。

信仰に至る知識とは、「神が私たちを愛してくださっている、それ故にこそ独り子イエス・キリストが十字架につけられ、復活された。天に挙げられ聖霊を遣わされ、今なお私たちと共にいてくださる」、この生けるキリストを知り、神の愛を知る知識です。この神の愛を知るところで、私たちの喜び、神を喜ぶ喜びが始まります。そこでは、神の造られた世界を喜び、与えられた命と人生を喜ぶことも始まります。健やかな人生とされるのです。神を喜び、礼拝することこそが、永遠に続く私たちの業なのです。

〈子どもカテキズムの全体構成〉

子どもカテキズムは、問1だけでなく、その全体が人生の目的を語る構成になっています。第一部で「人生の目的」について語り、第二部「信仰の道」で、神を信じる信仰に生きることを教えます。第三部「生活の道」では、感謝と献身の道を教えます。私たちの「信仰と生活」のすべてにおいて、神を知り、神を喜ぶ人生が展開されるのです。(望月 信)

※第13号(2004年4月18日)より再掲載。

テキスト ヨハネによる福音書 17章3節
子どもカテキズム 問1

〔単元のねらい〕

生きることの目的とは何か。これこそ、人生における最も重要な事柄である。この問いに対する真の答えを見出した人こそ、真に幸いな人というべきであろう。そして、その答えは聖書の中にある。すなわち聖書において証しされている真の神、イエス・キリストにおいてご自身を示された神を知り、神をあげることこそ、人生の目的である。わたしたちは恵みによって神を知ることをゆるされ、人生の目的を知ることをゆるされた。その感謝と喜びをもって、この単元を学びたい。

人生の目的

だれもがたったひとつの命、かけがえのない人生を生きています。この人生がほんとうに豊かで、幸せな人生となるためにいちばん大切なことは、生きることの目的を知ることです。人は何のために生きるのでしょうか。だれもがこの問いを問いながら生きているのだと思います。さまざまなことが人生の目的となり得ます。たとえばお金をもうけることや、地位や名誉を得ることや、仕事で成功をおさめることなども生きる目当てになるでしょう。けれども、それらは究極の目的にはなりません。つまり、人は何のために生きるのかという問いに答えを与えてくれるものではありません。むしろ、人生のほんとうの目的を見出したときにこそ、そうしたものも意味を持つてくるのでしょうか。人生のほんとうの目的がわからないままでは、この世で何をしても結局はむなしののだと思います。

わたしたちが聖書を知り、聖書においてご自身を示しておられるまことの神さまを知ることをゆるされたことを喜びましょう。なぜなら聖書こそ、人生のほんとうの目的を教え示してくれる書物だからです。

聖書によれば、人生の目的は神さまを知り、神さまを礼拝することにあります。「子どもカテキズム」の問1を見ましょう。

問1 私たちは何のために生きるのですか。

答 私たちが生きるのは、
私たちの神さまを知り、
神さまを喜び、
神さまの栄光をあらわすためです。
これが私たちの喜びです。

神さまは世界を造られ、わたしたちをも造られたお方です。神さまに造られた者がどのように生きるべきかを教え示してくださるのは、造り主なる神さまご自身です。ですからわたしたちが人生をどう生きるべきかということも、神さまのものでこそ鮮やかに理解されるのです。

人生の目的を探し求めている人は少なくないと思います。けれども人生の目的はこの世の何かから見出せるものではありません。自分自身の内側から見出せるものでもありません。人生の目的は、造り主なる神さまにたちかえることによってこそ見出すことができるのです。

神さまはご自身のふところを離れ、生きるこの意味を見失っていたわたしたちを聖書をとおして、イエスさまをとおしてご自分のもとに招いてくださったのです。ご自身を知ることをゆるしてくださったのです。神さまの恵みによることです。神さまを知ることによって、わたしたちは人生の目的を知りました。つまり神さまを礼拝すること、神さまを喜ぶことこそが人生の目的です。そこにほんとうの喜びと幸いがあるのです。

人生の目的を知ること。それは永遠の命を知ることです。永遠の命とは、この地上の命が終わりもなく、いつまでも続くということではありません。イエスさまはこのように言われます。「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです」。

永遠の命とは、父なる神さまとみ子イエスさまを知ることです。永遠の命は、ですから死んだ後に与えられる命とうことでもありません。今この地上でわたしたちが神さまを知り、神さまを礼拝して生きているなら、わたしたちはすでに永遠の命の祝福に入れられているのです。

さらに、ここでの「知る」とはただ知識として知ることではありません。愛するという意

味です。つまり永遠の命とは神さまを愛して生きる命のことを言うのです。

人の命を生かすのは愛です。神さまはわたしたちをかぎりない愛をもって愛しておられます。それはわたしたちを罪から救うために独り子のイエスさまを十字架につけてくださったほどに大きく、深い愛です。この大きな愛を知ることが、わたしたちの人生の喜びです。ほんとうの命の喜びです。

そしてわたしたちもこの神さまの愛にこたえて、神さまを喜びます。神さまを礼拝します。神さまを愛して生きるのです。神さまとわたしたちとのこの愛の交わりこそ、永遠の命です。この命に生きることこそが人生の目的なのです。

(木下裕也)

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書 17章3節

永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、
あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。



〈ねらい〉

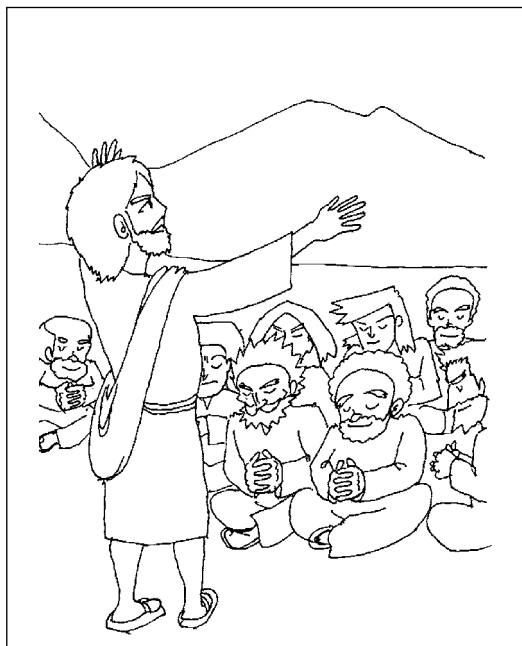
子供たちに唯一の神の存在を伝え、そのお方を愛するよう導くことは、子供たちが隣人愛に生き、永遠の命に入るためのまっすぐな人生のレールを用意してあげることです。

〈お話〉

ある日イエスさまは、十二人の弟子たちと一緒に祈りました。イエスさまは祈りが大好きで一人でよく祈りされたし、みんなの前でみんなに聞こえるようにお祈りもしました。そしてみんなの前でお祈りする時は、とても大切なことをお祈りして下さったのです。その時イエスさまはお祈りの中でこう言われたのです。

「えいえんのいのちとは、まことのかみさまをしることです。」

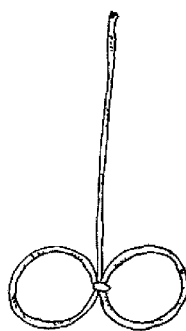
永遠の命とはいつまでも死ななくて、生きることです。わたしたちはおじいちゃん、おばあちゃんになって、それからどうなるか知ってますか？そうです。死んじゃうのです。死ってこわいですね。でも死んだあと天国へ行って、いつまでもみんないっしょに生きられるとしたらどうでしょう。「そのためにはまことの神様をしらなければいけませんよ」とイエスさまは言われます。まことの神様を知るためにしなければならないことはなんでしょう。それは教会に来て礼拝に出て、先生から神様のお話を聞くことです。



〈工作〉 モールで遊ぼう！

〈例〉 チョウ

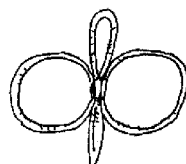
1. 8の字をつくる(99)



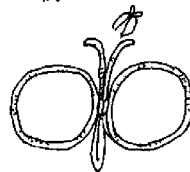
4. 77のカタチをつくらせて出来上がり



2. 触角と胴体をつくる



3. 触角を折り紙で切り、折るとはさみ



〈ねらい〉

生きる目的を考える機会を作る。聖書にその答えがあり、神様を知り、神様の愛を知ること喜びがある。

〈展開例〉

みんなは何のために生きているのかな？ 考えたことがあるかな？

お友達と楽しく遊ぶため？ 美味しいごはんを食べるため？ 勉強するため？

なぜ生きているのか、わからないままだと何をしてつまらないものになってしまいます。

今日は少し難しい言葉で言う「人生の目的」を考えて、お勉強していきましょう！

人生の本当の目的を教えてくれる本があります。みんなも読んだことがあると思います。それは、聖書です。

聖書を読むと神様のことが書かれていますね。神様は私たちが今、生きている世界を造られ、私たちも造られました。神様に造られた私たちが、どのように生きれば良いか教えてくださるのは、私たちを造ってくださった神様です。その神様を聖書を読んで知ることが出来ることは、とても嬉しく、幸せなことです。

今日の聖書箇所、ヨハネ福音書17章3節を読んでみましょう。

「唯一のまことの神であられるあなた」というのは、父なる神様のことです。今、読んだ聖書箇所には、父なる神様とイエス様を知って、礼拝して生きるなら、永遠のいのちの中にいますよ、と書かれています。

神様は、みんなのことを愛しています。大・大・大好きなのです。

先週、先々週のお話を覚えているかな？

父なる神様はひとりしかいない子なる神様のイエス様を十字架につけてくださいました。それは、私たち人間を罪から救うためでしたね。大切な大切なイエス様を私たちのために十字架にかけても良い。と思われるくらい私たちのことを愛してくださっています。イエス様も私たちのために十字架にかかって死んでくださるほど、私たちを愛してくださっています。

この大きな神様の愛を知って、喜ぶこと。神様を礼拝すること。私たちも神様を愛して生きること。これが人生の目的です。

〈お祈り〉

天のお父様。

私たちを今、生かして下さって、ありがとうございます。また、たくさんのお愛をありがとうございます。

私たちも神様を愛し、礼拝できるように守っていてください。



〈ねらい〉

1. 人生には目的があることに気づく。
2. 神さまを知ることは神さまを愛することだと理解する。
3. 目的に沿って歩む人生に喜びが伴うことを覚える。

〈展開例〉

1. 人生の目的

皆さんは、自分が何のために生きるのか、考えてみたことがありますか？

弓で矢を射る人には狙う的があり、マラソンを走る人にも目指すゴールがありますね。では、私たちの人生の的は何でしょうか？ ○○中学に合格したいとか、スポーツの大会で入賞したい、という目標を持っている人はいるかもしれませんね。でも、今日、問われているのは、そういう期間が限られた目標ではなく、僕たちが一生をかけて目指すゴールです。

「気がついた時には生まれてきたから、何が人生のゴールかわからないよ」という人が多いかも知れませんが、人間には罪がありますので、自分の力だけでは、自分が進んでいくべき的がわからなくなっているのです。

2. 神さまを知る

そんな私たちに、神様は聖書を通して、人間が一生をかけて追い求めるゴールは、神さまを知る

ことだよ、と教えてくれています。この答えを聞いたら、「なーんだ。神さまのことならもう知っているよ。もう人生をゴールしたことになるの？」と不思議に思うお友達がいるかもしれませんね。

でもそう簡単ではありません。聖書の言葉で「知る」というのは、ただ名前を覚えているとか、話を聞いたことがある、というだけではないからです。結婚した夫婦の様に、相手が自分にとってなくてはならない関係になること、かけがえのない者同士として深く愛しあうこと、これが、「知る」ということなのです。私のために命を捨てて十字架にかかってくださった神さまを、私も命をかけて愛すること、これが人生の的、人生のゴールなのです。

3. 神さまを喜ぶ

スポーツで賞の獲得を目指す選手は、苦しい練習に励みます。神さまを知るゴールを目指す人生も、苦しい人生でしょうか？ 確かに、他に楽しいことがある日曜日に礼拝に出なくてはならないのはとても辛く感じることもあるでしょう。でも、神さまは、礼拝をささげ、祈りをささげる私たちに、ゴールの時だけでなく、日々、喜びを与えてくださいます。

約束を破ることのない神さまに愛されている喜びをかみしめつつ、一緒にゴールを目指しましょう。



「天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです。神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを、わたしたちがたたえるためです。」

(エフェソ1:4-6)

「私」ではなく「神」を中心に生きて、抜本的な転換を示す)

- 「私たちが生きるのは、神を知り、喜び、神様の栄光をあらわすため」だと教えられました。「私の人生の目的」なのに、「私の栄光をあらわすため」ではないのですね。驚きです。私の夢がかなう。私がお金持ちになる。私がお金を助ける。そうやって、私になりたい自分になって自己実現するために、私は生きるわけではないのです。「私」ではなく「神様」が、私の人生の中心です。
- しかし、そのようには考えない人たちはたくさんいます。色んな人が、色んな答えをもっている。学校の先生はなんと言うでしょうか。あなたの尊敬する歴史上の人物は、スポーツ選手は、学者は……彼らはなんと言うでしょうか。この世で功績を残した人たちは、クリスチャンでなくても、みんな立派な言葉を持っている。自分の生きる目的を、自分の言葉でつかんでいる。そういう彼らの言葉から学ぶことは多い。しかし、なおその上で私たちは、「神の栄光をあらわすこと」こそ、人生の目的と信じる。

くでは、どうして私の目的は、私の栄光をあらわすことではなく、神の栄光をあらわすことなのか？ 子どもたちの疑問に耳を澄ませ、いっしょに考えてあげてください)

議論の参考に

- 説教展開例にあるように、私たちはそのためにこそ創造されたのだから。本来の目的にかなわないあり方は惨め。果物ナイフは、人を刺すために造られたのではない。(ハイデル問6)
- 「私のため」に生きても、「私」が死ねば終わり。永遠の神の前で、「私」の人生は一瞬。でもその一瞬の輝きを神のために用いるならば、そこに永遠の意味が与えられる
- 人には、人生においてそれぞれに、それぞれが力を尽くして取り組む目的があります(受験、部活動、仕事の成功、キャリアアップ、よき家庭の形成、など)。それらは神の御旨にふさわしいものならば、どれも豊かな人生を構築するために有意義なもの。しかしその諸目的の根底にある、「究極の目的」を考えることが大切。人生における具体的な目的のすべてが、究極において向かうべきゴール。それが「神を知り、喜び、栄光をあらわす」ということなのです。
- 究極の目的を確かに持つ人だけが、人生において、いつでも目指すべきゴールを見失わずに、前向きに歩み続けることができます。目標を到達してしまっただけの虚脱感や、そこに届かなかった時の挫折感に支配されない人生です。



テキスト ローマの信徒への手紙 11章36節～12章2節

〈聖なる生けるいけにえとして献げる〉

「ローマの信徒への手紙」は、「罪—救い—感謝」の三部構成となっています。まず異邦人とユダヤ人の「罪」が指摘され（1章18節～3章20節）、次にこの罪からの「救い」が語られます（3章21節～11章）。それは「信仰」によって与えられる「義」で、「信じる者すべてに与えられる神の義」です（3章22節）。そこから、罪から救われた者の「感謝」の生き方が示されますが（12～16章）、それは一言で言えば、「愛」に基づく新しい生き方でした。これまでの1～11章においては、わたしたちが救われたのが、どこまでも神の恵み、つまり「神の愛」に基づくものであるということが明らかにされていきました。そこでパウロは、この「神の慈しみにとどまるかぎり、あなたに対しては慈しみがある」（11章22節）のだから、信仰、つまり「神の愛」に踏みとどまるようにと勧め、この信仰（神の愛）にある新しい生き方を、「愛」として12章から教えていきます。そしてその中心にあることが「礼拝」でした。しかしこの「礼拝」とは、単に一定の宗教儀式に参列するというのではなく、「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げる」ということです。ここで「自分の体」と言われているのは、単に心と分離された肉体、身体のことを意味するのではなく、「自分自身」ということです。心と体からなる自分の全体を「神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げる」ということで、それはつまり、「献身」するということなのでした。

それではわたしたちは、どうして「献身」しなければならないのでしょうか。その理由は、「神の愛」にありました。「わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです」（ヨハネー4章19節）。パウロの人生の視野にあったことは、自分の楽しみや安楽ではなく、いかにしたら「主に喜ばれる者」となるかということでした（コリント二5章9節）。そうしてキリス

トを、ただひたすらに見つめつづけながら生きた、パウロの人生の中心聖句は、「その一人の方は全てのひとのために死んでくださった。その目的は、生きている人たちが、もはや自分自身のために生きるのではなく、自分たちのために死んで復活してくださった方のために生きること」でした（同5章15節）。そこでパウロをそのように突き動かしていったのは、「キリストの愛がわたしたちを駆り立てている」ことでした（同5章14節）。そしてこの神への礼拝・献身、すなわち「神への愛」から、「隣人への愛」、つまり隣人に仕えていく生活が紡ぎ出されていくのです。キリスト者には、「だれ一人自分のために生きる人はなく、だれ一人自分のために死ぬ人はいません」。そこではむしろ「わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬ」のであって、「生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです」というあり方が求められます（ローマ14章7、8節）。そしてその中心にあることは、キリストが「死んだ人にも生きている人にも主とされる」ということなのでした（同14章9節）。

そのために自分ばかりを大切にすることを教える自己中心的な「世」に倣うのではなく、心を新しくされて、神の御心を一心に求め、追求し、従っていく生き方へと歩むようにと勧めるのでした。「あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき……なさい」と。そこでパウロは別の箇所でも、「だから、以前のような生き方をして情欲に迷われ、滅びに向かっている古い人を脱ぎ捨て、心の底から新たにされて、神にかたどって造られた新しい人を身に着け、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにしなければなりません」と勧めているのです（エフェソ4章22～24節）。（三川栄二）

※第29号（2008年4月13日分）より再掲載。

子どもカテキズム 問1

子どもカテキズム

問1 私たちは何のために生きるのですか。

答 私たちが生きるのは、私たちの神さまを知り、神さまを喜び、神さまの栄光をあらわすためです。これが私たちの喜びです。

ウェストミンスター小教理問答

問1 人のおもな目的は、何ですか。

答 人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことです。

〈喜びと栄光をあらわすこと〉

子どもカテキズムでは、ウェストミンスター小教理問答問1とは、「喜び」と「栄光をあらわす」ことの順序を入れ替えています。救いの喜び、神を喜ぶ喜びこそが、信仰に生きることの土台であると考えからです。もっともウェストミンスター小教理問答においても、「神を喜ぶ」ことが土台であることは、「永遠に」という言葉が加えられていることにより明らかです。キリスト教信仰は、救いの喜び・神を喜ぶ喜びに生きる信仰にほかなりません。

私たちの地上の人生においては、「神の栄光をあらわす」ことが求められますが、救いの喜び・神を喜ぶ喜びに根ざしてこそ、律法主義的ではなく、私たちの心からの喜びとして、神の栄光をあらわすことができるでしょう。喜びこそが、神のために生きる私たちの志を生み出す源なのです。

〈神の栄光をあらわすこと〉

神の栄光をあらわすとは、消極的な面と積極的な面の二つを考えることができます。

消極的な面とは、そもそも被造物は神の作品であり、神の栄光をあらわすものとして存在しているということです。その意味では、私たちの存在そのものが神を証しており、神の御力のあらわれです。たとえば夜空に多くの星がきらめいているさまを見て、創造主なる神が素晴らしいお方で

あると分かるということです。

この点で、神の栄光をあらわすとは、神が光り輝いておられて、私たちはその神の光を反射して光り輝くものとされている、とすることができます。いわば光そのものと鏡のような関係です。私たちは、光そのものではありませんから、自ら光り輝くことはできません。しかし、光を受けて輝くものとされているのです。

積極的な面とはもちろん、神を喜び、神を礼拝することを通して、直接的に神の栄光をあらわすということです。いのちを与えられ、生活が守られていることを感謝し、神をほめたたえる。主日礼拝・教会学校に出席し、御言葉と祈りの日々を送る。神と人を愛して、神から与えられた務めとして日々の務めに励む。福音を宣べ伝える。これらは皆、積極的に神の栄光をあらわすことにほかなりません。先ほどの光と鏡の関係で言うならば、鏡を磨くのです。磨いてこそ、鏡は光を反射して豊かに輝くのです。

御言葉は、「食べるにしる飲むにしる」と語ります(コリントー10:31)。ただ飲食するだけでも、被造物として、その存在において神の栄光をあらわしています。しかし、神から与えられた恵みに感謝して飲食し、自らを神にささげて生きるならば、なおどれほど豊かに神の栄光をあらわすことになるのであろうかと思うのです。(望月 信)

※第13号(2004年4月25日)より再掲載。

テキスト ローマの信徒への手紙 11章36～12章2節
子どもカテキズム 問1

(単元のねらい)

わたしたちの人生の目的は、「私たちの神さまを知り、神さまを喜び、神さまの栄光をあらわす」（「子どもカテキズム」問1）こと、すなわち神礼拝にある。そして神礼拝とは神への献身、おのが身を神にささげて生きることである。神をあがめること、神におのが身をささげて生きること、それは神への感謝の応答にほかならない。神がわたしたちを愛したもうことを知るとき、わたしたちもまた神を愛さずにはおれなくなるのである。それゆえ、わたしたちの礼拝は感謝と喜びに満ちたわざである。このことをはっきりと確かめたい。

わたしたちの礼拝

神さまはわたしたちの造り主であられ、世界の造り主であられます。天と地にあるものはすべて神さまのみ手によって造られたのです。造られたものはこぞって神さまの栄光をあらわしています。そして、「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっている」（11:36）のです。

造り主なる神さまのみこころとみわざのすばらしさを知るとき、わたしたちはただ驚き、神さまをほめたたえるのみです。そして神さまの愛の大きさ、その驚くべき深さは、わたしたちひとりひとりにも向けられています。独り子のイエスさまを十字架につけてくださったほどに大きく、深い愛が、このわたしにも注がれているのです。

そのことを知るとき、この大きな愛にかりたえられて、わたしたちは自分を神さまにささげて生きようになるのです。神さまとわたしたちとの交わりは、おたがいにおたがいをささげ合う、実に深く、大きな愛の交わりなのです。

そしてそのように、わたしたちが神さまに自分をささげて生きることを「礼拝」というのです。礼拝とは、日曜日の朝の礼拝の時間だけのことを言うものではありません。わたしたちが神さまの大きな愛を喜び、この愛に感謝し、この身をもってお応えして生きる人生のいとなみそのものが礼拝なのです。

自分の身を生けるいけにえとしてささげなさい、などと言われると、何か特別なことをしなければならぬかのように思うかもしれません。でもこのことは、何も特別なことではありません。なぜなら神さまにおのが身をささげて生きること—礼拝こそ、人生の目的だからです。「私たちが生きるのは、私たちの神さまを知り、神さまを喜び、神さまの栄光をあらわすためです。これが私たちの喜びです」（「子どもカテキズム」問1）。

英語で礼拝を「サーヴィス」と言います。「奉仕」という意味です。つまり、礼拝とはわたしたちが神さまに喜ばれる奉仕をなすことです。わたしたちが神さまをあがめて生きることを、神さまは喜んでくださいます。

けれども忘れられてはならないことは、それ以前に神さまの、わたしたちへの奉仕があったということです。イエスさまを十字架の上にささげてくださったことにより、神さまがわたしたちのために奉仕してくださったのです。神さまがわたしたちに仕えてくださいました。だからこそわたしたちが神さまに仕えて生きること—礼拝と献身のいとなみも成り立つのです。わたしたちは礼拝のいとなみの中で、神さまがわたしたちのためにどれほどすばらしいことをしてくださったのかを思い起こすのです。

礼拝とはわたしたちの奉仕、神さまに喜ばれる奉仕です。礼拝が神さまに喜ばれる奉仕となるために必要なことは何でしょうか。それは、神さまのみこころにかなったしかたで礼拝するということです。神さまはどのようにしてわたしたちを救うのか、わたしたちに命を与えるのかということをご自身でお決めになりました。

そして、礼拝は神さまの救いの恵みに対するわたしたちの感謝の応答です。ですから、神さまのみこころにかなったしかたで神さまをあげるこそが真の礼拝です。自分自身をささげるといふときにも、自分勝手なしかたでささげたならよいというわけではありません。わたしたちが自分を神さまにささげて生きる、そのありかたも神さまの御目にかなうものであることが必要なのです。

そのときにわたしたちを助けてくださるのは聖霊なる神さまです。聖霊はわたしたちにみ言葉を教え、わたしたちがみこころにかなった礼拝をささげることができるよう、導いてくださるのです。

イエスさまに救われたわたしたち、イエスさまの命に結ばれたわたしたちは、主なる神さまを礼拝して生きるのです。自分の体を神さまに喜ばれる、聖なる生けるいけにえとしてささげて生きるのです。そこにわたしたちの喜びがあります。

そしてわたしたちは、何が神さまのみこころであり、何が神さまに喜ばれることであるのかを知っているのです。神さまに祝福された命と人生とは何かということをも知っているのです。聖霊なる神さまがわたしたちとともにあって、み言葉をもってわたしたちを導いてくださるからです。

(木下裕也)

[今週の暗唱聖句] コリントの信徒への手紙一 10章31節

だから、あなたがたは食べるにしる飲むにしる、何をするにしても、
すべて神の栄光を現すためにしなさい。



〈ねらい〉

「イエスさまのことが大好きな子供になるように……」私たちはこう願いつつCS奉仕を担っています。なぜなら神（イエスさま）への愛が増し加えられるごとに、神の栄光をあらわす生き方が、わたしたちの内に実現していくからです。

〈お話〉

パウロさんという人を知っていますか。聖書を書いた人の一人で、神様のこと、イエスさまのことをよく知っていた人です。ただパウロさんは、最初はイエスさまのことが大嫌いで、イエスさまを信じる人を次から次へとつかまえて、牢屋に入

れていた怖い人でした。

でもイエスさまが私たちのために何をしてくださったかを知った時、パウロさんは怖い人からやさしい愛の人になりました。パウロさんは言いました。

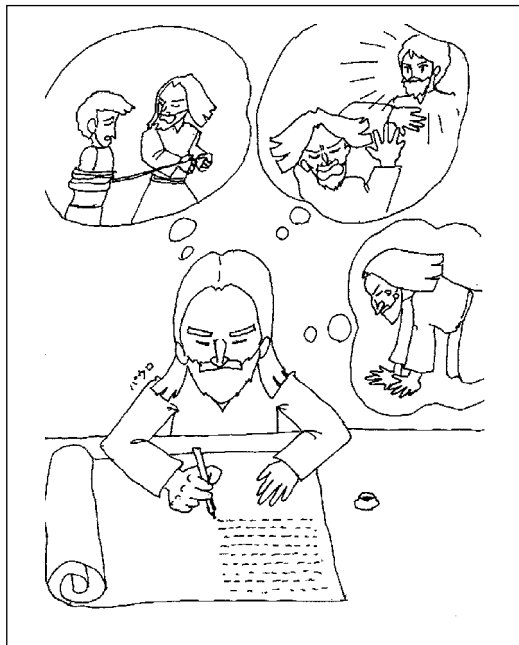
「神様は素晴らしいですよ！

神様はあなたがたを愛しておられますよ！

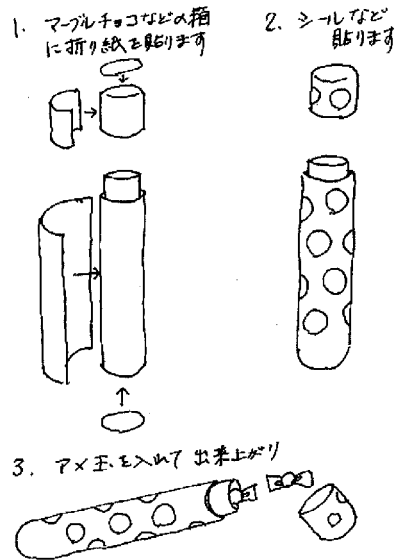
だから神様に喜ばれることをして、

神様の栄光をあらわしましょう！」

神様に喜ばれることとは何でしょう？ それは神様を愛し、家族やお友達を愛することです（問4）。



〈工作〉 アメ玉入れ



〈ねらい〉

神の栄光をあらわすこと具体性を教える。

〈展開例〉

今日の聖書箇所を読んでみましょう。

この世界にある全てのものは神様によって造られ、神様のために造られました。私達も神様によって造られましたから、この世界で神様の素晴らしいさを表すようにと造られました。

また、先週お勉強したように、神様は大切な独り子イエス様を十字架にかけてくださるほど大きな愛で私達を愛してくださっています。

私達は、神様が私を愛してくださっているとわかった時どうするのでしょうか。

皆さんは、お父さんや、お母さんが私のことを愛してくれていることを知っていますね。お父さんや、お母さんが、私を愛していることを知っている皆は、お父さんやお母さんが、言われることを守りたいと思いませんか。

神様は私たちの天のお父さんです。そして、私たち一人ひとり愛して、大切に思ってくださいます。ですから、私達は、天のお父さんである神様の言われることを、守りたいと思い、そのこ

とを守るでしょう。

神様は私達に神様を礼拝しなさいと言われてます。教会学校で礼拝したり、教会で、お父さんやお母さんと一緒に礼拝しますが、それだけが礼拝ではありません。毎日、いつも神様が喜ばれるように生きることが礼拝です。

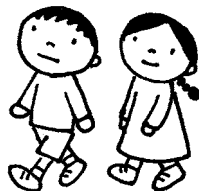
私達は、神様が本当に素晴らしい方であることを、神様が喜ばれるように生きることによって、お友達や、周りの人たちに知らせていきましょう。

神様が素晴らしい方であることを表すことが、「神の栄光をあらわす」ということです。そのためには、何が良いことで、何が神様が喜ばれるか、聖霊なる神様によって聖書から教えてくださいといつも祈って毎日を過ごしましょう。

〈お祈り〉

天のお父様。

私達は神様の栄光を表すことが、何であるかよくわかりません。私達が聖書を読むことによって聖霊の神様が教えてくださるようになってください。そして、私達が神様が素晴らしいお方であることを表していくことが出来るようになってください。



〈導入〉

子どもカテキズムを読んで子どもたちと一緒に文章を読み、答の部分から話を展開していく。

問1 私たちは 何のために 生きるのですか。

だれのこと？ つまり目標とか目的、何を目指すのかということ。

答 私たちが生きるのは、私たちの神さまを知り、神さまを喜び、

☆1

先週学んだところですね、と確認。

神さまの栄光をあらわすためです。これが私たちの喜びです。

☆2

〈ポイント〉

☆1「神さまを喜び」というのはどういうことか。

☆2「栄光をあらわす」というのはどうしたらよいかを考える。

〈展開例〉

みんなはどんな時に「喜んで」いるかな？嬉しい時、楽しい時、「やったー！」と思う時かな。何かを楽しみにしてワクワクするのも喜んでいられる時かもしれないね。“神さまを喜び”というのはそういうこと。神さまが私たちにしてくださっていることを嬉しいなどと思うこと、神さまといっしょに過ごす（聖書を読んだり、お祈りしたり、讚美したりする）ことを楽しいなどと思うこと。神さまの救いのみわざを「やった！」と思うこと、イエスさまの来臨をワクワクして待つこと……。こういうこと全部が“神さまを喜び”ことだと思えます。

それでは☆2の「栄光をあらわす」というのはどういうことでしょうか？まず「栄光」とは何か。平たく言えば“神さまのすごさ”です。神さまがどれほどに素晴らしいお方かということです。ではそれを私たちはどのようにしてあらわせばよいのでしょうか。

先生はこの前月食を見ました。月食というのは、

月と太陽の間に地球が並んで、月の光が少しずつ隠れて、そこに月はあるのに見えなくなるという現象ですが、そんな難しい宇宙のメカニズムのことはどうでもよくて、ただただ美しく不思議な光景に思わず「神さますごい！」としか言葉が出ませんでした。他にも例えば景色のいいところで、きれいだなあすごいなあと思うことがたくさんあります。月や太陽、地球、自然はすべて神さまがお創りになりました。創られた物たちは、存在していることで、神さまの栄光をあらわしているのです。私たちは神さまの子どもとして、今ここに存在しているだけでも神さまの栄光をあらわしています。神さまを礼拝することも大切なことです。日曜日の朝の礼拝の時間、でもそれだけではありません。自分のすべてを神さまにささげて、神さまのために生きること、これも礼拝ということが出来ますね。神さまに喜ばれる仕方です。生きる＝神さまの栄光をあらわす、このことが出来るようにお祈りしていきましょう。

〈お祈り〉

あなたのことを思い喜ぶ気持ちを与えてくださり感謝です。何をしてもあなたの素晴らしさを覚えてできるようにしてください。

「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい。」

(コリントー6:20)

「だから、あなたがたは食べるにしろ飲むにしろ、何をするにしても、すべて神の栄光を現すためにしなさい。」

(コリントー10:31)

聖書によれば、そもそも人間は「神の栄光をあらわす」ために、神のかたちに似せて創造されたのです(ハイデル問6)。

キリストによって再創造(=罪から命への救い)され、この本来の目的を回復されることで、私たちは人間本来の輝きを取り戻し、心に安心を得ることができるのです。(例:凶器としてではなく、料理のために用いられることで、包丁が美しく輝くように。)

「私の栄光を表しなさい」と神様は私たちに呼びかけておられます。そして、栄光を表すために、一人ひとりに一番ふさわしい道を用意しててくださいます。牧師や宣教師に召される人もいれば、困っている人や貧しい人のために奉仕する仕事に召される人もいます。その他にも、学校の先生、大工さん、花屋さん、コックさん、政治家、弁護士、サッカー選手、また子どもを育てるお母さん……色んな仕方、で、「神様の栄光を表すように」と、一人ひとりが使命を与えられます。

それぞれにそれぞれの人生が与えられますが、大切なことは、どんな職業・働きにおいても、「思いと言葉と行い」のすべてにおいて「神様はすば

らしい方である」と証しすることです。

① 思いにおいて

私たちがこの心を神に向け、神を信じ、畏れ、敬い、ほめたたえ、愛することが、神の栄光をあらわす第一歩です。ご飯を食べてる時も、自転車に乗ってる時も、遊んでいる時も、デートしている時も、どんな時でも神様に心を向けていることです。

② 言葉において

私たちがこの口を通して、神に祈り、賛美を歌い、常に信仰を告白し、与えられた救いを証しすることで、大いなる神とその御業のすばらしさを言い表すことができます。鼻歌がわりに讃美歌が出てくるようになったら大したものですよ！

③ 行いにおいて

対神：日曜日の礼拝を重んじ、毎日御言葉に聞き、祈り、賛美するという生活によって、私たちは具体的に神の栄光をたたえます。

対人：神の与えてくださる愛の教え(律法)に従って、神を愛し隣人を愛し、周りの人たちから尊敬を集めるような真摯な生き方ができれば、私たちの内に生きるイエス・キリストのすばらしさがこの世界にあらわされます。

対世界：私たちがそれぞれに与えられた賜物を用いて、様々な文化活動(文学、芸術、音楽、政治 etc)に励み、神が創造されたこの世界の美しさを引き出す時、神のすばらしさがあらわされます。



テキスト ルカによる福音書 15章11～24節

この箇所は、15章の「見失った羊」「無くした銀貨」「放蕩息子」の三つの譬え話の三つ目にあたる。1～2節のファリサイ派、律法学者の不平と、25節以下の兄の態度が呼応する話となっている。徴税人や罪人を導き教えられた、主イエスの振る舞いの正統性を擁護する話でもある。また、失われた者はもともと神にとって大切な存在であり、それを探す働きが、主にとっても大切な働きであり、失われた者が回復された時には、「大きな喜び」が天にあるということが、繰り返し記されている(7節、10節、32節)。

12節で弟が父親に「財産の分け前をください」と自ら申し出ているが、財産の分割に関しては旧約聖書に規定があり、長男が他の兄弟の二倍の分け前を得る定めになっている(申命記21:17)。しかし、自らそれを要求することは、慣習から逸脱しており、たとえ譲り受けた場合でも、父親の生前中は使わないのが常であった。すると、13節で、「何日もたたないうちに」全部をお金に換えて「遠い国に旅立った」とは、弟が親子の関係を否定し、父と共にいることを拒んだということの意味する。遠い国とは、「豚」を飼っていることから、異教の国、異邦人の国であろう。弟はそこで、放蕩の限りを尽くして自堕落な生活をする。そして大切な父からの財産を全て使い果たしてしまうのである。全てが無くなったとき、その地方で飢饉が起こる。食べるにも困りだした弟は、ある人のところに「身を寄せ」「豚の世話を」することになる。「豚」はユダヤ人には汚れた生き物(レビ11:7)で、これはやりきれない屈辱をなめたと理解できる。16節には、その「豚」の食べるいなご豆でも食べたいほど飢えていたが、誰も食べ物をくれなかった、とある。それだけ飢饉が酷かったとも考えられるが、気遣ってくれる友達もいなかったのである。ユダヤ人の諺に、「ユダヤ人がいなごまめにしか頼れなくなったら、そのとき悔い改める」というものがある。その諺の通

り、飢えと孤独の中で悔い改めが起こっている話である。

17節で、「我に返った」弟は、父の傍に戻る決心をする。18節で、この国を「たつ」ことにしたとあるが、「たつ」とは「悔い改め」(7,10節)を表す表現である。悔い改めとは、神に対する無条件の信頼と服従への立ち返りを意味する。また18節の「天」とは「神」に関する婉曲な表現で、ルカ18章3節、20章4節にも現れており、弟はこの罪が父だけではなく、神に対するものであることを認めているのである。また19節で「もう息子と呼ばれる資格はありません」と、自らをへりくだらせている。砕かれた心で父のもとに戻って行く流れとなる。

ここで、大きく行為の主体が父親に変わる。20節で、「まだ遠く離れていたのに」「見つけて」「憐れに思い」「走り寄って首を抱き」「接吻した」と、立て続けに父親の行為が記される。「憐れに思う」ということは、ナインのやもめが息子を失ったことに対して主が抱かれた心、良きサマリア人が強盗に襲われた旅人に対して抱いた感情と同じ用語である。また、「接吻」するとは、赦す、受け入れるというしるしで、ダビデ王が息子アブサロムを赦したときも接吻をしている(サムエル下14:33)。21節で弟は、18～19節と全く同じ言葉を繰り返そうとするが、それを遮る父親の言葉が記されている。「いちばん良い服を着せ」「手に指輪をはめ」「足に履物を履かせ」た。これらは息子を復縁させる行為であり、このみすばらしい者は決して奴隷ではないという意味である。弟は「雇人の一人にしてください」というくだりだけは言えなかった。それは、父親の愛を退けることになるからである。さらに父親は、23節で特別な客をもてなす行為である「肥えた子牛を屠る」ように命じている(創世記18:7、サムエル下28:24)。父親の喜ぶ訳は、自分の「息子」が「生き返り」「見つかつた」からなのである。(袴田清子)

子どもカテキズム 問2

子どもカテキズム

問2 どうしたらそうなりますか。

答 主イエス・キリストを信じて救われること、神さまの子どもとされることです。

ウェストミンスター小教理問答

問34 子どもとされることとは、何ですか。

答 子どもとされることも、神の一方的恵みによる決定です。

それによって私たちは、神の子らの数に入れられ、
神の子らのあらゆる特権に権利を持つものになるのです。

〈一つの喜び〉

「救いの喜び」「救われた喜び」とは何であるのか。それは、いろいろな喜びを挙げることができるでしょう。子どもカテキズム問2では、とくに「神の子とされる喜び」であると語られています。「主イエス・キリストを信じて救われること」と「神さまの子どもとされること」は、決して別の事柄ではなく、一つの事柄です。一つのことを別の言葉で言い表しています。

〈神の子とされる恵み〉

神の子とされることは、一方的な恵みとしての神の決意であり、神の御霊の働きです。聖霊により主イエス・キリストと結びつけられて、私たちは神の子とされます。それは、主イエス・キリストが神の独り子であられ、本来神の子であるただ一人のお方です。そのキリストと結び合わせられることによって、私たちはいわばキリストの義兄弟とされ、神の養子とされて、神の子とされるのです。

この神の子とされる恵みをいただいて、私たちは、神の子らのあらゆる特権にあずかります。すなわち、御父を「アッパ父よ」と呼んで祈る者とされ、神の国を受け継ぐ者とされます。私たちの創造主なるお方、その意味では私たち被造物を超越しておられるいと高きお方を、私たちは、「アッパ父よ」とお呼びする者とされるのです。御言葉と御霊にあって神を礼拝し、親しい交わりが与えられ、このお方に信頼し、すべてを期待すること

が許されます。これが、神の子の恵みであり特権です。

〈愛とへりくだりの神〉

ここには、神の愛とへりくだりがあると言うべきです。私たちの側には、私たちが神の子として扱われるべき何の理由もありません。私たちは被造物に過ぎないのであり、創造主なるお方との間に、「父と子」に類比されるような人格的な関係を求めることは、どうい考えられることではありません。このことは、ただ私たちを愛してくださっている神の愛と、神のへりくだりによって与えられている恵みなのです。

「放蕩息子のたとえ」は、この神の愛とへりくだりをたいへん印象深く描き出しています。放蕩息子を待ち続けて彼を迎え入れる父の姿に、神の愛とへりくだりを見るのです。父は放蕩の限りを尽くした息子を責めることなく、受け入れて、彼にすべての特権を与えます。この背後に主イエス・キリストの十字架があることを見逃すことはできません。御父は、私たち罪人を愛して神の子としてくださるために、御自身の愛する独り子を十字架に引き渡してくださいました。それほど大きな神の愛とへりくだりによって、私たちは神の子とされています。この神の愛を知るところに、神の子とされた喜びがあります。（望月 信）

※第13号（2004年5月9日）より再掲載。

テキスト ルカによる福音書 15章11～24節
子どもカテキズム 問2
参照カテキズム ウェストミンスター小教理 87、同大教理 76

(単元のねらい)

今回は、放蕩息子の譬えにより、「救われた喜び」について子どもたちと共に考えていくこととなります。子どもたちが本当に神さまに出会い、救われていることの喜びに入れられるために、二つのことをしっかりと教えていくことが求められます。

- ①主なる神さまはいつもあなたと一緒にいてくださり、すべてをご存じであること。
- ②子どもたち自身が神さまの御前に立ち、自らの姿を顧み、悔い改めて、信仰を言い表すこと。

子どもたちに対して罪を語っていくことは難しいですが、自分の姿、自分の罪がはっきりと語られ、理解されなければ、本当の意味での救いの喜びを得ることは出来ません。その上で、それでもなお神さまが共にいてくださり、罪を赦し、救ってくださっていることを優しく、心温かく語ることにより、聖霊の働きも相まって子どもたちも救いの喜びに導かれるのです。

神さまはあなたのすべてを知っています

大きな農園を経営している主人の所に、二人の息子がいました。多くの財産を持っており、多くの家畜と何十人にもおよぶ労働者を雇っていたのではないのでしょうか。兄弟は、農園で働いている限り、失業することもなく、食えばぐれることもありません。また、主人であるお父さんがリタイヤした時には、お父さんの持っている財産をすべて引き継ぐことが約束されています。周囲の人たちからすれば、何の苦労もすることなく財産もあり、食料も満たされていることから、うらやましがられていたのではないのでしょうか。

しかし兄弟は、二人共、このような生活に不満を持っていました。今回は、弟のケースだけを考えていきます。弟にとっては、多くの財産を受け継ぐ約束があったとしても、農園の経営は兄が受け継ぐのであり、自分はいつまでたっても使用人に過ぎないのだと思っていました。そして自由になりたいと思いました。だからこそ、弟はいつまでも農園に留まるのではなく、お父さんの持っている財産を先にもらって、好きなように生活しようと考えました。そのために弟は父親に「お父さん、わたしがいただくことになっている財産の

分け前をください」(12)と申し出るのでした。

そして弟は、父親から譲られた財産をすべて金に換えて、家を出て行きます。弟は、「これで一生、好きなようにして、生きることが出来るぞ」と思ったのではないのでしょうか。そして自分のことを誰も知らない遠くの国に行き、毎日のように好き勝手に遊んでいたのです。

一生遊んで暮らしていけると思っていたお金は、泡のごとく、見る見るうちになくなっていきます。お金がなくなると、今まで一緒に豪遊していた友だちは、皆いなくなります。金の切れ目が縁の切れ目です。おごってくれないのであれば、構ってくれません。弟は、その日の食べるものにも困り始め、ある人の所で働かせていただくことにしました。豚の世話をしながら、何とか生活しようとはしますが、十分に食べることはできません。空腹を満たすために、豚の食べるいなご豆さえも食べ始めたのです。この時まで、弟は「もう自分はひとりぼっちだ。だれも助けてくれる人などもういない」と思っていました。

しかし、ふと考えました。「お父さんのところでは、雇い人も腹一杯食べ物食べていた。もう

息子と呼ばれることはないだろうが、雇い人の一人にしてもらい、そこで働いて、食べさせていただこう」と。そう思うと、弟はすぐさま父の所に戻って行ったのです。弟は、帰りながらも、「お父さんは赦してくれないのではないか。雇い人にもしてくれないかもしれないな」との不安な思いもよぎったのではないのでしょうか。

しかし、弟の不安は、一掃されてしまいました。弟が帰っていくと、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけると、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻したのです(20)。父親にとって、どこにしようと、何をしようかと、息子は息子なのです。今まで何をしていたのかは、関係ありません。立ち直り、これから一緒に暮らしていけることにこそ、喜びがあるのです。だからこそ、帰って来た弟のために、主人である父親はいちばん良い服を持ってこさせ、指輪を与え、履物を履かせ、そして豪華な食事をもてなして祝宴を始めるのです。

みんなが神さまを信じるとは、まさに、この弟息子が主人である父親に喜んで迎えられたように、天国においては喜びとなるのです。神さまはみんなが生まれる前から、みんなのことを知っていてくださっています。みんなが、まだ教会に来ていなかった時も、教会から離れている時も、教会に来ていても「神さまなんか信じられない」と思っている時も、神さまはみんなのことを見守ってくださっていたのです。そして弟がお父さんのことを思い出して、雇い人でも良いから帰ろうと思いついて帰って行ったように、みんなが神さまの所に戻ってきて、神さまを受け入れ、信じる時、天国では祝宴があげられるような喜びに満たされるの

です。

弟は、お父さんの所に帰るに先立ち、財産を食いつぶしてしまったこと、お父さんを裏切ってしまったことなどの罪があったことを告白し、お父さんに赦してもらおうとしましたが、お父さんは何も聞くことなく、無条件に赦してくださったのです。神さまの御前に立つみんなも同じではないのでしょうか。教会から離れていた時、「神さまなんか信じられない」と言っていた時、神さまを裏切ることを行っていたばかりか、嘘をついたり、悪いことをしていたのではないのでしょうか。神さまは、こうしたみんなの罪を知っておられます。その上で神さまは、イエスさまの十字架によって、みんなの罪を贖ってくださったのです。そして神さまは、みんなのことを無条件に受け入れてくださいます。

弟が自分はお父さんに悪いことをしたことを話そうとしたように、みんなも自分自身の罪、弱さを確認して、悔い改めることは、とっても大切なことです。自分自身の弱さや罪を、神さまがみんな、イエスさまの十字架によって赦してくださったことを知るにより、神さまを信じる信仰は、強くなっていくのです。

だからこそ、私たちは、自分自身のもっている罪をちゃんと確認しなければなりません。その上で、無条件に神さまが私たちを愛して、イエスさまの十字架によって罪をすでに赦して下さっており、救いに入れてくださっているのです。自分の力ではなく、神さまの一方的な恵みによって救われているのです。だからこそ、私たちは、神さまによって与えられた救いに、感謝と喜びをもって、毎日を生きていくことができるのです。

(辻 幸宏)

[今週の暗唱聖句] ルカによる福音書 15章24節

この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。



〈ねらい〉

神さまの大きな愛を知り、伝えましょう。

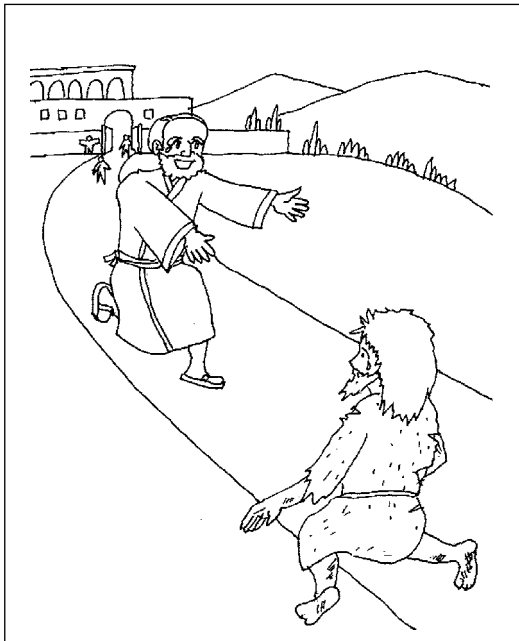
〈お話〉

今日は“ほうとうむすこ”のお話です。「ほうとう」とは「あそんでばかりいる」という意味です。お父さんからたくさんのお金をもらって、家を出ていつまでも遊んで暮らしたいと思った息子がいました。その人はある日お父さんにお金をほしいという、お父さんはたくさんのお金をくれました。息子はさっそく家を出て一人暮らしを始めました。息子はお父さんに言いました。「もう帰ってきません。僕一人で生きていけますから。」息子はお金がたくさんあったので、働きもせず、毎日遊んで暮らしました。

しかしやがてお金がなくなりました。お金がなくなるとどうなりますか。食べるものも、着るものも、住むところもなくなってしまいます。息子は初めてわかりました。お父さんのところがよかった……。

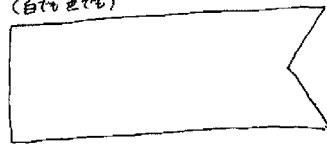
「もう帰りません。」こう言って家を出た息子でしたが、お父さんのところへ帰る決心をしました。家に近づくとお父さんが走り寄ってきて息子を抱きしめました。そして言いました「死んでいた息子が生き返った！ さあお祝いだ！」

なんてやさしいお父さん。まことの神さまもこのお父さんのようです。あそんでばかりいても、神さまのところに帰ってくるのならいつでもあたたかく迎え、救ってくれるのです。

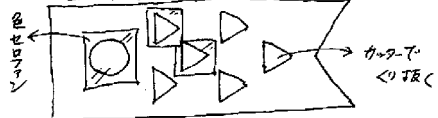


〈工作〉 こいのぼり

1. 画用紙を下の形に切る（大きさは適当に）
（白紙でも）



2. 目とかわらこをカッターでくり抜いて作る。
上から色セロファンを貼る。



3. 窓に貼って飾ると太陽の光に照らされてきれいでね。



〈ねらい〉

救われた喜びは、主イエス・キリストを信じて神の子どもとされることによって与えられるものであることを知らせる。

神の子どもとされるのは、神の一方的な恵みと愛による決定であり、聖霊の働きによることを悟り、子どもたちが、神を正しく知り、自らの罪を自覚し、悔い改め、信仰へ導かれるように祈る。

〈展開例〉

お父さんからもらった財産を、毎日遊んで全部使ってしまい、ごはんも食べられなくなった弟は、どんなにお腹がペコペコで辛かったでしょうね。

○その時、弟はどんなことに気付きましたか？

(17節)

そして、どうしようと思いませんか？

(18、19節)

弟は、お父さんからもらった大切な財産をなくしてしまったり、家を飛び出して自分勝手なことをして、神様とお父さんを悲しませていたことがわかって、お父さんに謝りに行こうと決心しましたね。(罪の自覚・悔い改め)

○弟がお父さんの家に向かっていた時、お父さんはどうしましたか？(20、22～24節)

お父さんから離れ、悪いことをした弟でしたが、お父さんにとっては大切な息子でしたから、ずっと愛し続けてくださり、悪かったことを責めたり、怒ったりしないで、赦してくださいました。それだけでなく、息子が「生き返り」「見つかった」からと、大喜びで皆を集め最高のパーティーを開いたのです。

○お父さんに赦してもらい、帰って来たことを喜んでもらった弟はどんな気持ちだったでしょう？

お父さんに息子として受け入れてもらい、それはそれは嬉しかったことでしょう。そして、お父さんに心から感謝して、これからは、お父

さんに喜んでもらえるようにしようと決心したことでしょうね。

○お父さんは「天のお父様である神様(天の神様)」、弟は「私たち」と同じではないでしょうか？

天の神様は、私たちとずっと一緒にいてくださり、愛し続けてくださっています。しかし、私たちはそのことを知らなかったり、知っていても、弟のように神様から離れて、悪いことを考えたり、言ったりして神様を悲しませていませんか？神様はずっと私たちが神様のもとに帰って来るのを待っていてくださいます。

けれど、悪いままで帰ることはできません。私たちが神様の子どもとされ帰ることができるように、絶対に自分でなくす(消す)ことのできない悪い所(罪)をイエス様が十字架で死んでおわびしてくださって、全部赦してくださいました。私たちは、何もしなくても聖霊の神様によって自分の罪に気付かせられ、赦していただくために、神様の所に帰るだけでいいのです。弟がお父さんの所に帰り、喜ばれたのと同じように、私たちが神様の所に帰り、神様を信じて、お言葉をよく聞いていく時、天国は、喜びでいっぱいになることでしょう。

〈お祈り〉

天の父なる神様、

今日、お父さんと息子の話をきき、神様と私たちのことを考えることができ、ありがとうございます。また、私たちがどんなに神様から愛されているかを知ることができました。ありがとうございます。

私たちの罪を赦し、悪と死からお救いください、神様の子どもにしてください。喜んで、これからも神様を愛し、神様と一緒に大きくなるようにしてください。

〈ねらい〉

自分の力ではなく、神の一方的な恵みにより救われることを確認しつつ、悔い改めることにより、神の子とされる喜び、神と共に歩む幸いな生き方があることを学びたい。

〈展開例〉

- みなさんは、家出をしようと思ったこと、または、家出をしたことがありますか。家出までいなくても「もうお母さんなんか嫌い」「お父さんは、厳しすぎるからイヤだ」とお父さんやお母さんに背を向けたことがあるかもしれませんね。私たちが一番幸せに生きることができる場所から離れるとどうなるのでしょうか。
- 弟がお父さんから分け前をもらい、勝手に家を出て行きました。大きな農園で苦勞なく満たされて暮らしていた弟は、なぜ出て行ったのでしょうか。何不自由ない暮らしに気づかず、もっと自由に自分の好きなように生きたいと思ったのでしょうかね。弟は財産をすべてお金に換え、遠くの国に行き、毎日好き勝手に遊びました。お金があるうちは友達いましたが、お金がなくなると誰も相手にしてくれなくなりました。そこに飢饉が起こり、食べるにも困り出した弟は、豚の食物いなご豆でも食べたいほど飢えていました。食べ物もない飢えと友達もない孤独のなか、死ぬかもしれないという悲惨な状況で、弟は何を考え、気づいたのでしょうか。飢えと孤独のどん底のなかで、弟は自分自身の悲惨さ、罪深さに気づき、お父さんの家に戻る決心をします。「お父さんに赦してもらい、雇い人にしてもらおう」と、悔い改めて家に向か

うのです。

- ここで、お父さんに目を転じてみましょう。お父さんは、出て行った弟のことを心配し、ずっと帰りを待ち続けていました。だから、遠くに弟の姿を見つけたときは、走り寄り接吻し、家に招き入れたのです。財産を食い潰し、ぼろぼろになって帰ってきた弟をお父さんは変わらず愛していました。弟が悔い改めて帰ってきたから愛したのではなく、ひたすら愛していたのです。弟は拒絶されるかもしれない、罪を償わなければならないと思って戻ったのに、お父さんは責めもせず受け入れてくれました。弟はどれほどうれしかったことでしょうか。このとき、救われる喜びを知ったのです。
- この弟とお父さんの姿は、私たちと神さまの関係を表しています。私たちは、「神さまなんかいらぬ」「もっと自分の好きなように生きたい」と、自己中心で神さまから背を向ける罪深い者です。私たちは罪をみて情けなく思いますが、神さまはこのような私たちをずっと愛し続け、罪から救おうとイエス様を送ってくださいました。このイエスさまを信じ救われるとき、神さまの子とされ安心して歩むことができます。これが、感謝と喜びに生きる一番の幸せです。

〈お祈り〉

神さま、私たちが神さまの子どもであること、神さまとともに歩むことが一番の幸せであることを忘れないようにお導きください。



放蕩息子のたとえは、とにかく極端なたとえです。度を過ぎた、もはやバカ親と言うしかないような愚かな親の愛が描かれています。こういう親が実際にいたら、私なら眉をひそめます。本当に悔い改めたのかどうかも分からない、ろくでなしの息子を喜んで迎えるのですから、ひどいバカ親です。でも、こういう極端なたとえでしか、神様の愛は、表せないのです。神の愛は、私たちの誰もが納得できるような、常識的な愛ではありません。そんな程度では、罪人を救済することはできません。私たちの救いは、神様のありえない愛をいただくことで、はじめて成り立つ、とてつもなくありがたいものです。

〈子どもたちと考えてみましょう。〉

もしも、この赦された放蕩息子がもう一度父を裏切り、財産を使い果たしたら……。

あなたがお父さんならどうするでしょうか？ このたとえに出てくるお父さんはどうするでしょうか？

「救われた喜び」というようなことは、できるだけ極端に考えてみなければ分からないものなのです。

以下は私の考えです。よろしければ参考にしてください)

私は、人間というものはほとんど信用できないと思っている人間ですので、こういう放蕩息子のような人は、絶対また同じことを繰り返すと考えてしまいます。

でも、もし彼がもう一回財産をくいつぶしたとしても、きっとこの父は駆け寄って、彼を抱きしめるのだと思います。何回同じことを繰り返しても、何度でも「死んでいた者が生き返った」と言って祝宴をあげるはずです。なぜならそれが、イエ

ス様の教えてくださる神の愛の姿だからです。

人間には理解できないし、実践もできないようなことが言われています。でもイエス・キリストの十字架と復活において表された神の愛というのは、そういうものなのです。それは神の子イエス・キリストを殺した人間たちの罪まで赦し、新しい復活の命に招かれる神の愛です。

この神は、もう決して罪人を見捨てることはありません。私たちは神を見捨てるものです。何度でも神を裏切るものです。それが私たちです。でも神は、そんな私たちを探し続け、帰って来いと待っていてくださる方なのです。そして私たちが、その思いを何度裏切ろうとも、毎日毎日、正しく生き直す機会を与えてくださいます。

私たちは裏切っちゃうのです。毎日毎日、情けないくらいに神を裏切っちゃうのです。でも神は、毎日毎日、もう一度ここから新しく始めなさいと、未来を開いてくださって、この弱い私たちが本当に生き返ることができるようにと強い心を与え、信仰を与え、神の道を歩ませてくださるのです。それが「救われる」ということです。

放蕩息子もそうでした。「死んでいたのに生き返った」と父は喜びましたが、息子が自力で生き返ったわけではありません。彼は行き詰って帰ってきただけです。彼を生き返らせたのは、そしてこれから生き返らせていくのは、この父の愛です。この父が待っていてくれた、もう一度やりなおす機会を与えてくれた、その愛がこの馬鹿息子を生かすのです。

お前が何度裏切ろうと私はお前を見捨てないと神が言ってくださるから、私たちもこの神の愛に打たれて、本当の悔い改めと、生き返りに向かうのです。



テキスト ルカによる福音書 19章1～10節

単元の主題が「救いの喜び」とされていますように、カテキズム問2の前半「主イエス・キリストを信じて救われること」によって、「神さまを喜び、神さまの栄光をあらわす」（問1）者となることを教える箇所が選ばれています。

(1) 徴税人の頭ザアカイ

主イエスは、エルサレムへと向かう途上で、エリコという町へ来られました。エリコは「パレスチナで最も肥沃な地」と呼ばれるほど豊かであったので、重要な課税地であったと思われます。ザアカイは、このエリコで「徴税人の頭」をしていました。当然、「金持ち」であったわけです。この世の地位も富も持っていました。

その一方で、敬虔なユダヤ人たちの間では、罪人と見なされていました。当時、徴税人であるというだけで罪人と見なされていましたが、ザアカイの場合は特に「徴税人の頭」です。また8節からは、実際に不正な取立ても行なっていたと推測されます。メシアと最も関係のない存在、終わりの日の救いに与る可能性のない者と見なされていたわけです。

2 主イエスとの出会い

主イエスがエリコに来られたときには、人だかりになっていたのでしょうか。しかし、背の低いザアカイのために道を開けてくれる人はいませんでした。「いちじく桑」は、幹が太く、低い位置から枝が出る木なので、背の低いザアカイにも登りやすかったと思われます。彼は、先回りして、いちじく桑の木に登りました。

ザアカイのところまで来られた主イエスは、「今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」と言われました。これが「今日、救いがこの家を訪れた」（9節）となる出来事の始まりです。主イエスは、家族も共に住むザアカイの家に入り、おそらく食事をも共にしてくださいました。そして、主イエスが共に過ごしてくださいましたこの日に、「救いがこ

の家を訪れた」のです。

主イエスとの間にどのような言葉が交わされたかは書かれていません。しかし、ザアカイはキリストと共にある喜び、救いの喜びに満たされたのでしょうか。そして、今までの生き方を改めて神に従う道に立ち帰ることを約束しました。「財産の半分を貧しい人々に」施すことと、「だまし取っていたら、それを四倍にして」返すことです。それはこの世の富を捨て、「隣人を自分のように愛する」という神の律法に従う道です。（不正を行った場合の賠償については、民5章7節、出エジプト21章37節～22章3節を参照）。

(3) 失われたもののために

主イエスは、ザアカイが「罪深い男」（7節）と言われていたにもかかわらず、「あなたの家に泊まりたい」と言ってくださいました。この「泊まりたい」という言葉は「泊まらなければならない」という強い言葉です。ザアカイの希望を尋ねたのではなく、主イエスが強い意思を持って、ザアカイの家で共に過ごしてくださいました。それは、主イエスが「失われたものを捜して救うために来たからである」（10節）と自ら言われる目的のためです（参照ルカ15:32）。

主イエスが近づいてくださることによって、ザアカイは「喜んで」（6節）主イエスを迎え、主イエスと共に過ごして、御心になんて生きること、すなわち神の栄光を表して生きることを決意します。

主イエスは、ザアカイが神に立ち帰って信仰を持ち、「救い」がそこを訪れたことを喜んでくださいました。そして、その「救い」が信仰の父アブラハムの子（9節）としての信仰のゆえであることを教えられました（ガラ3:7）。

私たちもまた、「失われた者」であった私たちのために来て下さった主イエスを信じて救われ、神の栄光を表す喜びに生きましょう。（大西良嗣）※第29号（2008年4月20日分）より再掲載。

子どもカテキズム 問2

子どもカテキズム

問2 どうしたらそうなりますか。

答 主イエス・キリストを信じて救われること、神さまの子どもとされることです。

ウェストミンスター小教理問答

問34 子とされることとは、何ですか。

答 子とされることも、神の一方的恵みによる決定です。

それによって私たちは、神の子らの数に入れられ、
神の子らのあらゆる特権に権利を持つものになるのです。

〈信仰の根底にある喜び〉

信仰とは喜びであると申し上げることができません。子どもカテキズム問2には、その文言にはあらわれていませんが、一つの願いが込められています。それは、「喜び」を知ってほしいということ、また、「喜び」に生かされてほしいということです。すでに問1において、「神を知り、神を喜ぶ」ことこそが私たち人間の目的であり、永遠に続くわざであると学びました。その「喜び」を自らのものにしてほしいと、そう願うところで、この問2が語られています。

この「神を喜ぶ喜び」とは、ほかでもない主イエス・キリストにあって救われた喜びから始まります。「救われた喜び」を知ることにより、「神を喜ぶ」ことが始まります。ですから、ザアカイの物語をとおして、ぜひ「救われた喜び」を学んでいただきたいのです。

〈神の恵みの先行性〉

この単元の表題は「神の子とされた喜び」です。問2で「神さまの子どもとされる」とあるとおり、受け身、受動態の言葉であることが大切です。

もちろん、救いとは私たちの決断でもあり、主イエス・キリストを信じるといふ私たちの主体的な決断が求められることです。しかし、その主体的な決断さえも、神の御業であり、何よりも神の恵みが先立っていることを告白せざるを得ないというのが、信仰者なのです。

この単元では、ザアカイの物語が扱われます。ザアカイと主イエスの出会いを物語る中で、まず主イエスがザアカイを求めてエリコに来られたこと、主イエスがザアカイに呼びかけて招いておられることに注目すべきでしょう。主イエスが、ザアカイの信仰的な決断と応答を引き出しておられるのです。神の恵みと招きの御業が先立っていることが明らかにされています。

〈神の愛を知る喜び〉

救いの喜び、救われた喜びとは、主なる神が私たちのことをご存じであり、愛してくださっていることにあります。私たちを愛する神の愛を知ることこそ、救われた喜びがあります。

その神の愛は、とりわけ主イエス・キリストの十字架に示されています。それは、ザアカイの場合にもそうであって、主イエスはザアカイの罪を責めることなく、ザアカイの罪をすべて担って十字架につけられてくださり、それ故に、ザアカイを赦しておられるのです。

私たちを愛して、私たちの罪を担って十字架につけられてくださった主イエス・キリスト。このお方の愛を知るところに、私たちの救いの喜びがあり、神を喜ぶことが始まるのです。(望月 信)

※第13号(2004年5月2日)掲載分を一部訂正して再掲載。

テキスト ルカによる福音書 19章1～10節
子どもカテキズム 問2

〔単元のねらい〕

ザアカイが主イエスと出会い、キリスト者とされことは突然の出来事でした。神の子とされ、キリスト者としての歩みは、神さまからの一方的な働きかけにより、突然始まることがあります。私たちが主イエスと出会うことにより、私たちは過去の自分と決別し、新生し、神の子としての喜びを伴った人生が始まります。主イエスと出会うことは、一方的な出来事ですが、それは一方的に与えられる恵みであり、ここにこそ生きる希望、喜びがあります。ザアカイの出来事とおして、子どもたちが主イエスと出会い、希望と喜びの歩みを始めるきっかけとしていただきたい。

「ザアカイ」と呼びかけるイエスさま

エリコの町にザアカイという徴税人がいました。徴税人とは、当時この地を支配していたローマに代わって人々から税金を取り立てていた人たちです。徴税人は、ユダヤの人々からはひどく嫌われていました。ユダヤ人でありながら、ローマの手下として働いていたからです。そればかりではありません。その上に、ローマからは納付する税金が決められています。徴税人はそれ以上に取り立てることにより、私腹を肥やし、裕福な生活をしてきたからです。ザアカイは、その徴税人の頭であったため、なお豊かな生活を送っていたでしょう。

ある時、この町にイエスさまが来られるとの知らせが行き渡ります。この頃、イエスさまは有名人であり、どこに行っても、イエスさまに会いたい人ばかりで、イエスさまのまわりは人ばかりです。一人で寂しいザアカイは、イエスさまに出会うことによって、何か心が満たされることがあるのではとのかすかな期待を持ち、イエスさまに会ってみたいと思います。

しかしザアカイは、背が低かったために、多くの人たちに遮られて、イエスさまを見ることはできません。友だちがいるならば、前に入れていただき、見ることも出来たかも知れませんが、ザアカイには親しい友だちなど一人もいません。たと

え事前に前の方に座って見る場所を確保したとしても、人々から嫌われているザアカイは、人々によって押し退けられて、見る事が出来なかったのではないのでしょうか。

何とかしてイエスさまを見たいと思ったザアカイは知恵をしばって考えます。そして先回りして、いちじく桑の木に登り、上からイエスさまを見ようと考え、実行したのです。こうすれば人々が来ても、押し倒されることもなく、イエスさまを見ることが出来るだろうと思ったのです。

ザアカイの考えは的中しました。イエスさまが来られた姿を見ることが出来たのです。ザアカイは嬉しかったことでしょう。

いや、ザアカイにとっては喜びをはるかに超える驚きの状況が生じます。イエスさまがその場所に来ると、上を見上げて、ザアカイに対して、「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」と優しく語りかけてくださったからです。ザアカイにとっては、突然の出来事でした。なぜなら、みんなから嫌われており、独りぼっちであったザアカイに対して、イエスさまが声をかけてくださったからです。ザアカイはいちじく桑の木から転げ落ちるように、降りて来たのではないのでしょうか。

イエスさまは、通りすがりのエリコの町の一徴税人に過ぎないザアカイの名前を知っておられたのです。ザアカイは、「なぜイエスさまは私の名前を知っておられるのだろうか」と考えたに違いありません。しかし、イエスさまは神さまであり、ザアカイのことも、まわりにいたユダヤ人の一人ひとりのことも、そしてここにいる先生のことも、そしてみんなのことも、一人ひとりご存じです。イエスさまは、みんなの名前を知っているだけではありません。みんなが生まれた時から、どのように生活して、今日も何を行い、何を語り、何を考えてきているのか、そのすべてをイエスさまはご存じなのです。

もちろん、ザアカイも驚いたに違いありません。しかしザアカイは、イエスさまは神さまだし、自分のことをすべて知っておられながらも、このように親しく呼びかけてくださっているのだ、ということを知るのです。そしてザアカイは、イエスさまと親しくなりたい、イエスさまを信じたいと思います。

しかし、ザアカイはこの時、自分はイエスさまに呼び止められるのに相応しい人間だろうかと思返すのです。税金を徴収することは決められた働きだけでも、それ以上に取り立てることは、自分のために行っていたよな。これって悪いことであり、罪だよな。貧しく税金を納めることが困難な人であっても、容赦なく税金を取り立て、それ以上に苦しめていたよな。だからこそ、同じユダヤ人の中であっても、だれも自分を仲間だと思ってくれないんだよな。こんなことを続けているのは、イエスさまは自分のことを嫌われるだろうな、自分が信じたいと思っても、受け入れてくれないだろうな、と思うようになりました。

そしてザアカイは決断します。自分はイエスさまを信じるのだと。だからこそ、今まで行ってき

た罪をすべて悔い改め、主イエスさまに対して宣言します。「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します」。イエスさまに会う、神さまに会うということは、こういうことです。イエスさまは、自分の名前を知っておられるばかりか、過去の罪もすべて知っておられます。それにも関わらず、ザアカイに対して「今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」とお語りくださいました。そして今日、教会学校に来ているみんなに対しても、イエスさまは「わたしはあなたと友だちになりたい」とお語りくださっています。イエスさまと出会い、イエスさまと友だちになり、イエスさまを信じる時、私たちは救いの喜びに生きることが出来ます。

だからこそ、イエスさまはザアカイにこのように語られます。「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである」。ザアカイは、イエスさまと出会い、イエスさまを信じることにより、自分さえ豊かな生活が出来れば良いと思っていたことから離れ、救ってくださったイエスさまを喜ばせ、そして一緒に生きる周囲の人たちに喜んでいただけるような生活を求めるように変えられていきました。なぜなら、イエスさまと出会い、救われることは、お金持ちになるよりも、遙かに素晴らしい生活であることが示されたからです。

今、イエスさまはみんなと共にいてくださいます。そして「友だちになろう。信じなさい」とお語りくださっています。みんながイエスさまと出会い、イエスさまを信じる時、天国において喜びがあり、みんなもまた喜びに満たされるのです。

(辻 幸宏)

[今週の暗唱聖句] ルカによる福音書 19章9、10節

「今日、救いがこの家に訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。

人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。」

〈ねらい〉

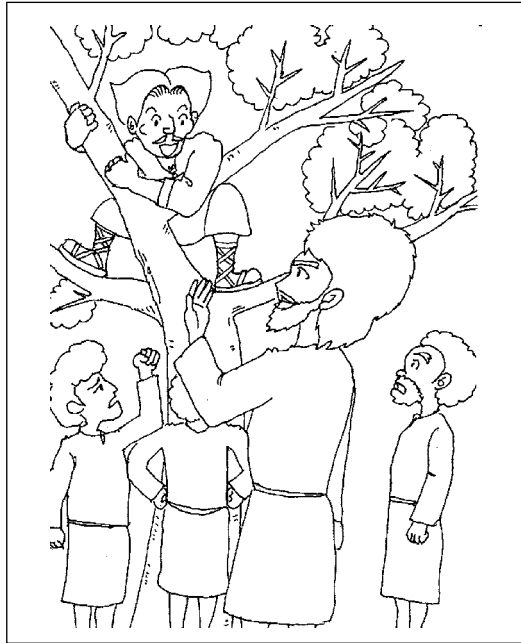
私たちに救い、神の子とするために「ぜひ泊まりたい」と来てくださるイエスさまの愛を伝えましょう。

〈お話〉

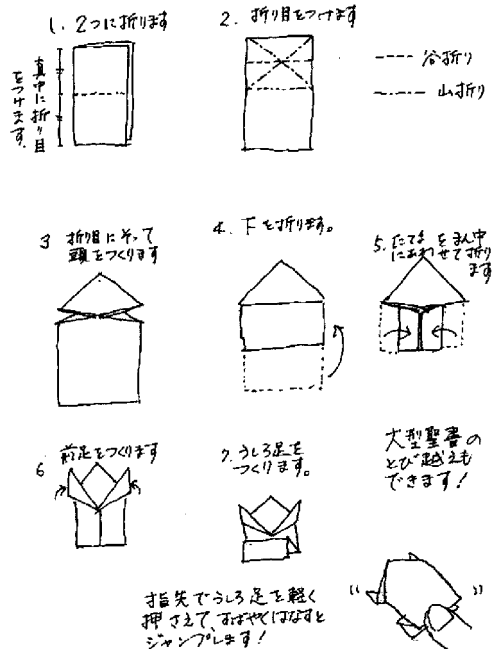
ある日イエスさまはエリコという町に入りました。イエスさまは神さまですから、その町にひとりぼっちでさみしくしている人がいることを知っていました。その人の名はザアカイ。ザアカイはみんなの嫌われ者です。なぜなら、悪いことをしてお金もうけをしていたからです。たくさんのお金を持っていてもひとりぼっち。ザアカイはさみしい毎日を送っていました。

そこへイエスさまが来られました。なんとかしてイエスさまを見たいと思いましたが、背の低いザアカイはたくさんの人が邪魔になって見えません。そこでザアカイは一目見ようと木に登りました。するとなんとイエスさまはザアカイに声をかけました。「ザアカイ、急いで降りてきなさい。今日はぜひあなたの家に泊まりたい。」(5節) ザアカイはびっくり、でもとても嬉しい。イエスさまが泊まってくれる。ザアカイはイエスさまをお迎えし、ごちそうをふるまい、「もう悪いことはしません。」と誓いました。

みなさんもイエスさまに愛されてますよ。みなさんもザアカイのように救われ神の子とされるのです。



〈折り紙〉 カエルでジャンプ!



〈ねらい〉

神の子とされることは、一方的な神の恵みとしての神の決意であり、聖霊の働きであることを(先週に続いて)語る。

それは、人それぞれ異なる形(方法・時など)で、その人にとって最善の招きを受け、主イエス・キリストに出会い、主にあつて救われ、キリストと結び合わされることによって神の子とされる。

さらに、神の子とされる恵みをいただいた者は、子としてのあらゆる特権にあずかり、親しい交わりと信頼の上に、喜びと希望が与えられる。その喜びに立って、み心になつて生きること、すなわち神の栄光をあらわして生きる者とされるように祈る。

〈展開例〉

- イエス様は、どこの町で誰と出会いましたか？
エリコの町で、ザアカイに会われましたね。

(1、5節)

ザアカイは、イエス様がどんな方か見ようと思っただけでしたが(2節)、イエス様は、エリコでザアカイに会うために来られました。

- イエス様は、ザアカイに何とおっしゃいましたか？

「ザアカイ。急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」とおっしゃって(5節)、イエス様の方からザアカイに呼びかけておられますね。イエス様は、ザアカイのお家に「泊まらなければならない」と強く決めておられました。

ザアカイはどんなに驚いたことでしょう。しかし、大喜びでお家にお迎えしたのです。

(6節)

- イエス様がザアカイのお家に「泊まらなければ

ならない」と強くおっしゃったのはどうしてでしょうか？

それは、「今日、救いがこの家を訪れた」(9節) 救いの出来事の始まりでしたし、「失われたものを捜して救うために来たのである」(10節) とイエス様をご自分でおっしゃる目的のためでした。

まず、神様のご計画によって、イエス様がザアカイに声をかけてくださり一緒にいてくださり、ザアカイはイエス様に愛されていることがわかりました。

イエス様によって愛され、救われ、神様の子どもとされた喜びでいっぱいになったザアカイは、今までと全く変えられ、自分中心の生き方から、イエス様に喜ばれるようになりたいと思うようになりました。

- イエス様は、今も私たちに、み言葉(聖書)によって語りかけてくださり、聖霊の神様によって、イエス様の十字架の愛がわかるようにされます。

その時、私たちは喜びでいっぱいになります。そして、私たちがイエス様に喜ばれる子どもにさせていただきたいと強く思えるようになります。

〈お祈り〉

天のお父さま。

イエス様が、私たちを愛してくださったので(十字架)、私たちは神様の子どもとしていただきました。それで、天の神様を、「天のお父様」とお呼びすることがゆるされています。本当にありがとうございます。

どうぞ、神様の子どもらしく生きることができるよう助けてください。



〈ねらい〉

イエスさまがザアカイを捜し求め声を掛けてくださったからザアカイに救いがあったことをおぼえ、同じように私たちも招いてくださっていることに感謝したい。

〈展開例〉

今日はザアカイさんのお話を聞きました。

このお話を知っているお友達も多いと思います。ザアカイさんはイエスさまにあって罪から救われるのですよね。

イエスさまに会う前のザアカイさんはどんな人だったのでしょうか？

「徴税人」「金持ち」「背の低い男」そして「罪深い男」といろいろあるのですが、「金持ち」は「徴税人」だからです。「徴税人」ですから皆から税金を集めるお仕事です。ただ、集めるときに本当の税金より余分に集めて、その余分のお金を自分の財産にして「お金持ち」になったのです。そこには当然罪があります。

そんなザアカイさんが、ある日イエスさまと出会いました。ザアカイさんは、ただイエスさまを一目見てみたいと思っただけで、お話したいとか思っていたのではないと思います。

でも、イエスさまはザアカイさんが登った木の所で上を見上げ声を掛けてくださいました。

「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日はぜひあなたの家に泊まりたい。」

こうしてイエスさまはザアカイさんと出会ってくださり、ザアカイさんを罪から救い出してくださったのです。

イエスさまが出会ってくださったからザアカイさんは罪を悔い改めることができるようになりました。

イエスさまに会う前のザアカイさんで「背の低い男」ってありましたよね。たぶん「背の低い」ってすごいコンプレックスだったと思います。あまり人前で「背が低い」ことを見せたくなかったかもしれません。

でも、その「背の低い」ザアカイさんは他の人のいる前で立ち上がってイエスさまに悔い改めの思いを伝えます。その言葉に対し、イエスさまもお答えくださいます。

「今日、救いがこの家を訪れた。」そして「人の子は、失われたものを捜して救うためにきたのである」と。

木の上にいるザアカイさんを見つけ出し、神様の下へと招いてくださったイエスさまは、私たちも同じように捜し出して出会ってくださり招いてくださっているのです。

これってとってもすごいことで嬉しいことですよ。



ザアカイはイエス様に会って回心したと、学びました。イエス様はそんなザアカイを見て、「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。」と言ってくださいました。「アブラハムの子」とは、すなわち「神の家族の一員」ということであり、「神に愛されている子」ということです。

「神の家族」は、神の栄光を表して、御心を世に証しするために特別に選ばれた者たちです。神を愛し、神に愛され、神の教えに聞き従い、愛と正義と平和に生きる。そういう「神の家族」の一員として歩む道こそが、人間の尊厳がもっとも光り輝く道です。人間は本来そのように生きるべきなのです。

ザアカイは、そこからはぐれていました。家族からはぐれた「迷子」でした。でもそんな迷子を「さがして救う」ために来てくださったイエス様によって、家族の中に取り戻されて、自分の本来あるべき姿を思い出したのです。そして新しい心で、新しい生き方を始めました。「救い」とはそういう新しさのことを言います。

〈子どもたちの声を聞いてあげてください。〉

あなたは、神の家族からはぐれて迷子になっていませんか。

どうしてはぐれてしまったのですか？

- ・ザアカイと同じようなコンプレックス？ この世の力に憧れて、神から思いが離れる。
 - ・日本における「神の家族」の少なさによる自信喪失（田舎者が故郷を卑下するように）
 - ・親への反発が、神への反発に。
- などなどの理由があるかもしれませんね。

思春期の子どもたちの多くは、特に契約の子の

息苦しさに反発を覚えている子どもたちは、自分が迷子であることにさえ気づいていないものです。ザアカイと同じように。でも、ある時、神様が気づかせてくださる時が必ずきます。どうしようもない寂しさに襲われて、無力さや、決定的な欠けに気づかされる時が来ます。

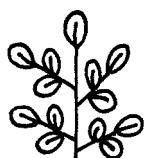
そんな時に、彼らが思い出してくれることを祈りながら、伝えましょう。「迷子のあなたを、必死に探しておられる方がおられる」ということを。迷子というのは、子どもよりも、探している親のほうが必死なのですから。

〈なぜザアカイは、神の家族として生き直したいと願ったのでしょうか？〉

彼を変えたのはイエスとの「出会い」です。イエスの愛のぬくもりの中で、ザアカイの傷はすべて癒されました。そして方向を変えることができました。イエスが自分のことを本当に大切に扱ってくださったから、「私も自分を大切に扱ってやらねばならない。私は誰にも愛されないすれっからしそのままではいけない」と、思うことができました。もう自分を罪深いままでとどめておいてはならないと、悔い改めることができました。失われていた者が、帰ってくるとはこういうことです。人間が救われるとは、こういうことなのです。

〈子どもたちにも、そんなイエス様との出会いがありますように。〉

私たち教師との「出会い」を通して、彼らが少しでも神の愛を知ることができるように。そういう器として、彼らの前に立つことができますようにと、祈って備えましょう



テキスト ヨハネによる福音書 4章1～26節

(1) 背景と語釈

サマリア教においてはモーセ五書だけが正典ですから、ダビデが「神なる主の神殿はここにこそあるべきだ」といってエルサレムに神殿建築の場所を選んだことを記す歴代誌上22章1節は問題になりません。そこで、「あなたが入って得ようとしている土地に、あなたの神、主が導き入れられるとき、ゲリジム山に祝福を……置きなさい」（申命記11:29）、あるいは「あなたたちがヨルダン川を渡ったならば、民を祝福するために、シメオン、レビ、ユダ、イサカル、ヨセフ、ベニヤミンはゲリジム山に立ち」なさい（申命記27:12）というモーセ五書内の個所に即して、ゲリジム山で礼拝をしました。サマリアの女が「わたしどもの先祖はこの山で礼拝しました」（4:20）と言っているのはゲリジム山のことで、それに対して主イエスは「あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る」（21）と言ひ、その時を「まことの礼拝をする者たちが霊と真理をもって父を礼拝する時」（23）と言ひ、「今がその時である」と言われたのでした。

「生きた水」（10）とはヘブライ語では「流水」のことで、第二神殿時代には礼拝前の沐浴は「生きた水」でなければならなかったことが、真の礼拝の始まりへと話題が進む土台になっているようです。井戸の水は流れていませんから「生きた水」ではありません。ですから「あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう」とあるのは、「その人」は「井戸の水ではなく」生きた水を与えたことであろう、という対比です。それは「この水を飲む者はだれでもまた渇く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない」という対比を準備するものです。そして「わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」とあるのも、生きた流水だから井戸水ではなく「泉となり」、

永遠の命「へと流れ込む」水というイメージです。

(2) 御言葉をていねいに聞くこと

このサマリアの女の人生はなかなかうまくいかない人生だったようです。そのはてに彼女はすさんだような気持ちになっていたかもしれません。しかし、主イエスは狙い澄ましたようにその彼女に話しかけてくださいました。私たちの人生にもなかなかうまくいかないときがあり、気持ちがすさんでくることもあるでしょう。しかしそのようなときこそ、まず語りかけてくださる主イエスの御言葉に心を込めて耳を傾けることです。そのとき主イエスは私たちの苦しい状況を完全に射抜くような御言葉をくださるでしょう。そして私たち自身の心の、主イエスに対する飢え渴きを知らせてくださるでしょう。そのとき私たちは「私にもその水をください」と主イエスに向かって一步を踏み出すようにして、求めることができるようになります。「求めよ」といわれても私たちはなかなか自分自身の本当の魂の求めを明らかにすることができません。しかし礼拝においていつも主イエスの方から語りかけてくださる御声にていねいに耳を傾けるとき、主の方から私たちの本当の求めを明らかにしてください、求めることができるようにしてください、そして与えてくださるのです。そのようにして私たちは、礼拝における主イエスとの魂の会話こそ、尽きることのない命の泉であることを知ります。それが霊と真理をもってする礼拝にほかなりません。イエス・キリストの到来とともに、そのように「礼拝する時」が来ました。そして今や、私たちが礼拝に集うそのたびに、主イエスは「今がその時である」と言っているのです。（赤石純也）

※第29号（2008年5月4日分）より再掲載。

子どもカテキズム 問3

子どもカテキズム

問3 私たちがすべきことは何ですか。

答 信じる私たちは、

主の日にキリストの教会に来て礼拝をささげ、

毎日、神さまにお祈りします。

〈信仰は聞くことによる〉

信仰は「聞くことにより、しかも、キリストのみ言葉を聞くことによって」（ローマ10:17）生まれます。人はイエス・キリストのみ言葉にあずかることによって救いを受けます。それゆえに、主の足もとに座ってみ言葉に耳を傾けることこそ、私たちの命と人生にとってただ一つの必要なこと（ルカ10:42）です。

私たち罪人を救いへと招いて下さるために、神は救い主イエス・キリストを証しする書（ヨハネ5:39）である聖書を与えて下さいました。聖書は靈感された神のみ言葉であり、キリスト者の信仰と生活の唯一の規準です。

祈りつつ聖書を読むとき、聖霊は私たちの心を照らして、イエス・キリストを信じる信仰を与え、私たちを救って下さるのです。

〈聖書と礼拝〉

もちろん聖書は、私たちがひとりで読むときにも救いの書です。それで私たちは、毎日聖書を読み、祈ります。そのようないなみの中で、神はみ言葉と聖霊によって救いの真理を教え示し、救いの確信を堅固にして下さいます。

しかし、それだけでは不十分です。というより

も、聖書は本来キリストの教会において、とりわけ主の日の礼拝において読まれるべき書物なのです。聖書をひとりで読むいとなみは、礼拝の生活を前提としたところではじめて成り立つのです。

主日礼拝では聖書朗読がなされ、教会が公に任職した説教者によってみ言葉のときあかしがなされます。説教において聖書のみ言葉は、今ここで聞く者を生かし救う神の真理の言葉として語られます。「神の言葉についての説教が、すなわち神の言葉」（第二スイス信条）なのです。

聖書のときあかしである説教を通して、主イエス・キリストは聖霊において礼拝する者のただ中に生きてお臨みになります。まさに主は主の民とひとつとなられます。

そして聖霊は説教者を通して語られるみ言葉を用いて、主の民らに救いのみわざを適用なさいます。すなわち、昔主の弟子たちにふるわれた主の恵みのみわざが、今ここで礼拝する者たちの間にも、時空をこえてふるわれるのです。その意味で、聖書のみ言葉は礼拝において、また説教においてはじめて正しく聞かれると言えるのです。

（木下裕也）

※第13号（2004年5月16日）より再掲載。



テキスト ヨハネによる福音書 4章1～26節
子どもカテキズム 問3

〔単元のねらい〕

事柄の中心は、「礼拝」である。人は「礼拝」によって心を潤され、養われ、神から与えられた真のいのちを生きることができる。その礼拝の大切さを心に刻み、毎週の礼拝の恵みをかみしめることへと招きたい。説教の課題としては、出来事から中心点にいかにか踏み込むか、であろう。出来事は長く、あらずじをていねいに追うならば、中心点に迫ることは難しい。かといって、中心点だけを取り上げるなら、この御言葉のおもしろさは半減するだろう。

礼拝こそいのちの源

ある日のこと、主イエスは、サマリアの町を通りました。ユダヤからガリラヤへ向かう途中でした。けれども、ユダヤ人は、ふつう、サマリアを通ることをしません。遠回りですが、ヨルダン川沿いの道を通るのです。しかし、このとき、主イエスはサマリアを通りました。聖書に、「サマリアを通らねばならなかった」とありました。ですから、これは偶然ではありません。主イエスは、苦しんでいる女性がいることをご存じで、その女性に会うためにサマリアを通られました。そして、その女性に大切なことをお教えになったのです。

主イエスは、弟子たちと一緒にシカルというサマリアの町に来て、おそらく町の入口の近くでしょう、そこにヤコブが掘ったと伝えられている井戸がありました。その井戸のそばに座ってしばらく休むことにされました。弟子たちは、食べ物を手に入れるために町の中に入り、主イエスはお一人でした。そこに、一人の女性がやって来ました。お昼頃のことでした。

その女性は、井戸の水をくむために来ました。けれども、少し不思議です。水をくむのは、昼日中の仕事ではなく、日差しを避けて朝方か夕方にするということです。この女性は、ひょっとすると、人目を避けて井戸にやって来たのかもしれませんが。

主イエスは、その女性に語りかけます。

「水を飲ませてください。」

「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか。」

「もし、あなたが、『水を飲ませてください』と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。「主よ、あなたは水をくむ道具をお持ちではないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。」

「この水を飲む者はだれでもまた渇く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」

「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」

これも少し不思議な、内容のかみ合っていないように思えるやりとりです。女性が「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに」と言っているのは、ふつう、ユダヤ人はサマリア人とおつきあいないからです。話しかけたり、何かものを頼んだりすることをしないのです。けれども、主イエスは、ユダヤ人だから、サマリア人だからということで、分け隔てされません。

ここで主イエスは、「水をください」とお願いしました。しかし、それは、この女性がくみに来ている、目に見えて、のどを潤す水ではなく、「生

きた水」「永遠の命に至る水」があることをお教えになるためでした。この女性は、のどを潤す水のことであったので、会話がなかなかかみ合っていないのです。主イエスは、この女性に、「生きた水」「永遠の命に至る水」を与えようとしておられます。

この女性が、主イエスのその思いに気づいたのは、主イエスに、自分の夫のことを指摘されたときでした。

「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい。」

「わたしには夫はいません。」

「まさにそのとおりだ。あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。」

こう指摘されて、女性は、目の前にいるお方が、ただの旅人ではないことに気がつきました。

「主よ、あなたは預言者だとお見受けします。」

こう言って、女性は、自分のもっとも関心のあること、本当に求めていることを打ち明けました。

「わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。」

この「あなたがたは」とは、「ユダヤ人は」ということです。ユダヤ人は、サマリア人が礼拝をささげているゲリジム山ではなく、エルサレム神殿で礼拝すべきだと言っている、ということなのです。

主イエスは、お答えになりました。

「ゲリジム山でもなく、エルサレムでもないところで父を礼拝する時が来る。霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」

この女性は、夫婦の関係がなかなかうまくいかないという問題を抱えていたようです。結婚しては、うまくいなくて離婚してしまう。何度もそういうことを繰り返していたようです。愛してい

るから結婚したのに、なかなかうまくいかない。それは本当につらく、苦しいことであったと思います。そうして、この女性は、心が満たされず、心の中にぽっかり穴があいてしまっていたような気持ちだったのでしょう。その大きな穴を埋めるために、何度も別れては結婚するということだったのかもしれませんが。そうしているうちに、本当に心の穴を埋めてくれる別の何かを求めるようになったのでしょう。それは、神さまを礼拝することである。そう考えたのかもしれませんが。神さまこそが、わたしの心を満たしてくださるお方、わたしの人生を支えてくださるお方である。そう考えて、本当の礼拝はどこにあるのだろうかと思いついて巡らしていたのかもしれませんが。主イエスは、そういうこの女性のことをご存じて、このとき、サマリアに来られたのでしょう。この女性は、主イエスと出会って真の救い主を知り、本当の礼拝をささげて、心が潤される喜びを与えられたのです。

主イエスは、わたしたちにも教えておられます。わたしたちにも、「霊と真理による礼拝」が必要です。そして、この礼拝こそが、「生きた水」「永遠の命に至る水」をいただく方法なのです。「霊と真理による」とは、「主イエスと聖霊による」ということです。十字架につけられた主イエスと、主イエスが与えてくださった聖霊によって、御言葉に耳を傾けてささげる礼拝。その礼拝によって、わたしたちの心が潤され、わたしたちの体と魂が元気にされます。

子どもカテキズムの問3にこうあります。「信じるわたしたちは、主の日にキリストの教会に来て礼拝をささげ、毎日、神さまにお祈りします」。

教会で礼拝をささげること。これが、わたしたちのいのちの源です。今日もみんなと一緒に礼拝をささげることができて、とても嬉しく思います。礼拝を大切に、これから心を込めてささげましょう。礼拝によっていのちが潤される。それが主イエスの約束なのです。 (望月 信)

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書 4章23節

しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。
今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。

〈ねらい〉

神さまの言葉を丁寧に聞く（聖書研究（2））ことを学びましょう。

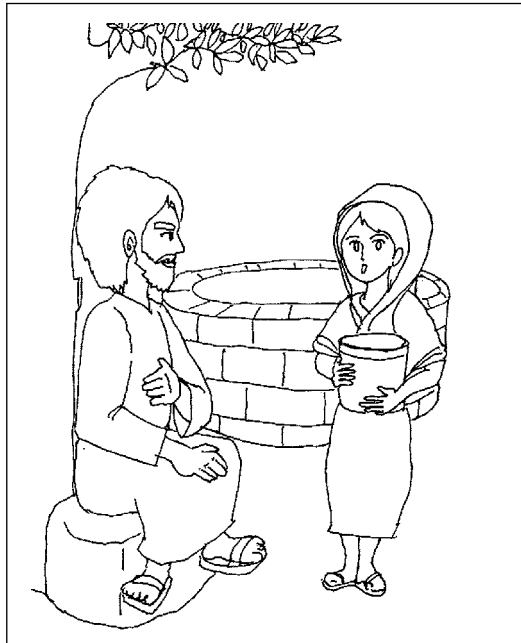
〈お話〉

ある日イエスさまはサマリアという町に来ました。お昼頃で暑い時でした。井戸のところで喉がかわいたかかっている、そこへバケツを持った女の人 came ました。イエスさまはその女の人を救いたいと思いました。なぜならその女の方はたくさんの男の人と結婚しては離婚していたからです。そのため人々からだらしのない女、罪深い女と言われて、仲間外れにされていたのです。

でもイエスさまはやさしく女の人に語りかけま

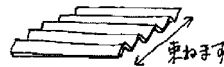
した。「水をください。」女の方はびっくり。さらにイエスさまは言いました。「わたしも水をあげましょう。井戸の中の水はすぐに乾いてしましますが、わたしがあげる水はいつまでも乾きません。」不思議なことを言う人だと思いながら女の人をイエスさまのお話を聞きました。聞いているうちに、イエスさまがくださる水とは永遠の命のことであり、イエスさまこそ救い主であることがわかったのです。

聖書にはイエスさまのことがたくさん書いてあります。みなさんも礼拝で聖書のお話を聞き続けるならば永遠の命をいただくことができるのです。

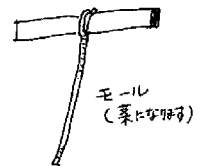


〈母の日工作〉花束

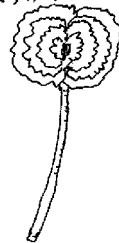
1. お花紙 E 10cm 四方に切、5枚ほど重ねて下のように折ります。



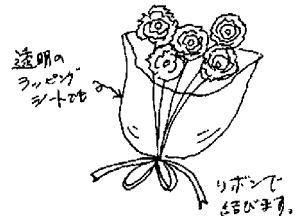
2. 真中をモールで結びます。



3. 1枚ずつのねいにならげてお花の形にします。



4. 数本束ねてカーセルファンで包んで出来上がり。



〈ねらい〉

現代社会において、子どもたちは、さまざまな問題に直面しているでしょう。そして、「礼拝」を守ることの難しさもあります。

そのような中でも、イエス様がサマリヤの女にやさしく語りかけ招いてくださったと同じように「礼拝」において、み言葉をもって、み言葉と共に働く聖霊さまによって最大の祝福を与えてくださることを知らせる。

〈展開例〉

○イエス様は、どこからどこへ行こうとしておられましたか？（3、4節）

そ の時、どこを通過して行こうとしておられましたか？

（地図を示しながら）

ユダヤ人たちは、遠回りになってもサマリヤは通りませんでした、イエス様はちがいましたね。

○イエス様はサマリヤの何という町に着きましたか？（5節）

そこで、だれに会って、どんな話をしましたか？（7節～）

シカルの町の井戸のそばで座っておられましたね。

暑いお昼頃にサマリヤの女の人が井戸に水くみに来て、イエス様とお話ししました。

女の方はイエス様に初めて会って、イエス様がどんなお方か知りませんでした、イエス様は女の方のことを全部わかっておられました。

女の方は、つらいことがいっぱいあり、神様に喜ばれないこともたくさんしていましたか

ら、心から喜ばませんでした（喜んでいませんでした）。

イエス様は、やさしいけれども、はっきりと、女の方に自分の罪がわかるように、そして、その罪を神様に赦していただいて、心の中に喜びが次々にあふれてくるようになることを教えてくださいました。

女の方もイエス様のお話を熱心に聞いたので、イエス様のお話がよくわかったのです。これは聖霊さまが助けてくださったからなのです。

聖霊さまに助けをいただいて、イエス様のお話を一生懸命にきいて何をおっしゃっているかがよくわかり、喜んでイエス様が教えてくださいましたようにしたい（なりたい）と思わせていただけるようになるのは、「礼拝」によってです。

毎週の礼拝こそ、私たちの一番の命の宝なのです。

〈お祈り〉

天の父なる神様。

今日も、礼拝に出席することができて、ありがとうございます。

礼拝がどんなに大切なものかということが、わかりました。

私たちはまだ子どもですから説教の全てはわかりません（理解することができません）が、だんだん、わかるようにしていただくために、毎週休まず礼拝に出席できるようにしてください。そして、礼拝によって、神様から喜びが与えられ続けて、大きく育ててください。



〈ねらい〉

イエスさまを信じることこそ、本当の礼拝であり、その礼拝の大切さを知る。

〈展開例〉

先ほど私たちはみんなで礼拝をささげました。教会へ来て、礼拝をささげることは、神さまが私たちに求めておられる一番大切なことです。

○神さまの子どもとしてするべきこと

「子どもカテキズム」には、

①主の日には教会で礼拝をささげましょう

②毎日、神さまにお祈りしましょう

ということが書かれています。

「三つ約束」という子どもの賛美歌があります。

①おいのりはね まいにちするんだぜ

いつもイエスさま きいててくれるから

②みことばはね あんしょうするんだぜ

どんなときでも みむねがわかるから

③きょうかいにはね まいしゅうくるんだぜ

げんきな しんこう やしなうためだから

毎日お祈りをする、聖書を読むこと、礼拝には毎週行くことが歌われています。私たち神様を信じる者は、礼拝に出ることによって心も体も元気になるのです。「礼拝」と「お祈り」が大事だということを、この歌で思い出してください。

○礼拝で何をしますか？

礼拝では何をしますか。お祈りをして、賛美歌を歌い、神さまのみことばを聞きます。礼拝で大切なことは、「神さまのみことば」によって私は生きている（命の水をいただいている）のだということを、心と体で感じることです。そして「みことば」によって私たちに命を与え

てくださる神さまに感謝することです。「神さまのみことば」というのは聖書です。ですから毎週礼拝では聖書のお話があります。

ただ礼拝に出席しているだけでは本当に礼拝をささげていることにはなりません。「イエスさまを信じることこそ、本当の礼拝である」ことをおぼえてください。

○教会に行けない時

皆さんは礼拝が大切だということが分かっている、日曜日には礼拝のために教会へ来ていますね。でも、病気やいろいろな御用で教会へ来れないことがありますね。そんな時でも教会で待っている先生は休んでいる子どもを「いけない子だ」なんて思いません。「早く病気が治りますように」とか「また教会へ来れますように」とお祈りして待っていてくれます。ですから何度か続けて休んでも「叱られるかなあ」「行くのいやだなあ」なんて考えずに礼拝に出席してください。先生たちは「よく来たね」と喜んで迎えてくれますから。

教会は、礼拝に出席できない人が多くいても礼拝を続けて行きます。毎週必ず礼拝を行います。礼拝に出席できない時には、礼拝の始まる時間に礼拝のことをおぼえてお祈りしてください。「神さまいつも私を守ってくださりありがとうございます。また教会に行けるようにしてください」と。

〈お祈り〉

神さま、私たちがあなたを心から礼拝して、いつも心の中に命の水がわきあふれるようにしてください。イエスさまのお名前によってお祈りいたします。アーメン。



私たちは、神を知り、神を喜び、神を賛美し、神の栄光を表すために生きるのです。私たちの思いと言葉と行いのすべてにおいて、「神様はすばらしい方だと」味わい、証しし、ほめたたえ、四六時中、神様のことを考えながら祈って過ごすのです。

それはすなわち、人生のすべてにおいて、神様を礼拝するということです。

礼拝で、御言葉を味わい、信仰告白し、讃美歌を歌い、お祈りをするようにして、毎日毎時間毎分毎秒を過ごすことが、クリスチャンの人生です。

(礼拝的人生観：20周年宣言より)

そんな私たちの礼拝の人生は、日曜日ごとの礼拝をおろそかにしては成り立ちません。日曜日は、主のご栄光のために用いる日として定められています。すなわち自分のために用いないで、神様にささげるべき時間として定められているということです。

私たちが世で生きる限り、日曜日には様々な用事(部活、労働、会合、行事……)があることでしょう。また、体がきつい、遊びに行きたい……などの誘惑がつきものです。しかし、祈りをもって主の日の礼拝出席にできるだけ努めてください。そこが崩れる時に、私たちの信仰生活は乱れを生じ、霊的にも肉体的にも健やかさを奪われていきます。

私たちが主の日の礼拝を守るのではありません。むしろ主の日の礼拝が私たちを守っているのです。

〈今教会で行われる礼拝の中で、まことの礼拝のために絶対に無くてはならないものは何だろうか?〉

立派な会堂はなくても大丈夫。

オルガンはなくてもいいかな。

聖書は必要だね。

讃美歌集はなくても、賛美はできる?

御言葉を解き明かしてくれる人も必要だね。

(カテキズム研究を参照)

できれば、二人または三人以上の仲間がいてほしいね。(でも、開拓伝道者がたった一人で礼拝をささげる時も、イエス様は共におられます。)

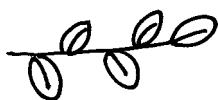
どうしてもなくてはならぬものだけを考えると、「霊と真理をもって礼拝する」ということも、分かってくるでしょう。どんなみすばらしい場所でも、「聖霊」に導かれ、聖書に示された救いの「真理」に心燃やされ、イエス様との深い魂の会話に熱中できるなら、それこそまことの礼拝なのです。

〈生きた水があふれ出すような、礼拝の喜びを味わったことがあるだろうか?〉

神の御言葉が、心の奥の奥に触れてきて、魂の渇きがいやされる。あるいは、自分が渴いていたことに始めて気づかされる。そんな喜びを味わったことがあるだろうか?〉

改革派教会の通常の礼拝(主に講解説教)においても、そのような喜びは十分に味わえます。また現代の中高生であっても、そういう喜びを求めています。ただ、礼拝に出ることが半ば習慣化・義務化してしまっている人には、礼拝の感動は味わいがたいものです。

サマーデイズの営みなどは、そのような方々に、礼拝の喜びを一度しっかりと味わっていただくためのものであると、私は考えています。「礼拝がおいしかった」と一度味をしめた人は、今度はそれぞれの教会でも、熱心に礼拝に参加し、喜びを受け取ろうと積極的になります。それは過去の実績から明らかです。



(1) おどろくべき養い

- ①五千人を養う主イエスの奇跡は、四つの福音書すべてに記されています。つまり「福音」を語る際に、どうしても省くことのできない出来事として、主イエスの弟子たちに記憶されているのです。
- ②出来事の要点は、主イエスが五つのパンと二匹の魚で、五千人の人々（しかも数えてみたのは男だけの数）を、養ってくださった。それだけの人々が空腹を満たされてなお、弟子たちが残りのパンを集めると、十二の籠にいっぱいになったのです。これらの要点では、四つの福音書の記述はまったく共通です。

(2) ヨハネ福音書の叙述の特徴

- ①ヨハネ福音書は、豊かな給食を受けた群集の中に、主イエスへの誤解が広まって、もはや收拾がつかなくなる様子を描きます。主イエスを「預言者」とみなす者、この方を「王」として戴こうとする者。イエスを預言者、王と見ることは、かならずしも全面的に間違いとは言えません。しかし、その理解はきわめて浅いところに留まっています。
- ②人々の誤解を解くために、この福音書では主イエスの長大な説教が続きますが、語れば語るほど、その誤解は大きくなり、ついには、大勢のものが主イエスのもとを離れる結果になります。

ヨハネ福音書では、自分のささやかな「弁当」を差し出した「少年」に光を当てる読み方も魅力的でしょう。

(3) 主イエスと共に考える

- ①「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」。主イエスは、弟子フィリポに尋ねておられます。御自分では何をすべきかを知っておられ、あえてフィリポを試みて

おられるのです。主イエスから問われることは、主イエスと共に考えることです。

- ②もう一人の弟子アンデレも、大麦のパン五つと魚二匹をもった少年を見つけて主イエスに報告します。「けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう」。これがフィリポの出した結論です。二人の弟子は、この行き詰まりの中で、主イエスと共に考えることを学びます。そのことを通して、主イエスのご自分の思考、ご自分の決意の中に、彼らを招こうとされます。
- ③大きな難局の中で、自分の無力さがひしひしと心を圧迫する。キリスト者も教会も、繰りかえし同じことを経験します。主イエスなら、この難局をどう乗り越えられるか。信仰に生きるとは、主イエスと共に考え祈る習慣を身につけることです。

(4) まことの過越し、神の小羊

- ①ヨハネ福音書の五千人給食は、単なる空腹の満たしでなく、キリストこそ、命にいたるまことの糧、「天から降って来たパン」であるという、大きな使信へと展開されます（33、51節他）。その使信を導入するため、ヨハネ福音書は「ユダヤ人の祭りである過越祭が近づいていた」と注意を促しています（4節）。
- ②パンを取り、感謝して人々に分け与える主イエスの姿は、最後の晩餐の食卓で、弟子たちの記憶に鮮明に再現されます。そして、教会は五千人給食を、自分たちの「聖餐」の食卓の中でも、繰りかえし「想起」します。主イエスが与えるまことのパン。それは永遠の命にいたる真実の糧です。ヨハネ福音書の「給食」は、キリストを食べて生きる信仰の真髄に、私たちを招きます。（小野静雄）

※第24号（2007年1月14日分）より再掲載。

子どもカテキズム 問3

子どもカテキズム

問3 私たちがすべきことは何ですか。

答 信じる私たちは、

主の日にキリストの教会に来て礼拝をささげ、

毎日、神さまにお祈りします。

〈キリストの体なる教会〉

神は、永遠の聖定において、贖い主イエス・キリストにあって救いの恵みのうちにわたしたちを選んでくださいました。そして、イエス・キリストをかしらとする恵みの契約につらなる者とし、さらにキリストの体なる教会につらなって生きるひとりひとりとしてくださいました。

教会のかしらなるキリストがおひとりである以上、その体なる教会もひとつです。その構成員は「過去、現在を通じてひとつに集められた選民の全員」（ウエストミンスター信仰告白25章1節）です。このひとつなる教会は、使徒信条において「聖なる公同の教会」と告白され、「時代や場所の制約をこえて歴史と世界の全体を包み、天と地をつらぬいて存在」（矢内昭二『ウエストミンスター信仰告白講解』）しています。

私たちはこの「聖なる公同の教会」のひとつの肢体です。そのことを確かめるなら、私たちの信仰のいとなみは決して孤独なものではなく、ともにかしらなるキリストに結び合わされて生きる聖徒の交わりの祝福の中でおりなされていくいとなみであることがわかるのです。

聖書をひとりで読んでいくだけでは不十分で、礼拝につらなり、説教を聞く中ではじめて聖書が

わかるのと同じように、教会から遠ざかってひとりで信仰生活をなすというのはキリスト者の本来のありかたではありません。「教会の外に救いなし」という言葉は正しいのです。私たちは教会につながり、ともに神を崇め、神が教会に備えておられる恵みの手段にともにあずかり、聖化の祝福をわかちあいつつ歩むのです。

〈聖徒の交わり〉

教会に生きる主の民は、かしらなるキリストから来るいっさいの賜物を分け合い、自分の救いのみならず兄弟の益と救いのために、賜物を喜んでささげ、たがいに配慮し合います。また苦難にともにあずかり、ともに忍耐し、喜びも悲しみもひとしく分け合います。キリストの体の部分として、まさに「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶ」（コリント一12:26）のです。そのような主にある交わりのうちに、私たちは文字通りひとつとされ、「キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長する」（エフェソ4:13）のです。（木下裕也）

※第13号（2004年5月23日）より再掲載。



テキスト ヨハネによる福音書 6章1～15節
子どもカテキズム 問3

〔単元のねらい〕

この単元の中心は、ヨハネ福音書6章35節、「わたしが命のパンである」にある。主イエスは、御自身を「食す」ことへとわたしたちを招いておられる。この命のパンである御自身への招きとして、主イエスは五千人の給食の御業を行われた、という理解である。それゆえ、五千人給食の出来事そのものは、説教の導入、もしくは前半部分として位置づけられる。とはいえ、この出来事を生き生きと語ることが、子どもたちにとって、主イエス御自身を糧としていただくということを深く印象づけることになるだろう。そして、主イエスを食すとは、礼拝であり、御言葉を聞くことにほかならない。

いのちのパンによって生きる

主イエスは、多くの人たちに御言葉を教え、また、病気をおいやしになったりして、毎日を過ごしておられました。この日も、主イエスは、ガリラヤ湖のそばで、多くの人たちが集まる中で、弟子たちに神の御言葉を教えておられました。今日は、そのように御言葉を教えておられるときに主イエスが行ってくださった、奇跡のお話です。主イエスは、神の御言葉を聞くとはいったいどういうことなのか、多くの人たちに、体験をもって知る機会を与えてくださいました。

主イエスは、弟子のフィリポに言いました。「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」。フィリポは、たぶん、困ったように答えたのでしょう。「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」。

このとき、主イエスの周りには、おとなの男の人だけで五千人ほどの人たちが集まっていました。女の人や子どもたちを合わせると、一万人を超えていたのではないのでしょうか。それほどたくさんの人たちに食べさせるには、一人分が少しずつだったとしても、お金が二百デナリオンあっても足りない。二百デナリオンというのは、二百万円くらいでしょうか。フィリポは、ざっと計算してみても、「これは、とても無理なことです」と、

主イエスに答えているのです。

弟子のアンデレが言いました。「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう」。

これはたぶん、主イエスと弟子たちが「パン」と言って話しているのを聞いて、「ほくもパンを持っています。もし役に立つなら、使ってください」と言って、申し出たのだと思います。ひょっとすると、「イエスさまに食べていただいでください」と言ったのかもしれませんが。けれども、どうにもこうにも一万人も人が食べるには足りない。アンデレはそう考えたでしょう。ただ、主イエスのお耳には入れておこう。主イエスが何かなさるかもしれない。アンデレは、そう思って主イエスに伝えたのかもしれませんが。

このとき、主イエスは、弟子たちを困らせるためにパンのこことを持ち出したのではありません。主イエスは、「ほくのパンを使ってください」と申し出た少年のことを喜ばれたでしょう。だからでしょうか。その少年のパンを使って、不思議なことをなさいました。

主イエスは集まっていた人たちを座らせると、パンを取り、感謝の祈りを唱えて、みんなに分け与えられました。主イエスから裂かれたパンを受けて、弟子たちが配って歩いたのです。魚も同じ

ようにして、みんなに分け与えられました。そうして、多くの人たちが食べて満腹になりました。残ったパンを集めると、十二の籠がいっぱいになるほどでした。それほどに主イエスはたくさん分け与えられたのです。

このパンが分け与えられた出来事は、荒れ野を旅するイスラエルの民に天からのパンであるマナが与えられたことを思い起こさせます。かつてイスラエルの民は、天からのパンによって養われて、荒れ野の厳しい生活を耐え忍びました。そして、天からのパンによって養われるとは、肉体のことだけではありません。神の御言葉によっていのちを養われる。マナは、そのための実物教材でした。イスラエルの民は、荒れ野の旅の中で、神の御言葉によってこそいのちが養われること、人生を導かれることを学んだのです。

同じように、主イエスは、このとき、パンを分け与えることをとおして、弟子たちと多くの人たちに教えておられます。パンによって肉体のいのちが養われるように、わたしたちが養われる霊の糧、心の糧が必要である、ということです。

この出来事のあと、主イエスはおっしゃいました。今日の暗唱聖句です。ヨハネ福音書6章35節、「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない」。ですから、パンを与えてくださった主イエスは、「イエスさまご自身がパンである」とおっしゃっていました。すなわち、このとき分け与えられたパンは、主イエス御自身を指し示しています。分け与えられたパンを食べて肉体が養われたように、主イエスをいただいて、主イエスを糧とすることがわたしたちには必要です。わたしたちはまさに、主イエスによって心がうるおされて、飢えることがなく、渴くこともない。主イエスこそ、そのようなまことの命のパンであられるのです。

先週のお話で、主イエスはサマリアの女性に「生きた水」「永遠の命に至る水」を与えるとおっしゃいました。それは、「霊と真理による礼拝」のことでした。主イエス・キリストと聖霊による礼拝です。御霊に導かれて、神の御言葉に耳を傾ける礼拝です。その礼拝によって、「生きた水」「永遠の命に至る水」をいただくことができます。その「生きた水」「永遠の命に至る水」も、主イエスのことです。主イエス御自身をいただくところで、わたしたちは、渇いた心をうるおされ、とこしえの命を受け継ぐ者とされます。

礼拝とは、その主イエス・キリストとの交わりであり、主イエスを糧としていただくことです。主イエス・キリストに結ばれて、わたしたちは、心にぽっかりとあいている穴を埋めていただくことができます。渇いた心を潤されることができます。命の糧によって養われるのです。

わたしたちの心の穴、わたしたちの飢え渴きは、わたしたちが罪人であることから来ています。わたしたちが神さまから離れて生きているから、心が満たされないのです。神さまに対して負い目があるから、飢え渴きを感じるのです。それを埋めることができる、いやすことができる、それは、ただわたしたちの罪のために十字架につけられた主イエスだけにできることなのです。

わたしたちは、この礼拝のために、そして、主イエスの御声を聞くために、教会に集められています。教会に集められて、御言葉を聞くことによって、「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」とおっしゃった主イエスに結ばれて、養われています。これは、何と素晴らしいことでしょうか。礼拝で御言葉を聞きます。そして、日ごとに、それぞれ御言葉を読みます。そうして、主イエスの御声に耳を傾ける。それが、主イエスの命によって生かされているということなのです。そこに、わたしたちのいのちの源があります。

(望月 信)

[今週の暗唱聖句]

ヨハネによる福音書 6章35節

イエスは言われた。「わたしが命のパンである。

わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。」

〈ねらい〉

福音のエッセンス（十字架の死・陰府くだり・復活・顕現）の一つを指し示す重要な出来事を扱います。

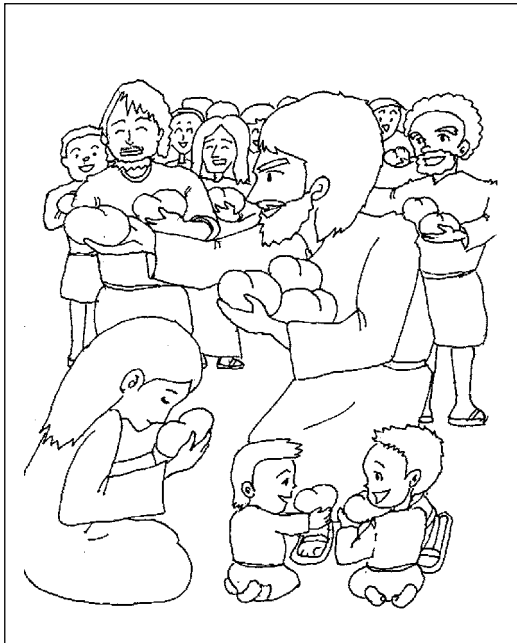
〈お話〉

ある日、イエスキリストのところには五千人の人々が集まっていました。夕方になっても帰ろうとしません。みんなイエスキリストのそばにいたかったのです。でもお腹が空いてきました。そこでイエスキリストは、少年が差し出した五つのパンと二匹の魚を手にとり、神さまに「パンとお魚をありがとうございます」とお祈りをして五千人の人々に配り始めました。するとどうでしょう。パンがなくなりません。魚もなくなりません。渡しても渡してもパンと魚がどんどん増えていくのです！

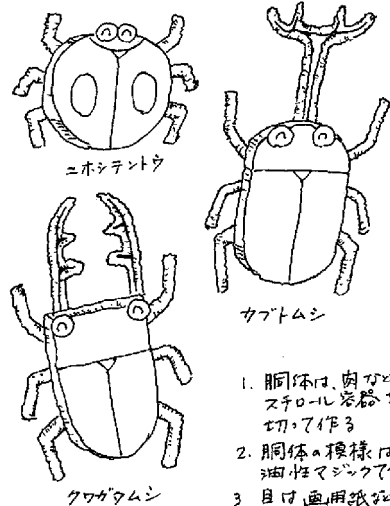
人々はびっくり！そして互いに「イエスキリストを王様にしよう」と言い合いました。でも気が付いたらイエスキリストのお姿がありませんでした。どうしてでしょう。イエスキリストは王様になるためではなく、人々の罪の罰を担って十字架の上で死ぬために来られたからです。

イエスキリスト様が配られたパンとお魚は、実はイエスキリストご自身を表していました。イエスキリストは「さあ食べなさい、これはわたしの体です。このようにしてわたしはあなたが一人ひとりのために十字架の上で死刑になるのですよ。そうすることによってあなたがたが罪赦されて、神さまとともに生き、天国へ行けるようになるのですよ。」こう心で語りかけながらパンとお魚を配ったのです。

イエスキリストさまに感謝してこれからも一緒に礼拝していきましょう。



〈工作〉ムシムシ大作戦！



1. 胴体は、肉びんやスチロール容器を切って作る
2. 胴体の模様は油性マジックで描く
3. 目は画用紙などで作る
4. つの、手びん蓋、モールで作れ、裏に貼る

〈ねらい〉

- ①メッセージの中において、イラストなどを用いてイエス様が行われた奇跡を視覚的に表し、出来事の全体を知る。
- ②イエス様が与えられる命のパン＝御言葉をたくわえること、礼拝を大切にすることを育て、どんな試練の時も主により頼み、主から知恵をいただくことを学ぶ。

〈展開例〉

イエス様が説教をして町々を巡っていると、イエス様にお会いしたい、お話を聞きたいという人がたくさんイエス様について来ていました。きょうのお話はテベリヤ湖の近くの山での出来事です。

イエス様のあとについてきた人たちの人数を数えると、男の人だけでも5000人だったと書いてあります。女の人や、子供たちを合わせるともっとももっとたくさんの方がそこには集まっていたでしょう。

その時、イエス様と弟子たちはこんなお話をしました。イエス様はフィリポさんに、「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」と言いました。フィリポさんは「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」と答えました。また、アンデレさんも「ここに大麦のパン五つと魚二匹を持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう」とイエス様に伝えました。二人のお弟子さんたちは、「足りない、役にも立たない」と言って、何の期待も持っていません。けれども、目の前には多くの奇跡を行い、町々で説教をしてきたイエス様がいらっしゃいます。イエス様は、日々私た

ちに問われます。目に見えるものだけで考えたり、決めてしまうのかと。

すべてのことを神様に期待して、お祈りしてみましょう。聖書をしっかり読んでみましょう。神様は私たちが無理と思うことでも何でもお出来になります。神様にとって不可能なことは何一つありません。

それは、次のことで、私たちにもよくわかります。イエス様は、少年がささげてくれたわずかな食べ物を取って感謝をささげ、その場の人々に分け与えられました。それを、人々がお腹一杯になるまで、ほしいという分だけ十分に与えられました。その後、余ったパン切れを集めると十二個ものカゴがいっぱいになっていました。五つのパンと二匹の魚がイエス様によって、これだけたくさんの人々のおなかをいっぱい満たしたということです。やはりイエス様にとって不可能なことは何一つありませんね。

ここでの出来事の後、イエス様はまた旅を続けられました。その時、パンについてこうお話しされています。「わたしが命のパンである。わたしのもてに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない」(35)と。これは私たちにとって大きな希望であり、本当に確かな神様の約束です。イエス様は命のパンです。私たちはイエス様によって養われることが必要です。私たちが犯してしまうたくさんの罪も、イエス様によって洗い清められます。イエス様にお祈りし、赦していただき、聖書を読んで礼拝に参加し、いつもイエス様と繋がっていきましょう。そうするとなんでもお出来になる神様が私たちを光の子供として強く、賢く、優しく輝かしてください。



〈ねらい〉

主の日の公同の礼拝を守り、そのところでみ言葉に養われること、これこそ「聖なる公同の教会」のひとつの肢体である私たちの信仰生活にとってなくてはならぬものであることを子どもたちに理解させる。

〈展開例〉

イエス様に従った大勢の群衆にイエス様は食事をお与えになられた。このことは四つの福音書すべてに記されている。これはイエス様の「福音」を語るときにどうしても省くことのできない出来事として弟子たちに記憶されている。

大人の男性だけでも5000人の人々がいたと聖書に記されていて、女性や子どもを合わせるとおそらく倍近い人々、あるいはそれ以上の人々がいたと思われるが、イエス様はそれらの人々に食事を与えられた。その人々にイエス様はひとりの少年が持っていた五つのパンと二匹の魚を、感謝の祈りをささげてから分け与えられた。人々が食べて満腹し、イエス様に言われて弟子たちが集めた残りのパンは十二の籠にいっぱいになったと福音書記者は記している。

この人々の食事をどうしようかとイエス様が問われたときに、フィリポは二百デナリオン分のパンがあっても足りないでしょうと答えている。またアンデレは、「五つのパンと二匹の魚を持っている少年がいますが、何の役にも立たないでしょう」と答えている。

一部の「注解書」は、子どもが自分の食事を差し出したので、他の人々も自分の持っているものを出したので皆が食べることができたなどと「合理的に」解説するが、それは主イエス様が神の御子であるということを否定した勝手な自己流の解釈であって、そのような解釈はすべきではない。6節に、「こう言ったのはフィリポを試みるため

であって、御自分では何をしようとしているか知っておられたのである」と記されている通り、五つのパンと二匹の魚をこれらの人々にお与えになられたことは明白であり、「合理的」に理解すべきではない。

イエス様は感謝の祈りをささげて人々に分け与えられた。このことは最後の晩餐の食卓を思い起こす。イエス様が与えたもうまことのパン、それを食することは永遠の生命に至る真理の糧をいただくこと。神様は私たちを主に連なる肢体のひとつとしてくださった。この教会のかしらであるキリストがおひとりである以上、その体なる教会もひとつである。私たちはそのひとつなる教会につながるひとつの肢体である。それは私たちの信仰が決して孤独なものではなく、共にかしらなるキリストに結び合わされて生きる聖徒の交わりの祝福の中にあるのである。

それ故、主の日に共に教会に集められ、礼拝を守り、神様に祈るということは私たちにとってきわめてたいせつなことである。神様のみ言葉である聖書を自分勝手に解釈し、その一部分だけをとりあげて解釈しようとするのではなく、「聖なる公同の教会」の中でみ言葉の説き明かしをうけることにより「み言葉に聴く」ことが求められる。イエス様からのいのちのパンで生きる。これこそが重要なことである。

〈お祈り〉

神様、私たちは教会のかしらであるイエス様に従って、イエス様から与えられるいのちのパンによって日々生きることができるようになってください。また聖書を自分勝手に、自分の都合のいいように解釈することがないように教会の礼拝に出席して聖書を正しく理解することができるようになってください。また日々み言葉に親しむことができるようにしてください。イエス様の御名によって祈ります。アーメン。

「さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、“霊”に導かれて荒れ野に行かれた。そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。

すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。『神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。』イエスはお答えになった。『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある。』

(マタイ4:1-4)

イエス様は、私たちに必要なすべてのものを備えてくださるよき羊飼いであり、王です。今日のヨハネ福音書の記事にあったような、驚くべき奇跡で、食べ物だって備えてくださいます。でも、そういうパンが、私たちにとって一番大切なものではないのだと、イエス様はいつも教えてくださいます。

私たちの命を本当に養ってくれるのは、イエス様という命のパンです。イエス様を食べるのです。それはすなわち、礼拝やお祈りを通してイエス様との命の交わりを味わうことであり、イエス様の与えてくださる御言葉から、勇気と励ましと慰めを得て、信仰と希望と愛に生きることです。

〈たくさんパンに飽き足りても、魂がやせ細って、死んだようになっている人たちがいます。その一方で、体はガリガリに痩せ細っていても、イエス様を食べることで、その目に希望の光を宿している人もいます。

あなたはどうかでしょうか？あなたの周りにいる人々はどうかでしょうか？)

○マザー・テレサの言葉

「豊かそうに見えるこの日本で、心の飢えはないでしょうか。

だれからも必要とされず、だれからも愛されていないという心の貧しさ。

物質的な貧しさに比べ、心の貧しさは深刻です。心の貧しさこそ、一切れのパンの飢えよりも、もっともっと貧しいことだと思います。日本のみなさん、豊かさの中で、貧しさを忘れないでください。」

○保田広輝兄(長丘教会会員)は、現在20歳。デュシェンヌ型筋ジストロフィーという生まれつきの進行性の難病を抱えておられ、電動車椅子と人工呼吸器を24時間使用しながら生きておられる。

かつては自分のことを不幸だと思っていたという。何度も神様の存在を疑い、祈りが聞かれていないと悲しんだ。でも13歳で信仰告白した時から、毎日聖書を読み、祈り、教会へ行き、様々な本を読むことで、神様に少しずつ心を変えていただいて、難病を受け入れることができるようになったという。

今、彼は言う。「僕は神様からの任命を受けて、難病の身体で生まれてきたのです。生まれつきの難病の人生も神様からの召命なのです。僕はむかし、自分のことを不幸だと思っていましたが、神様と出会ったことで、信仰・希望・愛を感じながら生きていけるようになりました。これは神様が与えてくださった大きな奇跡だと思っています。僕には難病の人生を通して、神様を証して、キリスト教を宣べ伝え、人々に信仰・希望・愛をプレゼントしていく役割があるんです。」

彼はインターネットを通して様々な仕方で「命のパン」であるイエス様を伝えていきます。(ブログ:「明日を夢見て 神様と筋ジストロフィーと共に生きる」) そんな彼のもとに、苦悩を背負った方々が集まって、生きる勇気を得ていると聞きます。私も、会うたびに、彼の信仰に励まされています。



テキスト 使徒言行録 2章1~4、43~47節

使徒1章4節において、主は、「エルサレムを離れず」、前から語っておられた「父の約束されたもの(聖霊)を待つように」語られた。8節では、「聖霊が降ると」、「力を受け」、「わたしの証人となる」と語られた後に、昇天されたことが記されている。これを受けた2章では、聖霊が与えられた時の凄まじい様子と、聖霊を受けた初期キリスト者の生活と礼拝の在り方を見ることができる。

1節：「五旬祭」は「五十日目」の祭りという意味で、過越祭の翌日の除酵祭から数えて、七週目のことで、七週祭とも呼ばれた(出34:22)。元は初穂をささげる「刈り入れの祭(出23:16)」であり、ユダヤ人男子がエルサレム神殿に詣でなくてはならない三大祭りの一つである。また、シナイで律法を与えられたことを記念する日でもある。2章15節に、「朝の9時」とあるが、これは祈禱の時刻である。この最も宗教的な日の祈禱の最中に、神の恵みなる聖霊が降ったのである。1節の「一同」が「一つになって」と二重になった表現は強調である。また、多くの注解者の理解に従って「一同」を1章15節の120人にも及ぶ「兄弟たち」のことと理解するなら、2節で「家」と訳されている「(ギ) オイコス」は「神殿」と訳するのがよいかも知れない。諸々の国のディアスポラのユダヤ人も詣でていた(9~11節)その神殿において、聖霊が体で感じ取れる現象を伴って降られた。そして、その物音を聞いて、大勢のユダヤ人が集まって来たのである(6節)。

2節：この時の激しい音を伴った「風」は聖霊である。それまでも「風」は聖霊の象徴として用いられている(列王上19:11、エゼ37:9、ヨハ3:8)。「天から」聞こえたとは、神の働きが作用しようとしているということである。

3節：更に、「炎」のような舌が現れたとあるが、「炎」は神の臨在の徴であり、神の栄光の現れ、

また「力」である。洗礼者ヨハネは、救い主の洗礼は「聖霊と火」を伴うものであると語っていた。天から来た神の「臨在と栄光がと力」が個人個人に臨み、人々の精神に霊的なものが吹き込まれたのである。

4節：聖霊に満たされた兄弟たちは「“霊”が語らせるままに」話し出した。「響き」と「炎の舌」という、五感で感じる徴を伴いながら、「ほかの国々の言葉で話し出した」のである。これは、神に対して語る、意味の分からない「異言」とは異なると理解されている。6、11節で理解されていることが記されていることがわかる。

このペンテコステの出来事により、聖霊が降り「主の証人となる(1:8)教会が誕生したのである。

43節以下：使徒たちによって多くの「不思議な業とするし」が行われ、神の介入を認めざるを得ず、畏怖の念が生じた(43節)。44節には再び「一つ」という言葉がある。44節の共同所有は、個人所有を全て捧げることが義務とされていたクムランのエッセネ派とは異なり、個人個人が自分の土地や持ち物を売り、信徒仲間の困窮者にあてていたものである。初期のキリスト者は、46節にあるように、ユダヤ教の神殿礼拝にも参加していたが、他方で、独自の礼拝生活が発生し、それが「パン裂き」と共同の会食であった。46節の「喜び」とは天上の宴会の前味を示す特徴的な表現である。また、「真心をもって」とは全く神に心を向けることを意味している。共同の会食は、霊における交わりの極めて具体的な表現であり、神賛美と結びついた礼拝行為であり、深い信仰の精神に貫かれたものであった。それ故、世間全体からも「好意を寄せられ」(47節)、イエスを主と告白する群れは民衆の中に根を降ろしていった。また、集会の急速な成長の主体が「主」になっていることも見落としてはならない。(袴田清子)

子どもカテキズム 問4

子どもカテキズム

問4 私たちの神さまが私たちに望んでおられることは何ですか。

答 神さまを愛することと、
家族やお友だちを愛することです。

この問4は、「人生の目的」の最後の問いである。今回はこの問4を二回に分けて学ぶ。

〈神の愛を知る〉

この問4の答え「神さまを愛することと、家族やお友だちを愛すること」は、「神を愛し、隣人を愛せよ」という律法の要約に対応している。主イエス・キリストもまた、これを正しいものと認めておられるし（ルカ10:28）、ご自身でもこのことを語っておられる（マタイ22:37以下）。神さまが私たちに望んでおられることは、何よりも私たちが「愛する」ことである。

しかし、私たちがこの神の律法の求めに応じて「神を愛し、隣人を愛する」ために不可欠なことがある。それは、私たちに向けられている「神の愛」を知ることである。私たちの神さまは、私たちを愛しておられる神さまである。私たちを愛しておられる神さまが「私たちの神さま」であるということ、私たちが愛することの根拠はすべてそこにあることを知らなければならない。

〈神さまが私たちに望んでおられること〉

神さまは、私たちを愛されるがゆえに、私たちがその神さまの愛の中で生きることを望んでおられる。なぜなら、それこそが、神さまが私たち人間を造られた本来の目的であり、そのように生きることが私たちにとって真実の喜びだからである。子どもカテキズム問1の答えにある「神さまを知り、神さまを喜び、神さまの栄光をあらわす」ことは、何よりも私たちが神さまの愛の中で生きることにある。神さまが私たちに「愛する」ことを望んでおられるということは、私たちにとってそれが喜びとなるからである。

〈神さまを愛すること〉

「愛すること」の第一点として「神さまを愛す

ること」が挙げられる。神さまの愛の中で生きることは、何よりも「神さまを愛する」ことである。私たちの人生の目的そのものが、「神さまを愛する」ことにあり、それは、私たちがそうしたいと望むからではなく、私たちを愛しておられる神さまがそのように望んでおられるのである。

そして「神さまを愛する」ことが私たちの人生の目的であるならば、私たちはその存在全体をもってそれをなしていかなければならない。なぜなら、神さまは「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」（マルコ12:30）と私たちに求めておられるからである。子どもカテキズム問3の答えとしての「礼拝をささげる」ことや「お祈り」することは、そのような「神を愛する」ことの具体的な行為であることを確認したい。

〈家族やお友だちを愛すること〉

「愛すること」の第二点として「家族やお友だちを愛すること」が挙げられている。これは、「隣人を愛すること」を言い換えたものである。

神さまを愛することは、神さまが愛しているものを愛することでもある。神さまを愛することと隣人を愛することは決して切り離されるものではなく、むしろ強く結びついていることを覚えたい。私たちが「家族やお友だちを愛する」のは、自己愛の延長ではなく、神さまに愛され、神さまを愛する、神さまとの愛の関係から出てくるものである。神さまと私たちの愛の関係は、私と神さまという個人的関係にとどまらず、私たちの周囲に生きる人々への広がりを持つものであることを覚えたい。（松田基教）

※第29号（2008年5月18日）より再掲載。

テキスト 使徒言行録 2章1～4、43～47節

子どもカテキズム 問4

参照カテキズム 子どもカテキズム 問34

(単元のねらい)

初代教会の貧者への愛の配慮は、信徒生活での共有と分配に見られる（使徒2:44、4:34、6:1、11:29）。マリアらの奉仕（ルカ8:3）もペトロらの施し（ルカ12:33）も、人を富ませるため貧しくなられた神の子への賛美（ルカ19:37）に至る。主イエスの在り方が教会の生き方を決定づけた（コリント二8:9、6:10）。主によって豊かにされた私たちにも、貧しい人々への奉仕が委ねられている。相手を豊かにするため自分が貧しくされる幸いを味わう。

貧しくされる幸いは

光と闇がまったく別々であったなら、光は光のまま、闇も闇のままです。しかし、光が闇に飛び込むとき、闇の中で光はいよいよ輝きを増し、光に照らされた闇も輝き出します。豊かな人と貧しい人が背を向けていたなら、どちらも独りぼっちなままです。しかし、貧しい人が豊かな人を慕い、豊かな人が貧しい人を助けるとき、貧しい人は豊かにされる望みを見出し、豊かな人は貧しくされる幸いを知るのです。

そのような生き方をする人々がありました。エルサレム教会に集うキリスト信者たちです。「信徒たちは皆一つになって、すべてのものを共有にし、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。」（使徒言行録2:44-45）信徒の仲間たちは、自分の持ち物を皆のために喜んで差し出し、それを互いに分け合って生活していました。それには理由があるのです。ユダヤ人がキリスト信徒になった途端、家族や社会とのつながりを無くしてしまうことが多かったからです。仕事を失うこと、貧しく暮らすことを覚悟しなければなりません。ところが、「信者の中には、一人も貧しい人がいなかった。土地や家を持っている人が皆、それを売っては代金を持ち寄り、使徒たちの足元に置き、その金は必要に応じて、おのおのに分配されたからである。」（使徒言行録4:34-35）このように、キリスト教会

に集う信徒たちは、主イエスに結ばれた真の兄弟姉妹として、貧しさと豊かさのすべてを分かち合う共同生活を送っていました。周りの人々から見れば、それは驚くべき生き方だったのですが、それだけでなく、好意を寄せたくなるような生き方（使徒言行録2:47）でもあったのです。

この生き方は、主イエスに出会った人々の生き方そのものでした。「悪霊を追い出して病気をいやしていただいた何人かの婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア、ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにスサンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒にあった。彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた。」（ルカ8:2-3）彼女たちの献身と奉仕によって、主イエスの福音宣教は支えられていたのです（ルカ8:1）。誰よりも豊かな神の子が、自ら貧しくなって病人をいやし、神の国の到来を告げ知らせていたのです。その恵みによって救われた婦人たちは、主に倣う生き方を選んだのです。

その生き方を、キリストは十二人の弟子たちに、はっきりとお命じになりました。「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。自分の持ち物を売り払って施しなさい。擦り切れることのない財布を作り、尽きることのない富を天に積みなさい。そこは、盗人も近寄らず、

虫も食い荒らさない。あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ。」(ルカ12:32-34) 貧しい人を豊かにするために、自ら貧しくなること。弱い人を強くするために、自ら弱くなること。愚かな人を賢くするために、自ら愚かになること。これこそ、神の子イエス・キリストの賢さ、強さ、豊かさでした。そしてこれこそ、弟子たちに与えられる救いの恵みでした。「この恵みによって生きよ」と、救い主は仰せになります。弟子たちも婦人たちも、このように教えてください。主イエスを喜び、本当にその通り生きておられたキリストを賛美する(ルカ19:37)のです。

この方が人の世の罪を担って、十字架の死を遂げられたのです。その方は神の義を示すため、三日目に復活されたのです。あの方は天に上げられ、罪の赦しと神との和解を証しするため、聖霊を降されたのです。主イエスの聖霊を受けた使徒ペトロは、大胆に説教を語ります。「悔い改めなさい。めいめいイエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。」(使徒言行録2:38)「ペトロの言葉を受け入れた人々は洗礼を受け、その日に三千人ほどが仲間に加わった。彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。」(使徒言行録2:41-42)そこで、信徒仲間たちによる共同生活が始まったのです。貧しい仲間を豊かにするため、自分は喜んで貧しくなる。そのようにして営まれるキリストの体なる教会が、エルサレムに誕生したのです。

そのエルサレム教会を迫害して回ったサウロ、復活の主に出会って回心したパウロも、聖霊の恵みをいただいて語り出します。「あなたがたは、わたしたちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、主の貧しさによって、あなたがたが豊かになるためだったのです。」(コリント二8:9)キリストに結ばれて豊かな者とされたパウロは、多くの貧しい人々

を豊かにするために、主イエスとともに貧しい者となりました。「わたしたちは、この奉仕の務めが非難されないように、どんなことにも人に罪の機会を与えず、あらゆる場合に神に仕える者として、その実を示しています。大いなる忍耐をもって、苦難、欠乏、行き詰まり、鞭打ち、監禁、暴動、労苦、不眠、飢餓においても、純真、知識、寛容、親切、聖霊、偽りのない愛、真理の言葉、神の力によってそうしています。左右の手に義の武器を持ち、栄誉を受けるときも、辱めを受けるときも、悪評を浴びるときも、好評を博するときにもそうしているのです。わたしたちは、人を欺いているようであり、誠実であり、人に知られていないようであり、よく知られ、死にかかっているようで、このように生きており、罰せられているようで、殺されてはならず、悲しんでいるようで、常に喜び、物乞いのように、多くの人を富ませ、無一物のように、すべてのものを所有しています。」(コリント二6:3-10)

この生き方こそ、神の子キリスト・私たちの主イエスが歩み抜かれた十字架の道のりです。光が闇に飛び込んで、闇の中で光がいよいよ輝きを増し、光に照らされた闇も輝き出す。そのような驚くべき生き方です。貧しい人が豊かな人を慕い、豊かな人が貧しい人を助け、貧しい人は豊かにされる望みを見出し、豊かな人は貧しくされる幸いを知る。そのような素晴らしい共同生活です。イエスさまを主と仰ぎ、神さまを父と呼ぶ。この恵みをいただいている私たちもまた、キリストのからだとして、助け合って生きることを求められているのです。

私たちは、主イエスの栄光に照らされている光の子です。その栄光は、私たちの信仰の鏡に反射して、世の闇の中でいよいよ輝きを増してゆきます。私たちは、神の愛を注がれているキリストのからだです。その愛は、私たちが貧しさと豊かさのすべてを分かち合って生きる時、ますます広がってゆきます。貧しくされる幸いは、豊かな実を結ばせるのです。(二宮 創)

[今週の暗唱聖句] コリントの信徒への手紙二 8章9節

主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。

それは、主の貧しさによって、あなたがたが豊かになるためだったのです。

〈ねらい〉

ペンテコステの記念の日に、聖霊なる神さまがわたしたちを変えてくださることをおぼえましょう。

〈お話〉

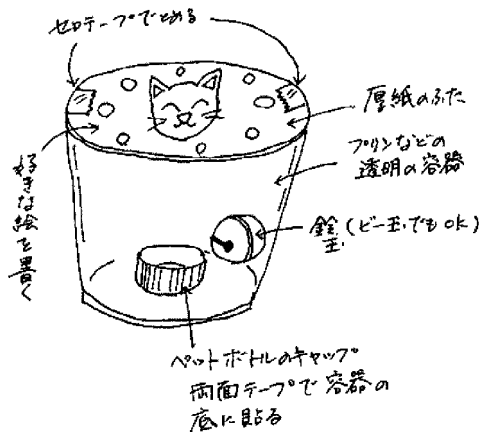
世界で初めての教会ができたのは、ペンテコステというお祭りが行われていた時でした。イエスさまを信じてお祈りしていた弟子たちの部屋に、突然激しい風が吹く音が響き渡ったり、炎のような舌が分かれて弟子たち一人一人の上にとどまったのです。それは一人一人に聖霊なる神さまが来て下さいましたよ、というしるしでした。

イエスさまを信じる人には必ず聖霊なる神様が来てくださいます。聖霊なる神さまは私たちにイエスさまのことをよくわかるようにして下さり、神さまと人を愛するやさしい心を持てるようにすこしずつ心を変えてくださいます。

最初の教会は、みんな服も、食べ物も、住むところも分け合って使いました。誰もそれは俺のだから返せとか、ここは私の家だから入っちゃだめとは言いませんでした。わたしたちと大違いですね。でもわたしたちも聖霊なる神さまにお願いすれば、わたしたちも、神さまとお友達を愛するようになり、必ず変えられます。



〈工作〉 ミニ鈴入れ



出来上がったら鈴玉をペットボトルのキャップに入れてみよう。

〈ねらい〉

神さまを愛するためにどんなことができるか考えてみよう。

〈展開例〉

みんなは、神さまがみんなのことを愛してくださっていることを知っていますよね。神さまは聖書を通して「私にとってあなたはとても大切な子どもだよ。私はあなたを愛しているよ。」と教えてください。神さまはみんなのことが好きなのです。だから、私たちは神さまと両想いになれるのです。神さまと両想いになれるなんて素晴らしいことだと思いませんか？好きな子と両想いになれば、学校へ行くのが楽しくなるよね。神さまと両想いになれば、毎日を生きることがとてもうれしくなるのです。

神さまも、私たちが神さまのことを愛して両想いになることを望んでおられます。では、私たちはどうやって神さまを愛することができるでしょうか。少し考えてみましょう。

私たちは教会でどんなことをしますか？礼拝をする。お歌を歌う。お祈りをする。それは全部神さまを愛するということなのです。

そして、お父さん、お母さんや、お友達と一緒にご飯を食べたり、遊んだり、お話ししたりしますね。実はそれも、神さまを愛することなのです。どうしてだと思いませんか？

今日はじめに、神さまはあなたのことをとても愛してくださっているのだとお話ししました。同じように、神さまはあなたの家族やお友達のことも愛しておられます。神さまにとって一人ひとりがとても大切で、かけがえのない人だからです。神さまを愛するというは、神さまが大切にしているものを、自分も大切にすることです。神さまが愛している人を、自分も愛するということなのです。

〈お祈り〉

神さま、私たち一人ひとりのことを心から愛してくださってありがとうございます。わたしも、お祈りをしたり、先生のお話を聞いたりすることで神さまを愛します。そして、神さまが愛しておられるわたしの家族やお友達を、わたしも愛します。神さまと両想いになれる幸せをわたしにも教えてください。アーメン。



〈ねらい〉

神様から愛されていることを、わたしたちは教えられている。神様はわたしたちに何をお望みだろうか。神様から教えられた愛を、わたしたちの間でも分かち合うことを学びたい。

〈展開例〉

○言葉探しをしてみよう。どのような言葉がたくさん出てくるだろうか。普段学校で使っている教科書では、めったに見られないような言葉もあるかもしれません。

☞ たくさん用いられている言葉として、「一つ」、「一同」、「一緒」など。一つつく言葉が多い。また、聖霊や霊などは、教科書ではめったに見られない言葉かもしれませんし、風や息や炎なども、生徒たちが日ごろ使っているのとは違った意味を含んでいるといえるでしょう。

○風や息や炎は、何が現れたしるしなのでしょう。聖霊とは何でしょう。聖霊の働きによって、何が生み出されたのでしょうか。

☞ 教会の誕生について話し合う。「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。(使徒言行録1:8)」聖霊を受ける前と後で、何か変わったのでしょうか。

○教会とは、何を一緒にするところでしょうか。

☞ 礼拝はもちろんのこと、一緒に食事をしたり、交わりの時を持ったりします。本日のテキストには、これらのことが、教会外の人々からも好意的に見られていたことが記されています。礼

拝の中でなされる賛美や祈り、洗礼式や聖餐式について話してもいいでしょう。聖餐式は、本日のテキストにある、分かち合いや自己犠牲と深く関わっていると思います。

○貧しくされる幸いとは何でしょう。

☞ コリントの信徒への手紙二8章9節(今週の暗唱聖句)について考えてみましょう。主の豊かさと貧しさとは、また、わたしたちの豊かさと貧しさとは、何でしょう。主が貧しくなることによって、わたしたちが豊かにされたように、わたしたちもほかの人たちを豊かにすることができ、それを喜ぶことができるのでしょうか。イザヤ書53章を読んでみましょう。

○イエス様が教えてくださった、最も大切な戒めとは何でしょうか。神様と人(家族や友だち)を愛するとはどういうことでしょうか。なぜ愛さなければならないのでしょうか。

☞ 本日のカテキズムについて考えてみましょう。身近で具体的な愛の行為を数え上げてみる。また、子どもカテキズム問1と関連させて復習したり、次週の教会学校のテキストにつなげたりすることもできるでしょう。

〈お祈り〉

神様、わたしたちに聖霊をお送りくださり、ありがとうございます。神様が私たちを愛してくださったように、わたしたちも神様とわたしたちの周りの人たちを愛することができるようにしてください。わたしたちが毎日少しずつイエス様に似た者となっていくことができますよう、お導きください。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。



今日はペンテコステだから、愛の主キリストの霊＝聖霊の力を、子どもたちに証しすることに専念しましょう。

使徒言行録に記されるのは、生きて働いておられるイエス・キリストの霊によって生み出された、イエス・キリストの命に満ちた群れ。

この群れはまだ生まれたばかりの赤ちゃんのようなもので、イエス様への信仰以外に何も持っていない。建物もない、制度も整っていない、まだこの時には新約聖書もなければ、旧約聖書だってまとまっていない。もちろんウエストミンスター信仰告白などもない。間違った方向にいつてしまう危険もいっぱいある。でも赤ん坊が、その時だけは親からいたれりつくせりしてもらえるように、この小さな群れもイエス様から特別な恵みを多く与えられた。

原始教会の時代というのは、聖霊の力、生きて働くキリストの霊の力が特別に強く働いた時だったといえる。ペンテコステの聖霊降臨だけでなく、様々な面で、ペンテコステの時と同様の特別な力に満たされていた時。イエス・キリストが確かに生きて働いておられるということが、とてもよく分かる。今日のテキストにあるような教会の愛の奉仕や美しい一致の姿を見て、エルサレムの人々は「あの十字架で死んだイエスは神の子、力ある救い主で、本当に今も生きている」と認めざるをえなかっただろう。

しかし、確かにこの原始教会時代は特別ではあるが、私たちにも、彼らに与えられたのと同じ聖霊が与えられていることは、大きな励ましである。このことをしっかり確認しよう。ここに記されていることは、教会学校の子もたちとは全然関係ない昔話ではない。主は今の時代には今の時代に合わせた仕方で、愛の奇跡を示してくださる。

私たちのために貧しくなられた愛の主は、今もたしかに生きておられて、聖霊において私たちの内に住んでくださり、愛する力を与えてくださる。聖霊において、教会を強く導いてくださって、美しい一致を与えてくださる。

神を愛するにしても、人を愛するにしても、「愛する」という行為は、自力でなすのではない。私のうちに生きておられる、主がなさせてくださることである。この私にも聖霊が与えられている！（ハイデル53問）。私のために命を使い果たしてくださった愛の主は、確かに聖霊において、私たちを支配してくださって、愛しい、助け合い、仕えあう豊かさに、必ず導いてくださる！

〈聖霊においてあなたの内に生きておられる、愛の主の促しを覚えさせられたことはないか？

愛しがたい人を、愛するようにと、御言葉によって迫りが与えられ、体が動かされたという経験はないか？

それでも結局、和解ができなかったという失敗談もあろう。でも結果はどうであれ、愛の主イエスの後に従おうとの思いが与えられた経験があれば、子どもたちと分かち合ってあげていただきたい〉



テキスト ルカによる福音書 10章25～37節

ある律法の専門家がイエスさまを試そうとして質問した。「何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」。私たちが救われて、神さまの祝福の中に生き続けるためにはどうしたらよいのでしょうか。

口先では真剣に尋ねているように見えても、男の真意をイエスさまは見抜かれている。逆に尋ねられました。「律法には何と書いてあるか」。

男は正解を答えることができた。神さまを愛すること、そして隣人を自分のように愛することで

す。イエスさまは「正しい答えだ」と受け入れられると共に、続けて言われました。「それを実行しなさい」。もし律法を知って、それを頭の中に蓄えているだけであれば、それには意味がない。律法を実行し、律法が告げるとおりに生きることこそが肝腎である。あなたは心から神さまと隣人とを愛して生きているか。このことをイエスさまは問われています。

形勢が至って不利になったことを認め、男は自分を正当化しようとして、「私の隣人とは誰ですか」と反問します。正当化しようとしたということは、彼は何らかの責めを感じたのであろう。

それは、愛を実行できないでいる良心の呵責であろうか。もしそうであれば、それは神さまの御前に必要のなかったことであつたし、してはならないことであつた。彼にはこの道理が判らない。

それとも男は、律法の専門家としての誇りを傷つけられたかのように感じて、イエスさまを概念論争の泥沼に引き込もうとしたのか。「実行しなさい」というイエスさまの答えの急所を有耶無耶にするために、それが有効な手段のように思えたのか。

男のこの質問によって「善きサマリア人」の譬え話が語られることになる。話そのものにここで立ち入る必要はないであろう。

最後にイエスさまは尋ねられる。「さて、あなたはこの三人の中で、誰が追いはぎに襲われた人

の隣人になったと思うか」。

隣人とは誰か。座り込んで、一体誰が私の隣人であろうかと思い巡らし、首をぐるぐる廻して眺めてみても答えは出てこない。誰も自分の首に「隣人」という看板を掲げてはいない。

待っているのではなく、自分から進んで出て行かなければならない。いや、出て行くまでもない。自分が今生きている、その現実において、注意深く観て、聴いて、心と体を働かせるときに、見えてくるものがある。

私の愛と助けを求める人がそこにいる。その人の隣人に、自分になることだ。その挑戦を受けている。

なお二つのことに留意したい。一つは当時のユダヤ人一般にとって、サマリア人が隣人たりうるとは思いもよらないことであつたということだ。この譬え話は、私たちが隣人となるべき相手には何の制限も制約もないということを教えている。現在、国際社会にあって、なお得体の知れない国がある。国の流れが画一的で統制的な視点によって押し流されてしまっている。しかし、そこで生きているのは一人一人の個人である。言う迄もなく国と個人は別である。視野狭窄に陥らぬよう心掛ける必要がある。

もう一つのことは、このサマリア人は主イエス・キリストのことである、ということ。主は私たち一人ひとりに対して、憐れみをもって本当の隣人となってくださっている。

傷つき倒れた私たちを介抱し、宿屋へ連れて行き、代金を支払ってくださっただけではない。私たちの身代わりに、私たちのために、御自身が十字架の死を遂げてくださった。このことを通し、主は私たちのまことの隣人となってくださった。

この愛に生かされている私たちです。その愛の中で、「行って、あなたも同じようにしなさい」という御声を聴くのです。(大場康司)

※第29号(2008年5月18日分)より再掲載。

子どもカテキズム 問4

子どもカテキズム

問4 私たちの神さまが私たちに望んでおられることは何ですか。

答 神さまを愛することと、
家族やお友だちを愛することです。

今回は、この問4の学びの二回目である。「神を愛し、隣人を愛せよ」という律法の要約のうち、第二点の「隣人への愛」が学びの中心となる。

〈隣人への愛〉

子どもカテキズムは、「隣人への愛」を「家族やお友だちを愛すること」と言い換えている。確かに子どもたちに対して「隣人」とは誰かを説明しようとするならば、「家族やお友だち」という表現もふさわしいとは言えるだろう。しかし、子どもたちが、聖書が教える「隣人への愛」を、狭く限られたものとしてのみ理解することのないように注意したい。

良きサマリア人のたとえとその導入によって示されるように(ルカ10:25以下)、聖書が教える「隣人」とは、私たちの身近な人々に限定されない。したがって「隣人への愛」も限定されたものとして理解されるべきではない。

〈敵を愛する〉

子どもたちにとって最も身近な存在である「家族やお友だち」を愛することを教えることは大切である。しかし、家族やお友だちとの関係がいつでも良好であるわけではない。叱られたり、喧嘩をしたりしてその関係が一時的に悪くなることもある。また、「敵」という言葉はふさわしくないかもしれないが、子どもの間でも陰険な関係はありうる。そんな時でも相手を「愛する」ことができるためには、聖書が教える「愛すること」の広さ深さを知らなければならない。

神さまは、私たちが自分にとって都合の良い時にだけ隣人を愛するのではなく、どんな時であっても、どんな相手であっても愛することを求めておられるからである。「敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にしなさい。悪口を言う者に祝福を

祈り、あなたがたを侮辱する者のために祈りなさい」(ルカ6:27-28)。

〈赦す愛〉

聖書が教える愛の最たるものは、「赦す愛」である。神さまは、神さまに背き、敵対していた私たちをその大いなる愛によって赦してくださった。前回学んだように、私たちが愛するということは、その神さまの私たちに対する大いなる愛を根拠としている。したがって、わたしたちが隣人に対して示す愛も、まず何よりそのような「赦す愛」でなければならない。「あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい」(ルカ6:36)。

また、私たちに「敵を愛する」ように教えられたイエス・キリスト自らがそのように「敵を赦された」ことを知らなければならない。キリストを信じる者が「敵をも愛する」のは、キリストに倣う者としてあるためである。

〈隣人への愛の規準としての十戒〉

最後に、子どもカテキズムが、その問40において、十戒の要約として「神と人への愛、二つで一つの愛」を教えていることに注目したい。神さまは、私たちに「神を愛し、隣人を愛せよ」と命じられるだけでなく、それを私たちがなすための規準を与えていてくださる。

十戒の戒めを、ただお題目のように唱えたり、私たちの自由を縛る厳しいものと理解するのではなく、私たちが「神を愛し、隣人を愛する」ために、神さまが与えてくださったものと受けとめ、それを教え、学ぶことは大切なことである。

(松田基教)

※第29号(2008年5月25日)より再掲載。

テキスト ルカによる福音書 10章25～37節

子どもカテキズム 問4

参照カテキズム 子どもカテキズム 問40

(単元のねらい)

自分を愛するように隣人を愛しなさい (レビ19:2, 18) との掟で、主イエスは敵への愛を強調された (ルカ6:27-28, 36)。善きサマリア人の譬えは、神の民から外れた人物が隣人と成り得ることを印象づける (同10:37)。隣人とは、憐れみを必要とするすべての人のこと。その人々への愛を尽くされたのが主イエスであった (同23:34, 43)。多くの罪を赦された人は主への愛の大きさと分かる。赦されることの少ない者は愛することも少ない (同7:47)。

隣人への愛を尽くす

「自分を愛するように、隣人を愛しなさい。」 (レビ19:18) そのように、日曜学校の先生が聖書を読んできました。この御言葉を聴くたびに、クスッと笑う声が聞こえたものです。「人参 (ニンジン) を愛しなさい? だってさ。」 そんなヒソヒソ話が始まることもありました。愉快的日曜学校のむかしを思い出すと、大人になった今でも、「ニンジン を愛しなさい」って聞こえてしまうんです。おかしいですね。

ヘブライ語の読み書きを習っていたユダヤの子供たちは、学校の先生がこの聖書を読んできたとき、どのように聞こえたのでしょうか。「自分を愛するように、レーアを愛しなさい。」レーアとは「自分以外のすべての人」のことです。「兄弟姉妹」や「友だち」など「親しい間柄の人たち」のことだけではありません。「嫌いな人」や「喧嘩相手」など「敵対している者たち」のことも含まれているのです。自分のことのように、自分以外のすべての人のことを思って、心から愛しなさい。そう聞こえたはずですよ。

実は、この聖書の教えは、ユダヤの人々にとって最も大切な教えでした。「ある律法の専門家(聖書の研究者) が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。『先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。』」イエスが、『律法には何と書いてあるか、あなたはそれをどう読ん

でいるか』と言われると、彼は答えた。『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。また、隣人 (レーア) を自分のように愛しなさい、とあります。』イエスは言われた。『正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。』」 (ルカ10:25-28)

隣人 (レーア) を自分のように愛しなさい。自分のことのように、自分以外のすべての人のことを思って、心から愛しなさい。この御言葉は、永遠の命 (天国での救い) に与かるための大切な教えであり、聴くだけでなく行わねばならない重要な掟である。そのようにイエス様がおっしゃるとき、親しい間柄の人たちを愛することは当然のこととして、むしろ敵対している者たちを愛することを強調なさいます。「敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にしてください。悪口を言う者に祝福を祈り、あなたがたを侮辱する者のために祈りなさい。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな恵みがあるか。あなたがたは敵を愛しなさい。人に善いことをし、何も当てにしないで貸しなさい。そうすれば、たくさん報いがある。あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい。」 (ルカ6:27, 28, 32, 35, 36) 敵を愛することこそ、隣人 (レーア) を愛することにほかならない。これ

がイエス様のお考えでした。

ところが、イエス様を試しにきた律法の専門家は、「自分を正当化しようとして、『では、わたしの隣人とは誰ですか』と言った。」(ルカ10:29) 愛さねばならない隣人とは誰のことでしょう。愛する必要のない相手もいるはずです。そう問いかける聖書の研究者に、イエス様は譬えを話されます。『ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡した。……さて、あなたはこの三人の中で、誰が追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。』律法の専門家は言った。『その人を助けた人です。』そこで、イエスは言われた。『行って、あなたも同じようにしなさい。』(ルカ10:30-37)』

「わたしの隣人とは誰か」という問いかけに、イエス様はお答えになりません。愛すべき隣人を探する必要がないからです。愛さねばならない隣人(レーア)は、自分以外のすべての人だからです。愛する必要のない相手など一人もいないからです。むしろ「誰が隣人になったか」と問われます。エルサレムからエリコに下っていく途中で追いはぎ襲われた人、助けを必要としているユダヤ人。彼の隣人となったのは、ユダヤの聖職者たちではなく、ユダヤ人から嫌われていたサマリア人でした。サマリア人の立場からすれば、宿敵とも言えるユダヤ人を助けたことになりま。敵を愛し、迫害する者を助けたサマリア人こそ、隣人を愛した人である。助けを必要としている人の

ために、自分は隣人となっているか。たとえ相手が敵であっても、自分は隣人となることができるか。これこそが問題である。イエス様は、律法の専門家に(聖書の研究者に)そう教え諭されたのです。今ここにいる私たち一人ひとりにも、問いかけておられるのです。

そして、イエス様ご自身は、敵を愛し、迫害する者を助ける道を歩み抜かれ、隣人を愛し尽くす生涯をまっとうされたのです。「二人の犯罪人が、イエスと一緒に死刑にされるために、引かれて行った。『されこうべ』と呼ばれている所に来ると、そこで人々はイエスを十字架につけた。犯罪人も、一人は右に、一人は左に、十字架につけた。そのとき、イエスは言われた。『父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。』(ルカ23:32-34)「犯罪人の一人がイエスをののしった。『お前はメシア(キリスト)ではないか。自分自身と我々を救ってみろ。』すると、もう一人の方がたしなめた。『お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。』そして、『イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください』と言った。するとイエスは、『はっきり言うておくが、あなたは今日、わたしと一緒に楽園にいる』と言われた。」(ルカ23:39-43)

今ここにいる私は、まさにイエスの敵でした。罪なき神の子を罪ありとし、キリストを十字架につけたのは、罪深い私だったのです。しかし主は、敵である私が赦されるよう、執り成しの祈りをささげてくださいました。天国での救いを乞う私に、永遠の命を約束してくださいました。罪人の私のために隣人となってくださったのは、イエスでした。主イエスの隣人愛こそ、敵を愛する神の愛そのものでした。私はその愛をいただきました。だから私は主を愛します。主が愛されたすべての人を愛します。それが私の感謝の証しなのです。

(二宮 創)

[今週の暗唱聖句] ルカによる福音書 7章47節

この人が多くの罪を赦されたことは、わたし(イエス)に示した愛の大きさと分かる。

赦されることの少ない者は、愛することも少ない。

〈ねらい〉

敵味方、好き嫌いに関係なく、すべての人を愛することを学びましょう。

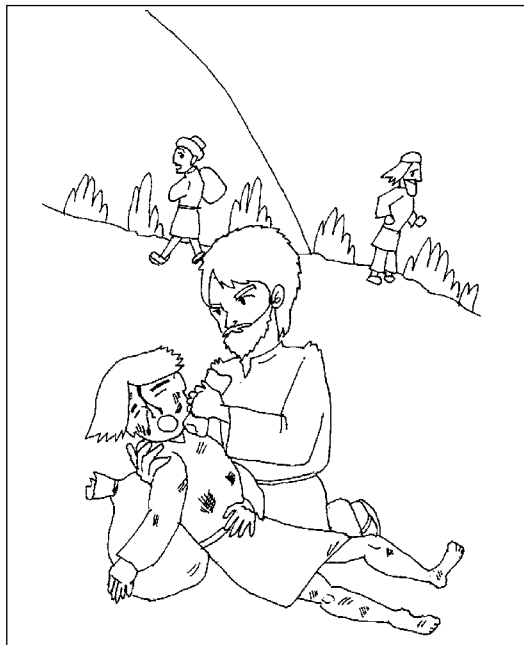
〈お話〉

みなさんは、道端に人が怪我をして倒れていたらどうしますか。かわいそうと思うでしょ。そんな時はすぐにお父さんかお母さんか、または近所のおばちゃんに知らせてあげましょうね。人を助けることはとてもよいことです。

聖書にはこう書いてあります。「あなたの隣人を愛しなさい。」愛するとは、人をお世話したり、慰めてあげたり、助けてあげたりすることです。

イエスさまはその聖書の教えをそのとおり実行しなさい、と言われてました。でもそれを聞いた偉い学者がこう言いました。「私の隣人とはいったい誰でしょう？」

みなさんにとって隣人とは誰ですか。お父さんやお母さんや兄弟姉妹かな？お友達かな？では嫌いな友達や幼稚園の先生はどうかな？ その人たちは隣人ですか。イエスさまは言われます。「あなたのまわりにいる全ての人々が隣人ですよ。だから困った人がいたら誰でも助けてあげなさい。」みなさんもイエスさまのご命令をよくきいてそれを行うようになりましょう。



〈ゲーム〉 へびすごろく

へびのコマは、パットボールのふたに、へびの絵を書いて貼る。へびの進む方向は右の通り

右 上下左

ルール① 各人はサイコロを振って出た目だけ前に進む

ルール② はやくゴールした人が勝ち

ルール③ へび役の人が振りだした目に従って、へびコマを動かす。へびが止まったマスにいた人がスタートにもどる。自分からへびマスを止まった場合はセーフ。

ゴールは色違いのパットボールのふた

コ		ー		ル	
ス	タ	ー	ト	ス	ター

〈ねらい〉

神の大いなる愛によって赦され、神の子どもとされた者は、尽きることのない喜びと感謝に満たされることを実感するであろう。

イエス様が十字架においてあらわしてくださった無償の愛を受けている者にふさわしく、イエス様に倣う者とされるように願いつつ語る。

〈展開例〉

○エリコの町へ行こうとしていた人が、悪い人に死ぬほどたたかれ、服も全部取られましたね。かわいそうに、どんなに痛かったでしょう。どんなに悲しかったでしょうね。

悪い人が逃げた後、倒れていたその人を助けたのは誰ですか？ (33～35節)

旅の途中のサマリヤ人ですね。

本当は、この頃、ユダヤ人とサマリヤ人は仲が悪かったですから、見て見ぬふりをして通り過ぎてもおかしくありません。

それなのに、そのサマリヤ人は、死にそうなユダヤ人を見て、かわいそうに思って、大切大切に世話をして助けてあげましたね。

○皆さんは、もし、仲の悪いお友達がいて、悪口を言われたり、いじわるされていたとして、そのお友達が困ったり、悲しんでいるのを知った時、どうしますか？

なかなか、やさしくしたり、すぐに助けてあげるのは、難しいのではないのでしょうか。

それとは反対に、仲良しで、いつも自分によくしてくれているお友達だったらどうかな？

正直に考えてみると、私たちは、自分の好きな人やよくしてくれる人には、やさしく親切

にできますが、そうでない人には知らんぷりしたり、やさしくしてあげないかもしれませんね。

○さて、イエス様は、どうだったのでしょうか？

神様から離れて、神様のお嫌いになる悪いことを考えたり、言ったり、したりして神様を悲しませている私たち (罪人) に対して、イエス様は、知らんぷりをなさいましたか？

ご自分は罪のないお方でしたが、罪を持ったまま苦しんでいる私たちをかわいそうに思い、大切に大切に (愛) してくださり、ご自分が身がわりとなって十字架で死んで、罪を赦してもらうことができるようにしてくださいました。

イエス様はご自分の命とひきかえにするほど私たちに愛してくださいました。

こんなにイエス様に愛されている私たちは、イエス様を見ならって、自分以外のどんな人をも大切にできるようにさせてくださいといつも祈りましょう。

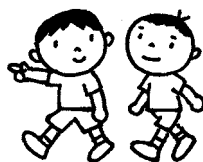
〈お祈り〉

私たちに愛してくださる神様。

律法の専門家がイエス様に意地悪な質問をした時、イエス様はやさしいサマリヤ人のお話をなさり、相手がどんな人であっても愛して大切にすることが大事だということを教え「行って、あなたも同じようにしなさい。」とおっしゃいました。

イエス様が、私たちに愛して、大切にしてくださいますから、ありがとうございます。

どうぞ、私たちもイエス様のおっしゃることをよくきいて、イエス様に見ならうことができるようにしてください。



〈ねらい〉

私たちの隣人とは誰なのか。隣人を愛することを頭では分かっているでもそれを実行することの難しさを認識する。

〈展開例〉

律法の専門家（律法学者）が、イエス様を試そうとして、「永遠の命を得るにはどうしたらいいのでしょうか」と聞きました。それに対して、イエス様は、「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい」と言われました。

イエス様に質問をした人は、そのことは実際に行っていると、自信をもっていました。それに対して、イエス様は「あなたの隣人理解は間違っている」と指摘されました。

善いサマリア人のたとえば、イエス様の「実行しなさい」という言葉から始まっています。

エルサレムからエリコに下って行く途中で追いはぎに襲われた人はおそらくユダヤ人です。（教案誌24号53ページを参照）このユダヤ人の横を三人の人が通りすぎました。

祭司 → 人々のために人々に代わって神様に礼拝と供え物をささげ、祭儀を司る人。
レビ人 → 祭司の下位にあり、神殿での奉仕や民の教育に当たっていました。

サマリア人 →

ユダヤ教に対抗して特別な教派を形成していたサマリア地方の人々を指しています。彼らは、自分たちの宗教とユダヤ教とを混ぜ合わせたものを信じていたため、ユダヤ人はサマリア人を正統信仰から離れた者とみなし、軽蔑し、

交わりを絶っていました。

この三人の中で誰が、半殺しの目に遭い、傷ついたユダヤ人の隣人になったでしょうか。ユダヤ人に日頃から軽蔑されていたサマリア人ですが、祭司やレビ人になく、彼にはありました。

それが、「その人を見て憐れに思う」という隣人愛です。好き嫌いや偏見、差別、民族を越えて、自分のことのように相手のことを思うことができる心です。

私たちは口では「はい、わかりました」と言えるかもしれませんが、しかし、イエス様が律法学者に言われたように「それを実行しなさい」と言われてできるでしょうか。大切な人や好きな人にならできるでしょう。しかし、その反対の人ならどうでしょうか。難しいですね。

サマリア人は、自分の時間とお金を傷つけたユダヤ人（隣人）にささげました。イエス様は御自分の命を私たちのためにささげてくださいました。私たちは罪人で神様の怒りを受けて滅ぼされてもしかたのない者なのに、私たちの身代わりとなり、十字架に架かって死んでくださったのです。イエス様の方から私たちの「隣人」となってくださったのです。

「いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内です。」

（ヨハネの手紙一 4章12節）

〈お祈り〉

私たちの罪のため身代わりとなり、命を捨てて私たちを救ってくださったイエス様の大きな愛に感謝します。イエス様が私たちを愛してくださったように、周りの人を愛することができるようにしてください。



「隣人を自分のように愛する」とはどういうことか？ 善きサマリア人を見ればよくわかる。

- それはまず一つに、自分を軽蔑してくるような敵さえも愛する、赦しの愛。皆さんにも、できればもう一生会いたくないという人が一人くらいはいると思うが、でもどれだけの因縁があろうが、もしその人が今日の前で苦しんでいるなら手を差し出す。
- 何の得にもならない損得勘定のない愛。無償の愛。人間というのは、みんな自分がかわいい。しかしこのサマリア人は、この山賊通りで自らの危険をかえりみずにロバから降りて、身銭を切って助けようとした。誰も見ていないのに。こんな善行をしたからと、この人の株が上がるわけではない。ましてやこのユダヤ人に何の思も義理もない。下手をすれば恩を仇で返されるかもしれない。このサマリア人もそういうことを色々考えたのかもしれない。でも彼は傷ついたユダヤ人を助けることを選択した。

〈みんなで考えましょう。このたとえ話の中で、自分はどの人にあてはまるだろうか？ と。

子どもたちは答えるのを渋るかもしれない。でも彼らが考えて何かを言い出すまでじっと待ってあげてほしい〉

私は善きサマリア人だと言う人がいたら、謙遜を促す前に、たくさんほめてあげてほしいと思います。

私は山賊だとか、宿屋の主人だという面白い子ども、たまにいます。どうしてそう思うかと理由を聞いてみて、ウケ狙いなら「なんでやねん！」と突っ込んであげてください。もちろん、まじめな答えなら対応してください。

私は祭司・レビ人だという人が多いでしょうか。特に、幼いころから教会学校に通っている契

約の子は、それが模範解答ではないかと思っているふしがあります。

でも、私たちにびったりなのは、襲われた旅人の姿ではないでしょうか。血にまみれて、死を待つよりない、この惨めな旅人こそ、私たちの真実の姿と言える。永遠の命ははるか遠く、滅びを待つよりない、そういう罪人の悲惨の姿。

そんな孤独で惨めな私たちの姿を、決して見捨てることができずに、はらわたを震わすようにして同情して、わたしの隣人になってくださる方。それがイエス・キリストです。このイエス様が言われるのです。「行って、同じようにしなさい」それはつまり、イエスにしてもらったのと同じようにしなさいということ。わたしがあなたにしたように、あなたも誰かの隣人になりなさいと、送り出されるのです。

そういう憐れみを受けたことのある人にしか、人を憐れに思うことはできません。愛された人にしか、愛することはできません。

〈あなたは誰かから、憐れみを受けたことはありますか？ 愛されたことはありますか？

では、私を愛してくれたその人は、誰から愛されたのでしょうか？ 考えてみましょう〉

私には、本当に自分を愛してくださった恩師がいます。彼は言いました。「私がしてもらったことを、してあげたいと思うだけだ。あなたも同じように、誰かに関わってあげてください。」だから私も誰かの隣人になりたいと願うようになりました。そういう風にして、愛することのできる者が生まれるのです。誰かの隣人になろうとする者が生まれるのです。

その一番はじめには誰がおられたのかと言えば、イエス・キリストがおられたのです。



テキスト ヨハネによる福音書 5章39節

今日の箇所は、イエス様ご自身が、聖書はキリストについて証しをするものだと言われた箇所である。時代は今から2000年ほど前、イエス様が地上で福音宣教をされた時であり、場所はイスラエルのエルサレムである。従って新約聖書はまだできていないから、この箇所の「聖書」は、第一義的には今日という「旧約聖書」を指す。

イエス様は、5章のはじめで、38年間病気に苦しんでいた人をいやされる。いやした日が安息日であったことを周囲から咎められると、イエス様は「わたしの父は今もお働いておられる。だから、わたしも働くのだ」と言って、神様をご自分の父と呼び、ご自身を神と等しい者とされた。これがさらに反発を呼ぶことになった。(5:17-18)

それに対して、イエス様は自分が何者か証しするものを31節以下で挙げていられる。その際、立証には二人または三人の証言が必要という律法の規定(申19:15)に沿って、三つのことが挙げられた。一つ目は洗礼者ヨハネであった。(5:33)ヨハネは「光について証しをするため」に来了。(1:7)次いで「ヨハネの証しに勝る証し」として、イエス様の成し遂げる業そのものがある。(5:36)この業が、父なる神様によってイエス様が遣わされたことを証しする。

そして最後に、父なる神様が証言者となられる。この父なる神様による証言、という脈絡から、父なる神様による言葉が記された「聖書はわたし(イエス様)について証しするものだ」ということも導き出される。

ユダヤ人たちは、父なる神が人に永遠の命を与

えることについては受け入れ、神様が与えた旧約聖書を熱心に研究した。しかし、旧約聖書のうち救い主にまつわる預言・約束の部分について、イエス様にその成就を見ようとしなかった。そのことは結局「あなたたちは、自分の内に父のお言葉をとどめていない」(5:38)と評価されても致し方のないことであった。

聖書がキリスト証言の書であると、誰もが認められるわけではない。とりわけ聖書を受け取る側の人間が神のみ前にひざまずきつつ読むのでなければ、聖書の語る「人は神と等しくない」ということを持ち出して、キリストを認めないということすら起ってしまう。人間が自分なりの秤をもって神の言葉をはかるのではなく、神のみ前に静まりつつ聖霊の啓明をいただきながら神の言葉、聖書に聴き、受け入れる者でありたい。そのとき、聖書はキリストについて証しするものである、ということがわかる。

最後に、現在は旧約聖書だけでなく新約聖書も与えられている。新約聖書はイエス・キリストの業について証言し、ヨハネ1章19~34節には洗礼者ヨハネによるキリスト証言も具体的に記されている。従って、現代では、旧新約聖書全体から、キリストについて十分な証しを得ることができる。

※参考文献：

『実用聖書注解』(いのちのことば社)「ヨハネによる福音書」(担当：山下正雄)

(吉田 崇)



子どもカテキズム 問5

子どもカテキズム

問5 私たちがそれらを知るために神さまが与えてくださったものは何ですか。

答 聖書、神の御言葉です。

〈なぜ聖書が必要か〉

問1から4を受けて、この問答が語られます。「それらを」とは、「何のために生きるのか」、「すべきことは何か」、「神が望んでおられることは何か」、それらを何から知ることができるのか、何から教えられるのかということです。すなわち、それらを「聖書、神の御言葉」から教えられると答えます。

ここには、第一に、「聖書、神の御言葉」の必要性が示されています。神は、自由な意志を持つ人格的な存在として人間をお造りくださいました。しかし、自由な意志を持つとは、何をすることも勝手であるということではありません。神との交わりの内に生き、自らの思いを神の御心に重ねることが求められました。しかし、最初の人であるアダムとエバは、自由な意志をもって神の御心に背き、罪を犯しました。「自由」とはたいへん奥が深い事柄です。金魚が水槽の中を泳いでいます。狭い水槽よりも広い世界のほうが良からうと空中に出すならば、金魚は死んでしまいます。自動車で、道路ばかりを走っているのはつまらないと言って道路の外を走ろうとするならば、事故の危険を冒すこととなります。金魚は水の中を泳ぐときに自由なのであり、自動車は道路上を走るときに自由なのです。そのように、私たち人間も神に造られた存在として造り主なる神の御心に従うところに真実の「自由」があります。ですから、神の御心を知ることが必要なのです。

〈神の御言葉としての聖書〉

神の御心は、聖書を通して私たちに教えられています。神は、自然界を通して語っておられますが、私たちの目は覆われており、そこから正しく神の御心を知ることができません。そのため、私たちが神の御心を求め、神の御心を正し

く知ることができるように、神御自身が聖書をお与えくださいました。「あなたの御言葉は、わたしの道の光、わたしの歩みを照らす灯」（詩編119:105）。私たちの人生が神を礼拝し、神の栄光をあらわし、神を喜ぶことであるための、ただ一つの道しるべが聖書です。

〈聖書の権威、信頼性〉

聖書という書物が信頼できるのは、それが神の御言葉であるからです。ウ小教理はこのところで、「旧新約聖書」と語っています。これは、そのほかのところにも神の御言葉があるという考えを斥ける言葉です。旧約統編（外典）や教会の言い伝え、人間的な知恵は、大切にされるべきではありませんが、そこに神の御言葉があるわけではありません。「旧新約聖書」に神の御言葉があるのであり、聖書66巻が神の御言葉です。この66巻を正典と言います。

〈聖霊の働きとキリスト証言〉

神は、私たちに聖書を与えるために、聖霊に満たされた預言者と使徒たちをお用いになりました。聖書は、預言者と使徒たちが聖霊に導かれて書き記しました。ですから、人間の言葉で記されているのですが、誤りや罪から守られました。また、神の御言葉としての統一性があります。そして、この言葉は、「御父と御子イエス・キリストとの交わり」を持つようになるために書き記されました（ヨハネの手紙一1:3）。今も、聖霊に導かれて聖書を読むときに、神が私たちに語りかけてくださり、キリストを証ししてくださいます。それは、とりわけ教会の礼拝においてです。礼拝において御言葉を聴くことによって、神は今も私たちに語りかけてくださり、主イエス・キリストと出会わせてくださるのです。（望月 信）※第1号（2001年6月10日）より再掲載。

テキスト ヨハネによる福音書 5章39節
子どもカテキズム 問5

〔単元のねらい〕

聖書は、その「本質」において「神の言葉」。その「権威」において「正典」。その「内容」において「救いの歴史」。最後に、その「機能」において「キリスト証言」です。読者である教会を、救い主キリスト・イエスへと導き、神の人として養い育て、善い業を行わせるためのものです。教会の改革者が改革の規範として、「聖書のみ」と標榜して戦ったことを思い起こします。あわせて、「キリストのみ」と標榜した相互関係は、決定的に大切です。ですから私たちは、律法学者のように、聖書を的外れに読んでしまう過ちと常に戦い、聖書を正しく解釈すること、つまり「福音的に読む」研鑽を重ねることが大切です。これこそ、教理教育の目標であり、毎主日の「礼拝」説教においてこそ養われてまいります。聖書とは、神の民を呼び集め、イエス・キリストによる救い(永遠の命)を与え、神礼拝を成り立たせる書なのです。

聖書、イエスさま、そして永遠のいのち

世界中の讚美歌、とくに子どもたちのための讚美歌の中で、一番、有名で、一番、歌われている讚美歌は、どんな歌でしょうか。先生は、きっとこの曲だと思うのですが、どうでしょうか。

「主、我を愛す、主は強ければ。」これは、先生たちは、すらすら歌えると思うのです。『讚美歌21』では、こうです。

「愛の主イエスは 小さいものを
いつも愛して 守るかたです。

聖書は言う、イエスさまは

愛されます、このわたしを。」(484番)

繰り返しの部分が特に大切です。「聖書は言う、イエスさまは、愛されます、このわたしを！」もともとは、英語の歌です。日本語に訳すと、言葉数が多くなってしまって、歌詞にするのが難しいのです。でも、中高生は、ぜひ、英語の歌詞を読んでみてください。「イエスさまは、わたしを愛しておられます。わたしはそのことを知っています。なぜって、聖書がそう言っているからです。」

先生は、今日のお話の準備をしながら、結局、皆さんに、心の底から、この讚美歌を歌ってもらえたら、それで最高に幸せです。「イエスさまは、わたしを愛しておられます。わたしはそのことを知っています。イエスさまにつながっているほく

たち私たちは弱くても、イエスさまは強い。なぜって、聖書がそう言っているからです。」

さて、ある安息日のことです。イエスさまは、38年間も病気で苦しんでいた人をいやされました。それに対して、多くのユダヤ人が、この人をいじめ、いやしたイエスさまを迫害し始めました。そこで、イエスさまは、このようなお話をされました。「あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが、聖書はわたしについて証をするものだ。」「あなたたち」というのは、聖書によって神さまを信じ、礼拝をしているユダヤ人のことです。ところが、その人たちが、イエスさまのことを信じないで、かえって迫害するのです。

「論語読みの論語知らず」ということわざを聞いたことがありますか。確かにユダヤ人は、聖書を熱心に読んでいます。しかも、ただパーっと読むだけではありません。時間をかけて読んでいます。ユダヤの律法学者さんたちは、辞書を開いたり、注解書を開いたり、聖書の研究をしている人たちの意見を聞いたり、それこそ一文字もおろそかにしないで調べ上げていました。そして、さす

が、ユダヤ人。さすが律法学者です。彼らは、聖書のなかに、永遠のいのちがあると考えているのです。そして、それは、まったく正しいのです。そして、ユダヤ人は、永遠のいのちを求めているのです。

ところが、イエスさまは、そのような彼らのことを、聖書の正しい理解をしているとは、まったく認められません。こうおっしゃいます。「あなたがたは、的外れな読み方をしているのだ。あなたがたは、聖書のことが、まったくわかっていないのだ」とおっしゃるのです。どうして、そんなことを宣言なさるのでしょうか。なぜなら、聖書は、このお方、彼らの目の前にいたイエスさまのことを、証しする書物だからです。証しするというのは、指さすということです。きっと、みなさんは、「ねえねえ、これを見て、あれを見て」というとき、おそらく、声だけではなく、指さして示すでしょう。聖書は、イエスさまのこともっとも強く、はるかに真剣に指さしている書物なのです。

イエスさまがこのことをお話されていたときには、まだ新約聖書はありません。実は、旧約聖書には、イエスさまのお名前が記されていません。だったら、ユダヤの人たちが分からないのも、しかたがないのでしょうか。いいえ、本当に旧約聖書を読んでいたら、そして、イエスさまを見つめていたら、わかるはずなのです。分からないのは、まことの神さまへの愛がないからなのだ、イエスさまはお叱りになりました。

イエスさまを愛する人なら、聖書が分かってきます。そのために、どうすれば、よいのでしょうか。それは、今、ぼくたち私たちがしていることが、もっとも大切です。つまり、みんなで神さまを礼

拝することです。日曜日を主の日として、教会に集まり、聖書のお話、説教を聴くことです。神さまは、聖書を通して、ぼくたち私たちに語りかけておられるからです。そうしていると、だんだん、分かってきます。イエスさまがぼくたち私たちにどれほど愛しておられるのが分かります。つまり、神さまが、どれほど深い愛をもって、ぼくたち私たちを愛しておられるのが分かります。イエスさまを十字架にかけてまでも、ぼくたち私たちをお救いくださる天のお父さまの親心、イエスさまのはかりしれないほどの愛の御心が分かります。そして、イエスさまのことが好きになります。イエスさまのことを大切に思います。それを愛と呼びます。イエスさまを愛する人は、既に、神さまの子どもとされているので、神さまに喜ばれることを喜びます。そして、聖書にこそ、どうしたらもっと神さまに喜ばれる神さまの子どもになれるのが書いてあるのです。そして、聖書をそのように読む人には、ただ分かるだけではなく、実際に、神さまに喜ばれる行いを選びとって、行うことができる、その力も与えられるのです。聖書を通して、聖霊なる神さまの力が働いてくださるからです。

ですから、ぼくたち私たちににとって、聖書こそ、もっとも大切な本です。人間にとって最も大切なすべてのことは、聖書の中に記されています。この聖書を通して、ぼくたち私たちはイエスさまを知り、信じることができ、神さまの子どもとされ、神さまの子どもとして育てられて行きます。聖書があれば、十分なのです。

讚美歌を歌いたいと思います。「聖書は言う。イエスさまは、愛されます。このわたしを。」素直に、この聖書の証しを信じましょう。

(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] テモテへの手紙二 3章15節後半

この書物は、キリスト・イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、
あなたに与えることができます。

〈ねらい〉

聖書は私たちの救いのために書かれた神さまの言葉であることを学びましょう。

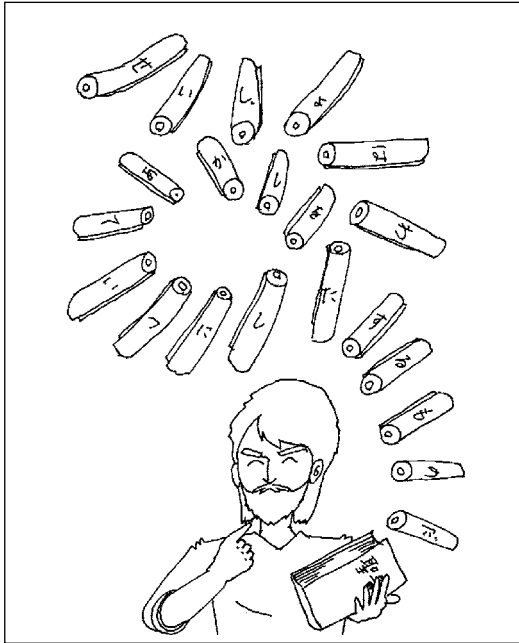
〈お話〉

聖書はいろいろなお話や、戒め、預言、詩などが集まってできた本なので、こんなに厚いです。中は字ばかりでちょっと面白くないですね。

もし中が絵ばかりだったらどうでしょう。たとえばイエスさまが十字架にかけられている姿が書いてあるとしましょう。これだけではなにがなんだかわかりませんね。イエスさまはわたしたちの身代わりに十字架上で死なれましたと教えてもらってはじめて、イエスさまの十字架の意味がわ

かります。

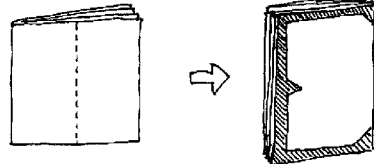
みなさんは漫画を読みますか。漫画にも言葉は必要ですね。聖書がことばでぎっしりなのは、わたしたちの救いに必要なことを、ていねいに、時間をかけて、いろいろなお話を通してわたしたちに教えるためです。いろいろな人が書いた本がひとつになったものですが、すべて神さまがその人々の心に働いて、救いに必要なことを書いてくださったのです。だから聖書は神の言葉というのですよ。そして聖書の中で一番大切なことはイエス・キリストについて書いてあるということです。だからイエスさまは「聖書はわたしについて書いてあるのですよ」と言われたのです。



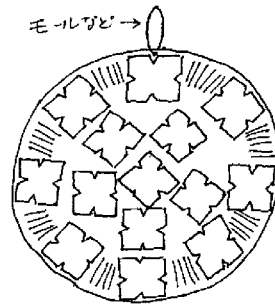
〈花の日工作〉 紙皿アジサイ

1. 折り紙(小)を4つに折りたたみます。

2. さらに2つに折りたたみます。



モールびと→



3. 斜線部分を切りとると花びらが4つできる。

4. 紙皿に花びらのりで貼って出来上がり。

〈ねらい〉

子どもたちが少しでも聖書に親しみを感じることができるよう、しかも、最も大切な本であることがわかるように具体的に語る。

〈展開例〉

○イエス様がこの世におられた頃、熱心に聖書を読み、研究していたユダヤ人たちがいましたが、その人たちは、イエス様のことが大嫌いだったことを知っていますか？ なんだか不思議ですよ？

聖書を信じて、よく調べていれば、イエス様が自分たちのことをどんなに大切に思っていてくださるかがわかり、きっとイエス様のことが大好きになるはずなのに……？

○その頃の聖書は旧約聖書だけでしたが、ユダヤ人たちは、よく調べて、天のお父様の神様が人間に「永遠の命」を与えてくださるといふことについては信じて、与えてほしいと願っていました。

しかし「永遠の命」を私たちに与えてくださるために、神のみ子イエス様がこの世に来てくださったということがわかりませんでした（信じない）。イエス様は、「私を信じないのは、お父様の神様の言葉を信じていないからです。（愛していない）」（38節）と厳しくおっしゃいました。

○どんなに一生懸命に聖書を調べても、一番大切なことがわからなければ、何にもなりませんね。自分の頭の中だけで、考えていただけでは聖書に書いていることを正しく知ることはできません。

おやさしい天のお父様のこと、すばらしいイエス様のこと、私たちと一緒にいて守ってくださる聖霊さまのことも知る事ができないのです。

○では、どうしたら聖書から、とても大切なことを教えてもらうことができるのでしょうか？

聖書は、神様が私たちにくださった大事な大事なお手紙です。それは、神様のお言葉です。聖書（旧新約）だけが神様のお言葉です。

皆さんも先生や、おうちの人（父や母）の大切な話を聴く時は、どんなお話かな？ と心からわかりたいと思いつつ熱心に聴きますね。決して、おふざけしたり、他のことを考えたりしませんね。先生やおうちの人のお話でさえ、このように聴こうとするのですから、神様のお言葉（お話）はもっともっとわかるように聴きたいと思いませんか？

そうです。まず、聖書を読む時、礼拝で説教を聴く時、お祈りすることが大切です。

心を静めて、まじめに「神様。神様のお言葉から、神様のことをいっぱい教えてください。そして私たちが神様のお心を知って喜んでいくことができるようにしてください。」と願いながら、お言葉を聴きましょう。必ず、聖書と共に助けてくださる聖霊様によって、神様がどんなに私たちを愛してくださっているかがわかり、イエス様によってのみ救われ（永遠の命が与えられ）て、神様の子どもとされ、大切に育てられるかがよくわかります。

このすばらしいお約束は、聖書でしか知ることはできません。聖書は私たちにとって、世界一大切な本です。

〈お祈り〉

私たちに、聖書をくださり、私たちがどうしたら罪から救われ、神様の子どもとされるかをはっきりと約束していただきありがとうございます。どうぞ、死ぬまでそのすばらしいお約束を信じ続けて天国で、ずっとずっと神様と一緒にいさせてもらうことを楽しみにできますように。

〈ねらい〉

ユダヤ人たちの聖書の読み方における外的れが一体どこにあったのかを確認することによって、聖書がまさにイエス・キリストのことを証しする書物であることを学びたい。

〈展開例〉

イエスさまは、エルサレムにある「ベトザタ」と呼ばれる池のそばで38年間も病気で苦しんでいた男をいやされます。イエスさまが、横たわっていたその男に「起き上がって、床を担いで歩きなさい」と言われると、その男は「すぐに」良くなり、床を担いで歩きだしました(5:1-9)。

しかし、その日は「安息日」でした。安息日というのは、ユダヤ教の戒律では一切の労働をしてはいけない日です。「床を担ぐ」ということも、一種の労働に匹敵します。ユダヤ人たちは、その男が安息日に床を担いで、労働という律法違反の罪を犯したことをとがめます。また彼らは、イエスさまが労働をしてはいけない安息日に病人をいやした、と言って迫害し始めます。

すると、イエスさまは、「わたしの父は今もなお働いておられる。だから、わたしも働くのだ」(17)と言われます。ユダヤ人たちは、神様のことを「わたしの父」と呼んだイエスさまを、今度は神を冒涇したとみなし、殺そうともくろみます。

ユダヤ人といえば、確かに旧約聖書に書かれている律法を厳格に守った人たちです。聖書の一言一句を漏らすことなく熱心に学び、そこに書かれている規則を決して破ることがないように、細かな規則を自分たちで作ってまで、それを守り抜きました。しかし、彼らの聖書の読み方には大きな誤解がありました。そのことを、イエスさまご自身が次のように指摘されます。

彼らの誤解とは、「聖書の中に永遠の命がある

と考へ」たことです。ユダヤ人たちは、聖書の文字の一言一句を入念に研究し、そこに書かれている戒律を厳密に守ってさえいれば救われる、と考へたのです。イエスさまは、彼らの聖書に向かう姿勢が本物ではなかったと指摘します。なぜなら、旧約聖書は、やがて来てくださる救い主のことを証しする福音の書です。「永遠の命」はその救い主が来てくださることを信じる信仰によって得られるのです。またその信仰が本当にあったなら、イエスさまのいやしの奇跡を見て、もっと違った反応をしていた筈です。

しかし、彼らには、その信仰がなかったので、自分たちの目の前にいるそのお方こそが、旧約聖書において預言されたメシアであることを認めることができませんでした。その理由をイエスさまは、彼らが「自分の内に父のお言葉をとどめていな」(38) かったからだ、と言われます。なぜなら、すでに目の前にいる「父がお遣わしになった者」を彼らが信じなかったからです。

彼らは熱心に聖書を研究していた人たちであるにも関わらず、結局、彼らの聖書の読み方は的外れでした。今まさに、旧約聖書の時代からずっと預言されていたメシアが来られたのです。にもかかわらず、彼らは、自分たちの目の前におられるその救い主を認めることができませんでした。ということは、これまでの彼らの聖書の読み方が間違っていたことを示しています。

〈お祈り〉

天の父なる神様。わたしたちにイエスさまのことを証しする聖書を与えてくださり、ありがとうございます。わたしたちが、聖書を学んで、イエスさまが神の御子であることをますます信じることができるようにお導きください。イエスさまのお名前によって祈ります。アーメン。



〈「聖書のみ」の教えを確認しましょう。

情報に満ちている現代世界です。様々な人間の言葉に満ちている現代世界です。しかし、私たちを救い出し、人間回復へと向かわせてくれる真理の言葉は、聖書以外にありません〉

私たちはイエス様の声を直接聞いた弟子たちとは違います。聖書がなければ、イエス様のことは分かりません。イエス様が明らかにしてくださった神の御心は、聖書を通してしか知ることはできません。逆に言えば、聖書を読めば、イエス様の教えと神様の御心はすべて分かるということです。私たちの救いのために必要なことは、すべて聖書に書かれているということです。

インターネットにあふれる情報に、惑わされる必要はありません。いろんな人がいろんなことを言っていますが、どれも人間の声です。勉強にはなっても、私たちを永遠の命に導く力はありません。

自分の心の中に、神様への疑いや問いかけの声が始まり起こってくる時もあるでしょう。そういう時は、自分の考えを絶対視せずに、まず聖書に真剣に向き合うのです。そうすれば、問いそのものが変えられます。聖書は、あなたよりも偉大な神様の言葉ですから、聖書の前で負けを認める態度で読むのです。そうすれば、必ず御心が示されます。

なにか超自然的な聖霊体験とか、語りかけとか、劇的な救いの出来事の体験がなければ、神様に愛されているかどうか分からないなどという、くだらない考えは捨てましょう。そんなものは一切な

くても、「神はそのひとり子をお与えになったほどに、あなたを愛された」(ヨハネ3:16より)と、聖書にはっきり書いてありますから、信じていていいのです。

「聖書のみ」は「キリストのみ」とセットです。イエス様を自分の救い主としてお迎えしようという愛と信仰をもって(すなわち、礼拝する心をもって)読まなければ、聖書はほんとうには分からないと、説教展開例にも十分に示されています。

ここでは、「的外れな読み方」ってどんな読み方か？を話し合うことで、正しい読み方が浮かび上がってくることを期待します。

聖書の的外れな読み方とは？

- ・今日のテキストにあるユダヤ人・律法学者のように、イエス様の教えを無視して読む。(説教展開例を参照)
- ・聖書を暗号の書として読んで、この世の終わりはいつかなど、答えを無理やり導き出す。
- ・聖書を道徳の本として読んで、人生に大切な教訓として読む。(最近、ビジネス書で、そういうのが流行ってるみたいですね。)
- ・聖書を占いの本みたいに思って、恋愛をどうするか、今日の行き先はどうするか、何を食べるか、この仕事はうまくいくか……などを神様から聞き出そうとする。
- ……などなど、ご自分の友人・知人などで、聖書を誤解している人がいましたら、その話を分かちあっていただけると嬉しいです。



テキスト ペトロの手紙二 1章16～21節

〈偽預言者と使徒ペトロ〉

当時、イエス・キリストを主とすることを否定し、キリストの十字架の贖いを拒否する偽預言者と称される人たちが出現していました(2:1)。使徒ペトロは、そうした状況の中、キリストの威光(マタイ17:1-13など)と、キリストの十字架・死・復活・昇天に至る御業の目撃者として証言しています。これは福音の真理が、キリストの歴史的な御業そのものに基づくものであり、また旧約聖書における預言の成就としてなされたものであることを語っています。つまりペトロは、自らの証言と聖書の証言が一致し、さらにそれらがキリストの御業において成し遂げられたのであることを語っています。

〈キリストの威光の目撃者〉

16節においてペトロは、「わたしたち」と語ります。キリストの威光ではペトロは、ヤコブ、ヨハネと共に目撃をした(マタイ17:1)ことを読者に確認させ、ペトロの証言が作り話ではなく、神の御業としてなされたことの正当性を主張しています(申命19:15、マタイ18:16、テモテ-5:19)。

キリストの威光の御姿は、神の御声により、神の誉れと栄光そのものであることが宣告されます(17、参照マタイ17:5など)。これは、キリストが神の御子、主そのお方であることの神の宣言であり、偽預言者たちの語ることが、何の根拠もない偽りであることを裏づけています。ペトロたちは、このキリストに対する神の宣言の目撃者として、今証しているのです。

〈成就する神の御言葉〉

続いてペトロは、神の御子、救い主イエス・キリストがこの世に来られたことにより、旧約聖書の預言が確かに成就したのであり(19)、私たちが信じるに値する、否、信じなければならない御言葉であることを訴えます。イエス・キリストの救いの御業は成し遂げられました。しかし神の国が到来する救いの御業の完成(「夜が明け、明けの明星があなたがたの心の中に昇る時」(19))は、未だ到来していません。この夜は今なお罪が支配する「暗い所」(19)ではありますが、神の御言葉である聖書はともし火として、私たちを照らし、迷うことなく、救いへと導いてくださいます。

ペトロは、キリストの威光の目撃者として、キリストの力と来臨(使徒1:11など)もまた神の栄光が現れるためになされることを、確認しているのです(16)。

〈聖書に立つ信仰〉

だからこそ、「聖書の預言は何一つ、自分勝手に解釈すべきでは」ありません(20)。救いの確かさは、人間の側で、創作したり手練り寄せたりするものではなく、神の証言によってなされるからです。そして私たちが聖書を解釈する時、聖霊の導きをお与えくださいます。これは自分で聖書を読むのではなく、神に祈りつつ神に全てを委ねて聖書を読むことにより、神の救いの御業は成し遂げられていきます。(辻 幸宏)

※第13号(2004年6月13日分)より再掲載。



子どもカテキズム 問6

子どもカテキズム

問6 聖書に書かれていることは何ですか。

答 真の神さまが、私たちのためにしてくださったことと、
私たちに求めておられることです。

〈聖書の読み方〉

この問答は、聖書に何が書かれているのかと問うことによって、聖書から何を聴くべきなのかということ語ります。聖書は66巻から構成されていますが、そこには律法や歴史書があり、詩歌のような文学書があり、また福音書は主イエス・キリストの伝記のようであり、手紙もあり、中には私信のようなものまで含まれています。聖書はバラエティーに富んでおり、読み方次第で、歴史を学ぶことができ、文学書として読むこともでき、また人生訓、人間の知恵を汲み取ることもできます。ですから、さまざまなことが書かれているのです。しかし、聖書には、このことを学ばないならば聖書を読んだことにならないという中心的なメッセージがあります。ですから、ウ小教理にある「おもに」という言葉が大切です。聖書の中から何を聴きとるのか。すなわち、聖書全体を貫くメッセージを聴かなければなりません。この問答は、聖書の読み方を教えています。

〈聖書の目的〉

聖書の正しい読み方は、聖書が書かれた目的に従って読むことです。「この書物は、キリスト・イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、あなたに与えることができます」(テモテニ3:15)。「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである」(ヨハネ20:31)。ですから、読む者がキリストを信じて、救いに入れられることが、聖書が書かれた目的です。ここに読み方があります。聖霊の導きを求め、信仰が与えられるよう祈りながら読むのです。

〈信じることと聖書と知ることの一体性〉

信じることは、知ることになります。もちろん、知ることが信仰を生み出すわけではありませんが、知ることなしに信仰はありえません。信仰は神知識を求めます。そして、信仰に必要な事柄が聖書において与えられているのです。

〈神の愛を知り、感謝の筋道を学ぶ〉

第一に、聖書から、真の神が私たちのためにしてくださったことを学びます。キリストの十字架と復活の御業を知って、生ける主イエス・キリストと出会われます。そのことによって、自らの罪と悲惨を教えられ、救いの必要性を覚え、救い主キリストを通して救いが恵みとして与えられていることを知ります。「わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました」(ローマ5:8)。この神の愛を知るのです。

そして、神の愛を知ったときに、私たちは神に感謝して、新しい生活、信仰の歩みを始めます。第二に、聖書から、神に感謝をあらわす筋道を学びます。それが、神が私たちに求めておられることです。

神が私たちにしてくださったことが私たちに求められていることに先行していることが大切です。ここにこそ、神の恵みがあります。私たちの目は覆われており、曇っています。しかし、神は私たちを愛して、忍耐強く私たちに語りかけてくださっています。その神の愛の言葉が聖書です。聖書を通して、私たちは、神の愛の御業を知ります。信仰を祈り求めながら、聖書に聴きましよう。(望月 信)

※第1号(2001年6月17日)より再掲載。

テキスト ベトロの手紙二 1章16～21節
子どもカテキズム 問6

〔単元のねらい〕

聖書は、文書です。神の言葉は、文字によって記されています。ただし文字は、それを読めない人にとっては、記号か模様でしかありません。パウロは、「文字は殺し……」（コリント二3:6）と仰いました。もとより、聖書の字義的な解釈を否定しているわけでは決してありません。そもそも文字は、「声」を記録するための手段です。人間の文字ですらそうなのですから、神の御言葉である聖書は、文字面でもとらえるのではなく、文字の背後の声、つまり、神の御声を聴き取ることが大切です。神さまは、聖書を通して、今ここで、私どもに語りかけてくださいます。聖書朗読と説教によって、教会は生き続け、働き続けてまいりました。それこそ、神が聖書を通して語られることの最高、最大の証拠です。「巧みな作り話」ではなく、神の言葉の説教にだけ、救いの力、教会を建てる力があります。

聖書によって語ってくださる神さま

皆さんは、どんな音楽が好きですか。最近、アイポッドなどで、イヤホンで聴いている人が多いようです。でも、がっちりしたスピーカーで聴くと、びっくりするくらいすばらしい音色、響きになります。先生は、聖書のことをスピーカーにたとえることがあります。それは、神さまの御声が聖書を通して響いてくるからです。

さて、ある日のこと、イエスさまが、ペトロとヤコブとヨハネの三人だけを連れて、高い山に登られたときのことで、イエスさまのお姿が、彼らの目の前で変わって、この世のものとは思えないようにキラキラと輝き始められました。そのとき、彼らの目の前に、モーセとエリヤが現れて、イエスさまとお話をしている姿を見ました。モーセという人は、エジプトからイスラエルの民を脱出させた偉大な信仰者、ヒーローです。そして、旧約聖書の律法の書を書いた人と考えられている人です。エリヤとは、モーセの次に偉大な神さまの預言者と考えられていた人です。バアルの預言者たちと戦ったお話を覚えているお友達もいるかもしれません。要するに、二人は旧約聖書の代表的な人たちなのです。その人たちとイエスさまがお話をしているということは、つまり、旧約聖書

の本当の主人公は、結局、イエスさまだということなのです。

そのとき、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」という御声が、天から聞こえたのです。

さて、ペトロは、このようなことを言っています。「天のお父さまのこのお声を聴いたとき、わたしたちは、旧約聖書の言葉は、いよいよ神さまの御言葉であること、だから、絶対に間違いがなく、確実な約束の言葉なのだという確信が強められました。」

そして、それは、ペトロだけの恵みではありません。ぼくたち私たちにもこう呼びかけています。「聖書のみ言葉は、聖霊なる神さまに導かれて、神さまからの御言葉が語られています。だから、確かな救いの言葉なのです。だから、聖書の言葉をきちんと聴いて、心にいつも留めてください。」「イエスさまが天に戻られた今は、いろいろと苦しいこと、大変なことがあるけれども、イエスさまが再び来られるそのときまでは、わたしたちに与えられた神さまの御言葉の聖書が、わたしたちの光となります。ともし火となって私たちの行く道を照らしてくれます。だから、大丈夫です。」

今日は、聖書を皆さんがどのように読んだらよいか、先生はどのように聖書を読んでいるかをお話したいと思います。

聖書を読むと、どうなるでしょうか。先生は、とても嬉しくなります。これが大切です。心に喜びが湧いてきます。聖書を読んでいると神さまの御声が聴こえて来るからです。

今朝の聖書に、こうありました。「これはわたしの愛する子」この御声は、天のお父さまが、御子のイエスさまに語られた宣言です。この御言葉を読んでいると、先生は、不思議ですが、これは、ただ、イエスさまにだけ、語られた言葉だとは思えなくなるのです。

イエスさまを信じて、イエスさまによって罪を赦していただいた先生は今、確実に、神さまの子どもです。ぼくたち私たちも、イエスさまを信じているなら誰でも、神さまの子どもとして受け入れてもらいました。それは、イエスさまの十字架のおかげです。神さまの独り子のイエスさまを信じる時、その人は、イエスさまと結ばれて、イエスさまの弟、妹とされるからです。こうして、ぼくたち私たちは、イエスさまによって神さまの子ども、そして、ここにいる大人の人も子どもたちも、ぼくたち私たちは、みんな神さまの家族とされたのです。だから、先生には、聖書のどこを聞いて読んでも、最後には、「あなたはわたしの愛する子ども！」という声を聴くことができるのです。

もちろん、聖書を読んで、神さまのみ心を行えていない自分をみると、悲しくなります。自分が、いやになってしまうことすらあります。でも、そんなときは、すぐに、こう思います。「それで終わってしまっただけはいけない、神さまは、どんなに深くわたしを愛してくださるのか、それが、じーんと分かってくるまでお祈りしよう。」そうやって、聖書を読み続けて来ました。そうすると、

どンドン、聖書が分かってくるのです。「聖書は、本当に神さまからの愛の手紙だ。もっと神さまのことを愛したい。もっと、神さまに喜ばれるような人になりたい。」そのような思いが湧きあがってくるのです。

声が聴こえるというのは、誤解を与えるような言い方かもしれません。ですから正直に、はっきりと言いますと、先生は、神さまから、「伸郎よ、あなたはこれこれ、こうしなさい」と、この耳に聞こえるように語っていただいたことは、残念ながら一度もありません。でも、聖書を通してなら、心の耳で何度も聴いています。「わたしはあなたを愛しているよ。あなたは、わたしに従いなさい。」どんなに嬉しいことでしょうか！

そのような聖書の言葉、聖書を通して神さまの御声を聞くために、一番よい方法があります。それは、まさに、ぼくたち私たちがしていることです。そう、説教を聴くことです。先生の「声」は、聞こえていますか。それをしっかりと「聴く」こと、それが信じることそのもの、それが礼拝することそのものなのです。実は、聖書の説教を聴くことは、聖書を読む、最高の最上の正しい読み方なのです。

説教する先生は、自分勝手な、ひとりよがりの聖書の読み方ではなく、2000年間の教会の信仰の告白に基づいて、聖書から聴こえる御声を正しく聴きとって、神さまの言葉を語ります。聖霊なる神さまが導いてくださるからです。

神さまは、説教を聴いているぼくたち私たちに、お家で、ひとり聖書を読むときにも同じように語ってくださいます。「いのちのパン」を読んでお祈りするときにも、元気な信仰を与えてくださいます。これからも、礼拝の説教をしっかりと聴いて、神さまを礼拝し、感謝と賛美をささげましょう。
(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] ペトロの手紙二 1章21節

なぜなら、預言は、決して人間の意志に基づいて語られたのではなく、人々が聖霊に導かれて神からの言葉を語ったものだからです。

〈ねらい〉

聖書の言葉が大切に守られてきたことを学びましょう。

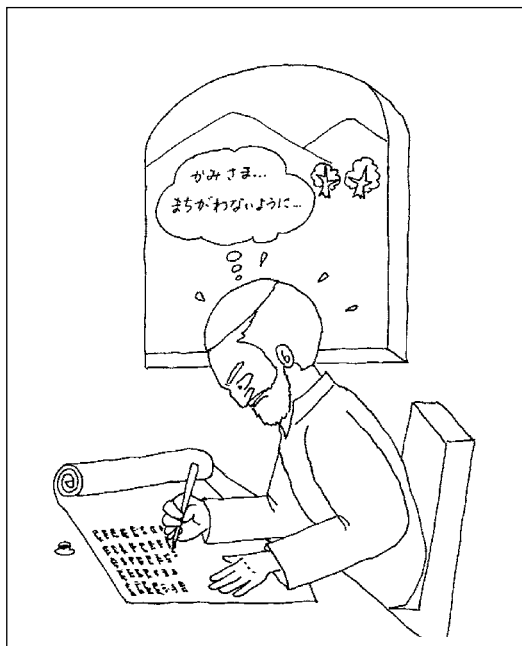
〈暗唱聖句〉

伝言ゲームって知っていますか？ 字を見ないで言葉を人に伝えるゲームです。教会では聖書の言葉を使って伝言ゲームをしますが、言葉をおぼえるのって大変です。特に大人になればなるほどおぼえる力は衰えていきます。だから聖書の言葉は紙に書いて伝えられました。もし伝言ゲームで伝えられたらどんどん違った言葉になっていったでしょう。

今は印刷機やコピー機があるので、本を簡単に何冊も作れますが、昔は大変でした。紙に手で一字一字写していたのです。聖書を写して書いた本

のことを写本といえます。

人間がやることですから、時々写し間違いがあってもおかしくありません。また悪い人が全然違う言葉にして写すこともあったかもしれません。でも聖書の写本に関して言えば、写し間違いがありませんでした。神さまのお力が働いて、写す人が間違わないようにしてくださったのです。なぜなら神さまの言葉は、人の命を救うための言葉なので、写し間違いがあってはいけないからです。聖書は命の言葉です。もしイエス・キリストは十字架から逃げてしまいましたなんて写されて、それが人々に伝わったら大変です。聖書を写す人は、一生懸命間違わないように、お祈りしながらいいに写しました。おかげで今では世界中の人が同じ聖書の言葉を読んで救われるのです。

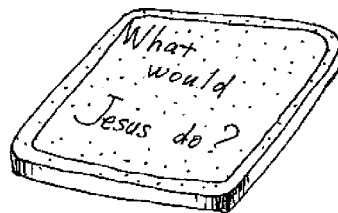
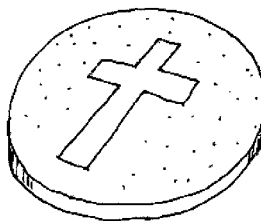


〈父の日工作〉 コルクでコースター

材料：「コースターコルク」

※100円ショップやネット販売店などで購入できます。

油性マジックや
ポスターカラーマーカー
などで絵などを
描いて下さい。



〈ねらい〉

神様が聖書を私たちに与えてくださった目的を知らせ、どのように聖書を読むべきかを語る。

聖霊さまによって信仰へ導かれた者の感謝の歩みについても自覚できるように導く。

〈展開例〉

イエス様のお弟子さんの一人、ペトロさんは、すばらしく光り輝くイエス様のお姿を見、また神様のお声で「これはわたしの愛する子……」と言われるのをはっきりと聴きました。イエス様は神様です。そればかりではありません、ペトロは、イエス様が救い主として、してくださった大切なことを全部おそばで見えていましたから、旧約聖書でお約束されていることは、そのとおりにイエス様によってなりました。と、はっきり堂々と皆に教えました。

今、聖書は、旧約と新約、合わせて66巻の大きな本です。

神様は、この聖書を私たちに、神様からの大切なお手紙としてくださったのです。

皆さんは、お手紙を書いたことがありますか？

もし、遠くに住んでいるおじいちゃん（おばあちゃん）がプレゼントを送ってきてくださったとします。お家の人から「お手紙を書いてね。」と言われたら、おじいちゃんに何を書きますか？

そうですね。一番相手の人に伝えたいことを心をこめて書きますね。そして、それを受け取った人は、お手紙を出してくれた人がお話ししてくれているのと同じように読みますね。

神様からのお手紙である聖書は、神様のおこと

ば（お声）です。神様は、聖書によって私たちに何を伝えよう（教えよう）としておられるのでしょうか？

聖書を読んでみましょう。

ニテモテ3章15節、ヨハネ福音書20章31節

このように聖書を読む人がイエス様のことを知り、信じて救われて、永遠の命をいただくことができるようにとおっしゃっています。

でも、皆さんがマンガ本や他の本を読む時と同じように聖書を読んでも、神様からのお声を正しく聴くことはできないのです。聖霊さまに助けをもらって、はじめて聖書がよくわかり、信じることができるようになります。

いつもお祈りしながら、まじめに読みましょう。

聖書（神様のお言葉）と聖霊さまによって、神様が私たちにしてくださるすばらしいこと（愛の御業）を知ったら、もう私たちはじっとしていられませんね。

うれしくて、うれしくて、「神様、ありがとうございます」と神様に喜ばれる道をすすんでいきたいと強く思いますね。

〈お祈り〉

私たちが愛してくださる神様。

私たちが救われて天のみ国で永遠に神様とごいっしょにすることができるようにと、聖書を私たちにくださって、ほんとにありがとうございます。

これからも、聖書と礼拝の説教を聖霊さまに助けていただいてしっかり聴き、神様のお心がよくわかるようにしてください。そして、神様に喜ばれる子どもとして大きくさせてください。



〈ねらい〉

聖書はどのように読むものなのでしょうか？どのような心構えで、そして何に注目して読めば良いのでしょうか？このことをしっかりと押さえることが出来ないと、聖書を間違っただけで読んでしまいます。逆にこのことを押さえると永遠の命を聖書からくみ出すことが出来ます。聖書を読む上で基礎となる事柄を今日は学びます。

〈展開例〉

本を読む上で必要なことは、書いた人が何を言いたいのか？に留意して正確に読むこと、そして集中して読むことです。聖書を読む上でもそのことが必要です。でも聖書と小説や教科書のような書物とはどう読み方が違うのでしょうか？

まず、聖書と他の書物の違いを見てみましょう。二ペトロ1章20、21節には聖書が「聖霊に導かれ」たものであり、「神からの言葉」だとあります。このように、聖書は他のどのような書物とも違うのです。

書物自体が他の書物と異なるのですから、当然、読み方も違って来るはずですが、神様の言葉なのですから、私たちが一人でいくら正確に頭で考えて理解しようとしても、あるいは多くの人が頭を寄せ合って考えても、神様に対する信頼がなければ、正しく読むことが出来ません。そして何よりも神

様に助けをいただかなければいけません。そうでないと聖書を正しく理解することは出来ません。

しかし、正しく読むと言っても聖書にはとてまたくさんのことが書かれています。その全部を理解しなければ聖書を理解したことにならないというのであれば、一生かかっても無理かも知れません。それでは読む気力が失せてしまいます。実は聖書を読む上で、大切なことがあるのです。しかもたった二つです。この二つを押さえておけば良いのです。

それは、①神様が私たちのためにしてくださったことと、②神様が私たちに求めておられること、は何かということに注意を留め続けることです。「神様は本当におられるか？」「神様は何か？」ということを見つけるために読むのでは、神様が聖書を通して私たちに教えるようにされることは分りませんし、ほとんど私たちにとって役に立ちません。大切なのは、神様は私たちにとってどのような方であって、私たちに何をなさろうとされる方であるのか？ということにいつも注目することです。

神様に従う姿勢をもって、神様に助けをいただけるようにお祈りしながら、神様と自分との関係を考えること、が必要です。そのように読むときに聖書を初めて正確に読むことが出来ますし、聖書は私たちにとって永遠の命になります。



「あなたの御言葉は、わたしの道の光／わたしの歩みを照らす灯。」
(詩編119:105)

聖書に書かれているのは「巧みな作り話(二ペトロ1:16)」ではなく、ペトロをはじめとした弟子たちが目の当たりにした「キリストの威光」の目撃証言です。「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理に満ちていた」(ヨハネ1:14)とも言われています。その「威光＝栄光」は、十字架のイエスの愛の光であり、失われた罪人を神の子として回復し、永遠の命の喜びに導く命の光、希望の光です。そういう光をパッケージして、後の世代にも届けることができるように。また、世界中の人々に届けることができるように。そういう目的をもって神様は、「聖書」を与えてくださいました。だから、聖書は、光をとじこめた本といえます。ページをひもとくごとに、とじこめられていた光があふれだして、私たちを照らしてくれるのです。まさに「暗いところに輝くともし火(二ペトロ1:19)」です。

そんなともし火も、間違った使い方をすれば、家を焼いてしまう大火事の火元になってしまいます。聖書を「自分勝手に解釈する(二ペトロ1:20)」ことは危険なのです。

聖書にふさわしい読み方をし、ふさわしく御言葉を聞き取ろうとする姿勢が大切です。そういう

読み方を教えてくれているのが、カテキズムです(カテキズム研究を参照)。ふさわしく用いるなら、この「聖書」というともし火は大きく輝き、私たちを確実に命へと導いてくれます。

〈聖書を自分勝手に解釈してしまっていた、苦い思い出はありませんか。そしてその間違いから解放された時に、福音の光は見えませんでしたか？

筆者は、中学時代は教会に無縁でしたが、中学生時代に上記の経験がある方は、分かち合ってください)

私は洗礼を受ける前、ルカ福音書23章34節に記された、敵のために赦しを願うイエス様の祈りに心打たれて、こんな人間になりたいとあこがれました。でも、その読み方は、少しだけずれていて「自分勝手な解釈」でした。

だれかが教えてくれました。「イエス様のようにになりたいと思うのは大切なことだね。でもね、『彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです』という祈りは、あなたのためにも祈られているんだよ。あなたも『彼ら』の中の一人なんだ。」そのように聞いて、とてもショックでした。

でも、そういう正しい解釈を教えていただいたおかげで、私は自分の罪を知りました。そしてその暗い闇を照らしてくださる、まことの光に気づくことができ、洗礼を受けることができました。とても感謝しています。



テキスト ヘブライ人への手紙 13章8節

今回の聖句は、語句の説明、注釈をつけずとも一読して言わんとすることが明らかなように思える。(だから暗唱聖句にも用いられるのだろう。)ただキリストが永遠に変わらない、ということがなぜ私たちに知らされる必要があるのか、という問いが出てくるであろう。それを探るために、この聖句の前後に目を向けてみよう。この前後は、13章7～16節で一つのまとまりを成している。そして、「神の言葉を語った指導者たちのことを、思い出しなさい」(13:7)、「異なった教えに迷わされてはなりません」(13:9)といった信徒への勧めの言葉が出てくる。勧めの言葉が次々と出てくる中で13章8節に唐突にキリストのことが記される、という印象をもたれるかもしれない。しかし、13章8節は、前後の勧めと内的に結びついている。「キリストは永遠に変わらない」ことを根拠として、キリストとキリストを違わした神の言葉も決して揺らぐことはない、だから教会の指導者を通して語られる神の言葉に信頼し続けるように、と勧めるのである。

ヘブライ書は全体を通して、信仰的な困難や試練に直面している者、神の恵みによる救いとは異なる教えを説く者に囲まれている人々が、信仰をぐらつかせ、離れてしまわないために書かれている。キリストを信じる者には地上において信仰の戦いが伴う。ヘブライ書においては、信者は信仰の戦いを初めの頃はよく耐えていたのであるが(10:32-34)、だんだんと信仰心がくじけ、揺らぐ者も現れた。そこへ異なる教えを教える者が現れる。彼らは、困難に見舞われ続けるのは、神様への信仰の仕方に問題があるからだ、食べ物を制限する(13:9)など、もっと旧約の儀式律法に沿っ

て努力する生活にしなければならない、と説いたようである。律法を守ろうと努力する生活は、場合によっては「あれができた、これもできた」という達成感をもたらすかもしれない。(13章9節の言葉を拝借すると「食べ物により心を強める」生き方。)しかしこうした生き方は、救いが人間の努力次第という誤った感覚を抱かせるように導き、救いはただ神の恵みによる、というキリスト教の救いの根幹を揺るがせてしまう。

従って、信仰の戦いを最期まで戦い抜くための最良の方策は、今一度「イエス・キリストは、きのうも今日も、永遠に変わることのない方」であることを思い起こすことである。信仰者が苦難を経験するとき、神様の力が落ちてしまったことを意味するのではない。神様の言葉は困難な状況に打ち負かされるようなものではない。その証しは、神の言葉を語った指導者たちの「生涯の終りをしっかり見て、その信仰に倣う」ことで見えてくる。信仰生活の途上では下降局面をたどるように見える場面もあろう。キリストは、一旦、十字架の死にまで追いやられる。しかし、生涯の終りまでみると、神様の恵みと約束の言葉に全く信頼して生きた人こそ、キリストが復活して罪と死に勝利されることで永遠に変わらないことを示されたように、最終的に信仰の戦いに勝利する。

※参考文献：

『実用聖書注解』(いのちのことば社)、「ヘブライ人への手紙」〔担当：市川康則〕

『新聖書注解・新約3』(いのちのことば社)、「ヘブライ人への手紙」〔担当：安田吉三郎〕

(吉田 崇)



子どもカテキズム 問7

子どもカテキズム

問7 私たちの神さまはどのようなお方ですか。

答 神さまは霊なるお方です。

ですから、私たちを包み込んでくださり、永遠で変わらないお方です。

〈聖書から神を知る〉

古来多くの人々が「神とは何か」、「霊とは何か」という問いに取り組んで、答えることができずに投げ出してきました。人間は有限の存在であり、人間の理性や経験に基づいて神について考えようとしても、それは無理なのです。真の神は、聖書を通して御自身をお示しくださる自己啓示の神です。私たちの神知識の源は聖書です。人間の言葉で語り尽くすことはできませんが、「神」について、「霊」について、聖書から教えられることが大切です。

〈生ける人格である神〉

この問答は、ヨハネ4:24を土台としています。また、出エジプト3:14-15を思い起こすことも大切です。

神が霊であるとは、第一に、神が人格的なお方であるということです。「人格的」とは、さまざまなことを感じ、考え、行動し、他者に働きかけ、他者との交わりを持つ主体、「人格」を持っているということです。これは本来神のご性質です。聖書を通して知ることができる神は、天地とそのすべてを造り、被造物との交わりを喜び、知恵と力、聖、義、善、真実などに満ちた生ける神です。神は、私たちを愛して私たちの罪を悲しみ、罪を憎みます。生き生きとした命にあふれており、人格であるということが、霊なるお方ということです。

〈自由なお方である神〉

神が霊であるとは、第二に、神が無限、永遠、不変のお方であるということです。これはすなわち、神の自由です。神は制限されないのです。神は、空間をも時間をも超えておられ、制限されません。ですから、目には見えません。時間で捕ら

えることもできず、神は変わらないお方です。私たち被造物は有限の存在であり、空間や時間に左右されますから、移り変わりがあります。初めがあり、終わりがあることは、被造物の特徴です。永遠から永遠の存在である神は、完全であり、変わることがありません。霊が風にたとえられますが、風は思いのままに自由に吹きます。霊である神も、御自身の御心のよしとするままに、自由に働いてくださいます（ヨハネ3:8）。御心のよしとするままに、御自身を示し、目に見えるかたちで私たちの世界に働きかけることもなさいます。私たち人間の願いに従って行動する奴隷の神ではありません。これが神の自由です。

〈霊なる神との交わりに生きる〉

神は、私たちに御自身の命の息を吹き込まれ（創世記2:7）、それ故に、私たちは「霊的」な存在、「人格」を持つ存在とされました。私たちの人格は、神から与えられたのであり、神との交わりを基盤としています。神は、御自身の人格と自由に基づいて、私たちを造り、私たちとの交わりを喜びとなさいました。変わることはないお方が、私たちを愛して、御自身の交わりに招いてくださっています。「包み込む」とは、神との交わりに入れられていることです。ですから、私たちは神を信頼し、神に委ねます。私たちの墮落後も、キリストをお与えくださり、私たちを御自身との交わりの内に招いておられます。ですから、神を礼拝し、神との交わりの内に生きることこそが、私たちの人生であり、喜びなのです。（望月 信）

※第1号（2001年6月24日）掲載分を一部訂正して再掲載。

テキスト ヘブライ人への手紙 13章8節
子どもカテキズム 問7

〔単元のねらい〕

ウェストミンスター信仰規準は、教理の体系として、神について組織的に論述します。神の「本質」を「霊」と規定した後で、神の「属性」について精緻に告白します。ただし、うっかりすると、私どもは、イエス・キリストにおいてのみ神を真実に知り、信頼することができるという根本的事実を、あやふやにしてしまう危険性があるかもしれません。そこで、イエス・キリストの不変性、真実を語るテキストが選ばれています。「子どもカテキズム」問7には、霊なる神だからこそ、「わたしたちを包みこんでください」という極めて特徴的な表現が出てきます。知的な神理解を大切にしながら、今を生きる子どもたちに、天のお父さまに抱かれている安心感、三一の神の霊の交わりの中に包み込まれている平和、そのようにして神の子とされ、神が共にいてくださる救いの恵みの力強さを大胆に証し、喜びの礼拝を共にささげましょう。

霊でいらっしやるまことの神さま

今日も、皆さんと礼拝をささげることができて本当に嬉しいです。天のお父さま、イエスさま、聖霊の神さまの恵みと平和が、今日も皆さんの上に、ぼくたち私たちと共にありますように！

赤ちゃんが、お母さんの腕の中で、ニコニコしている姿を見たことがあるでしょう。何か、こちらもホッコリしてきてしまいます。赤ちゃんは、お母さんのやさしい腕のなかで、とっても居心地が良くて、安心なのでしょう。心が満たされているのだと思います。さらに、おっぱいも飲ませてもらったなら、もうそれこそ、後は寝るだけ。心も体も、あったかくなってしまうのでしょうかね。

皆さんは、そのときのことを覚えているでしょうか。つい、この前まで、赤ちゃんだったお友達なら、覚えているでしょうか。「そんなことは、大昔のこと、おふくろなんて、ウザいな」っていうお友達もいるかもしれません。先生は、どうか？

先生も、自分が赤ちゃんのときのこと、まったく覚えていません。だからこそ、最初に言った光景を見ると、「いいなあ」と思うのかもしれません。

ぼくたち私たち人間には、やさしく抱っこされることが、どうしても必要なのです。「いや、抱っこされる必要なんかないよ」と言える人は、昔のことを忘れてしまっているだけです。今、ここで元気に生きている人は、全員、誰かにやさしく抱っこされたおかげなのです。

やさしくゆさゆさと抱っこされて、名前を呼ばれて、話しかけられて、歌を歌ってもらって……、人間は誰でも、そのようにして育てられるのです。こうして、人間は、動物とはまったく違う人間らしさを身につけて行く、育まれて行くのです。

実は、聖書の神さまこそ、ぼくたち私たちにもいつもそのようにしていてくださるお方です。赤ちゃんのときにも、天のお父さまはそうしてくださいました。何よりも、今ここで、礼拝で、そうしていたださっているのです。それだけではありません。この先もずーと、死ぬまでです。いいえ、違います。死んだ後も、ずーと神さまは、ぼくたち私たちを抱きしめ、包み込んでいてくださるのです。

さて、皆さんは、「赤ちゃんにもどりた〜い」

と思ったことがあるでしょうか。そんなことを叫ぶときの、その人の気持ちは、よく分かります。大きくなるとそれだけ自分のことは何でも自分でやらなければならないようになってきます。ときどき、大変になります。できなくなります。つらくなります。そんなとき、抱っこされている赤ちゃんを見たりすると、そんな風に思うのでしょうか。小さい頃は、お母さんやお父さんが何でもしてくれました。でも、いつまでもそうだったら、きつく叱られます。「はやくしなさい。自分でやりなさい。先のことを考えて、準備しておきなさい。」そんなお小言を、何度も聞いているかもしれません。

人間は、時間のなかで、どんどん変わって行くのです。今は、ピンと来ないかもしれませんが、お父さんもお母さんも、年を取って行くのです。いつまでもいっしょにいられるわけではありません。

実は、この地上にあるもの、永遠に変わらずにあり続けるものは、何一つもないのです。人間や動物、植物などの生き物はもちろん、海も川も山もすべてのものは変わって行く、移ろって行くのです。「無常」だと「無常の世界」なんて、むつかしい言葉を知っているお友達もいるかもしれません。とにかく、この世界は、生まれて来たかと思えば、すぐに、はかなく消えてなくなるものばかりでできているのです。

けれども、いつまでもいつまでも変わらないお方がいらっしゃいます。今日の暗唱聖句を皆で、もう一度、唱えましょう。「イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることのない方です。」なぜ、イエスさまだけは、きのうも今日も、また永遠に変わることがないのでしょうか。それは、イエスさまが、真の神さまだからです。なぜ、神さまは永遠に変わらないのでしょうか。それは、神さまが霊のお方だからです。

「霊」というと、教会に来たことがないお友達は、

「それって幽霊のこと？」と言うかもしれません。違います。聖書の言う霊とは、目に見える「物」とは、違うということです。目で見えて、手で触って確かめられる「物質」ではないのです。神さまは、霊なるお方なのです。

ぼくたち私たちのイエスさまは、天のお父さまからお生まれになられた神さまの御子でいらっしゃいます。そして2000年前に、マリアさんからお生まれになって人間になられました。そして、ぼくたち私たちの罪を償うため、身代わりに神さまからの刑罰を受けて、死んでくださり、三日目に墓から出てきてくださいました。復活されたイエスさまは、今、天に戻られました。ぼくたち私たちを、その命をかけて愛されたイエスさまは、2000年前に生きていらっしゃっただけではありません。その前も、今も、その後もずーと、永遠に生きていらっしゃるので。福音書に書かれているイエスさまは、今もまったく同じ愛で、ぼくたち私たちを愛して、いつもいっしょにいて守ってくださる方なのです。

天に戻られたイエスさまは、どうして、ぼくたち私たちと共にいてくださることがおできになるのでしょうか。イエスさまが、霊なるお方だからです。何よりも、聖霊なる神さまが、ぼくたち私たちのところに、来ておられるからです。今、ぼくたち私たちは、この霊なる神さまに包み込まれています。バリアのように悪い者から守ってくださるのです。そして、抱っこされているのです。

そんなこと、感じないなあと思うお友達は、今、この礼拝で、イエスさまを思い、聖書の御言葉を信じてください。「イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることのない方です。」だから、イエスさまは、今、あなたを優しく抱っこして、包み込んで、守って、共にい続けてくださるのです。 (相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] ヘブライ人への手紙 13章8節

イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることのない方です。

〈ねらい〉

永遠に変わるのこのないお方だからこそ私たちの救いが、間違いなく実現することを学びましょう。

〈お話〉

私たちはよく気が変わることがあります。おもちゃを貸してと言われて、「いいよ」と答えておきながら、すこし後になって、「やっぱりだめ」といじわる言っちゃうことはありませんか。

もしイエスさまが、気が変わって「十字架にかかって死ぬなんて、怖いし、痛いし、やっぱりやめた」なんて言われたら大変です。私たちの救いはなくなってしまうところでした。でもイエスさ

まは神さまですから、気が変わるということはありません。

イエスさまは、なんと天と地が造られる前から、父なる神と共におられたまことの神さまです。父なる神さまは人間を救いたいと思いました。その御心を聞いてイエスさまは「はい私が行きます。私が十字架につけられて人間の代わりに死刑になります」と言われたのです。

そのイエスさまの愛は今も変わりません。イエスさまを裏切ってしまったのに赦されたペトロは、教会にあてた手紙の中で、心をこめてこう書いたのです。

「イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わるのこのないお方です。」



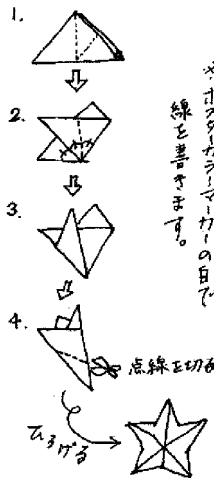
〈工作〉 星座作り

〈例〉 こと座

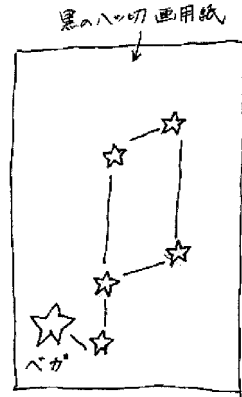
意味：天地に溢れる
勝利の讃美

「星座に見る福音」
(関榮二編 日本教会新報社)より

星の作り方は
以下のとおり



※ボンドやカラーマーカーの目印
線を書きます。



〈ねらい〉

神様の「本質」である「霊」について子どもに理解させるのは難しいように思えるが、神様が子どもに備え（残し）てくださっている「すなおな心」に聖霊なる神様がお働きくださることを信頼して語る。

三位一体の神様の交わりの中に入れられている幸いを味わうことができるように祈りつつ語る。

〈展開例〉

先週は、聖書のことを一緒に教えられましたね。

聖書はどんなご本だったか覚えている人は、お話ししてみてください。

（そうですね。いろんなことがわかりましたね。）

その中で、聖書は、神様が私たちに大切なことを教えるためにくださった神様からの大事なご本だということがわかりましたね。

神様は、どのようなお方が正しく知ることができるのも聖書からです。

しかし、どんなにかしこい人でも、一生懸命勉強して調べたり研究したりしても神様のことを全部わかる人は一人もいません。聖霊の神様に助けてもらいながら聖書を読む時によくわからせてもらえるのです。

今日の暗証聖句には、「イエス・キリストはきのうも今日も、また永遠に変わることはない方です」と書かれています。

また、ヨハネ福音書4章24節に「神は霊である。……」と書かれており、父である天の神様、子であるイエス様、聖霊の神様は「霊」であることが聖書によって、はっきり示されています。

「霊」である神様は、目に見ることも、お声を

聞くことも、お体にさわることもできないお方です。

でも、たしかに生きておられ、ずっと変わることがなく、私たち人間を特別に大切に大切に（愛して）くださり、神様に似せてお造りくださいました。

そして、特別に神様は私たちのお交わりを喜ばれるのです。

“お交わりを喜ばれる”ということは、神さまは、ずっと変わらず私たちが大切に大切に思ってください、ぎゅっと抱きしめて守ってください、私たちににとって一番よいことをしてくださろうとしておられるということです。

なんとすばらしいことでしょう。

なんと嬉しいことでしょう。

神さまにぎゅっと守られているともう大丈夫。安心ですね。

神さまに、「ありがとうございます。」と感謝して、神さまを礼拝し、神さまと一緒に生きることこそ、私たちにとっても喜びですね。

〈お祈り〉

私たちを愛してくださる神さま。

神さまは“霊”なるお方ということをお教えられありがとうございました。

「イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わるうことはない方です」と、今も、私をやさしくぎゅっと抱っこして守ってくださっていることをありがとうございます。

とても嬉しいです。安心です。



〈ねらい〉

神様の御性質を自分とのかかわりで捉える
※網羅的ではなく不変性に絞って展開する

〈展開例〉

1. 突然ですが、みんなで先生の特徴を考えてください（怖い、優しい、など考えてもらう）。
……はい、そのへんで、ストップ。
色々な特徴が出てきたけど、みんなが言ってくれたことっていうのは、先生がどんな人かの説明なんだと思います。色々な特徴が出てきましたね。それは先生のことをみんなが良く知っていてくれているっていうことだと思います。先生の特徴は、先生とお話ししたり、先生のことをよく見たり、先生と一緒に過ごしていればわかってきます。
2. じゃあ、神様という御方にはどんな特徴があるだろうね？ 先生の特徴を知ると似ているかもしれません。神様は「霊なる御方」だから、人と違って、目で見ることにはできないよね。でも、神様がどんなお方かっていうことも、神様とお付き合いをしていると色々わかってきます。神様との付き合いってというのは、どんなふうになっているかな？ お祈りをして神様にお話しを聞いていただくことがあります。聖書を聞くという仕方、神様からお話しをしていただくことがあります。そうやって、神様とお付き合いをしていると、色々神様のことがわかってきます。
3. 人にも色々な特徴があるけれど、神様ともなれば、なおさらです。世界を導いてくださる知恵や力。人とはかけ離れた特別な偉大さ。愛する独り子を人間として世に送り出してください。愛や真剣な思い。人間をなああで赦すことなく、イエス様を身代わりにしてでも、正しい仕方、人とかかわってくださる正しさ。

4. 数えたらキリがないけど、今日は中でも「神様は変わらない御方」っていうことを、聖書をおして神様に教えていただきました。世界にある物は変わってしまう物ばかり。食べ物や着る物、遊びや娯楽はそれで良いけど、自分の人生をまるごと預ける神様が変わってしまう方だったら、不安だよ。人間は調子が良いこともあれば、調子が悪いこともある、でも神様は変わらない。その独り子イエス様も変わらない。一度、みんなのことを愛したからには愛し抜いてくださる。一度、世界を救いへと導くと決めたからにはとことんやり切ってください。一度、聖書で約束したからには必ず約束を果たしてください。

5. 「神様は霊なる御方」って聖書は言うけれど、それは、なんかよく分からないフワフワした相手ってことじゃない。見えなくても、聖書から皆への思いを伝えてくださる。皆がお祈りをすれば心を通わせてくださる。困っていればお祈りに応えて解決の道を与えてくださる。神様は、そうやって、いつまでも、ずうっと変わらずにお付き合いをするためのパートナーとして皆のを選んでくださいました。「神様は変わることもない霊なる御方」。文章にするとイカツイ感じがするけれど、変わらない神様だから、神様との絆も変わらない。無くなることもない方だから、神様との絆もなくなりたくない。それどころか、神様がどんな御方か？ どれだけ素晴らしい御方か？ ってことは神様を知れば知るほど、深まっていきます。皆の一週間が聖書を読むことやお祈りをするので、ますます神様の素晴らしさを味わい知ることのできる一週間となりますように。祈ります。

〈お祈り〉

変わることもない神様。その素晴らしさに感謝します。変わらない愛に感謝します。アーメン。

説教展開例において、いつまでも変わることなく私たちを包み込み、真実を尽くしてくださる方としてのイエス・キリストの不変性が示されました。主イエスは今も生きておられ、ご自身の霊である聖霊において私たちと共にいてくださり、私たちを抱きしめ、包み込み、導き続けてくださいます。

神の本質は霊であるとどれだけ説明されても、私などはいまいちピンときません。聖書の言葉本来の手触りや温度を、あまり感じる事ができないからです。しかし、イエス様は共におられると言われると、素直に納得して信じる事ができます。そのお働きは肉の目には見えませんが、霊の目が開かれれば、いつでも確認することができるので私たちは信じます。そういう見えない主イエスへの信仰からスタートして、「三位一体の神の本質は霊である」という教理の正確な知解に進んでいくのが、健全な道筋だと思います。

分級の中学生たちには、その生徒の個性・特性にもよりますが、まず何より、主イエスの霊的臨在と共在のリアリティーを覚えることができるように、証しをしていただくのがよいと思います。そのリアリティーに触れ、畏れと喜びに満たされた者は、おのずと熱心をもって知解を求め始めます。そういう方には、カテキズム研究を参考に、とことん付き合っただけでください。

契約の子のひとつの特徴と思いますが、「神様は〇〇して下さった、神様が共にいてくださる……」という具合に、漠然と幼い頃から親しんできた「神様」との関係において信仰を理解している人が多いです。しかし、これは少し軌道修正をしてあげる必要があるのではないかと、いつも思っています。

私たちの信仰は、私の救い主であるイエス・キリストへの信仰であり、イエス・キリストという

存在を通してご自身のすべてを明らかにしてくださった、イエス・キリストの父なる神への信仰であって、漠然としたあいまいな「神様」への信仰ではありません。

筆者は幼い頃より、実家の神棚にまつられた「神様」に親しみ、祖父の厳粛な祈りの姿に毎日触れておりました。そういう意味で、自分を越えた存在として、いつも共にいて守り導いてくれるような「神様」には間に合っていました。ですから、キリスト教の神は、その程度のものではなく、あくまで「イエス・キリスト」の父なる神として、私を罪から救ってくださる方であることを、確認したいという意識を強く持っています。契約の子たちにも、「私の救い主イエス様」が共にいて助け続けていてくださるのだという意識を強く持つことができるように、導いてあげてほしいと願います。

私たちの救い主イエス様は、決して変わることなく、永遠に頼りになるお方です。私たちが病気になって弱くなろうが、試練に心揺さぶられようが、イエス様の救いが昨日も今日もこれからも永遠に変わらないから、私たちは安心していいのです。

「次の言葉は真実です。

『わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きるようになる。

耐え忍ぶなら、

キリストと共に支配するようになる。

キリストを否むなら、

キリストもわたしたちを否まれる。

わたしたちが誠実でなくても、

キリストは常に真実であられる。

キリストは御自身を

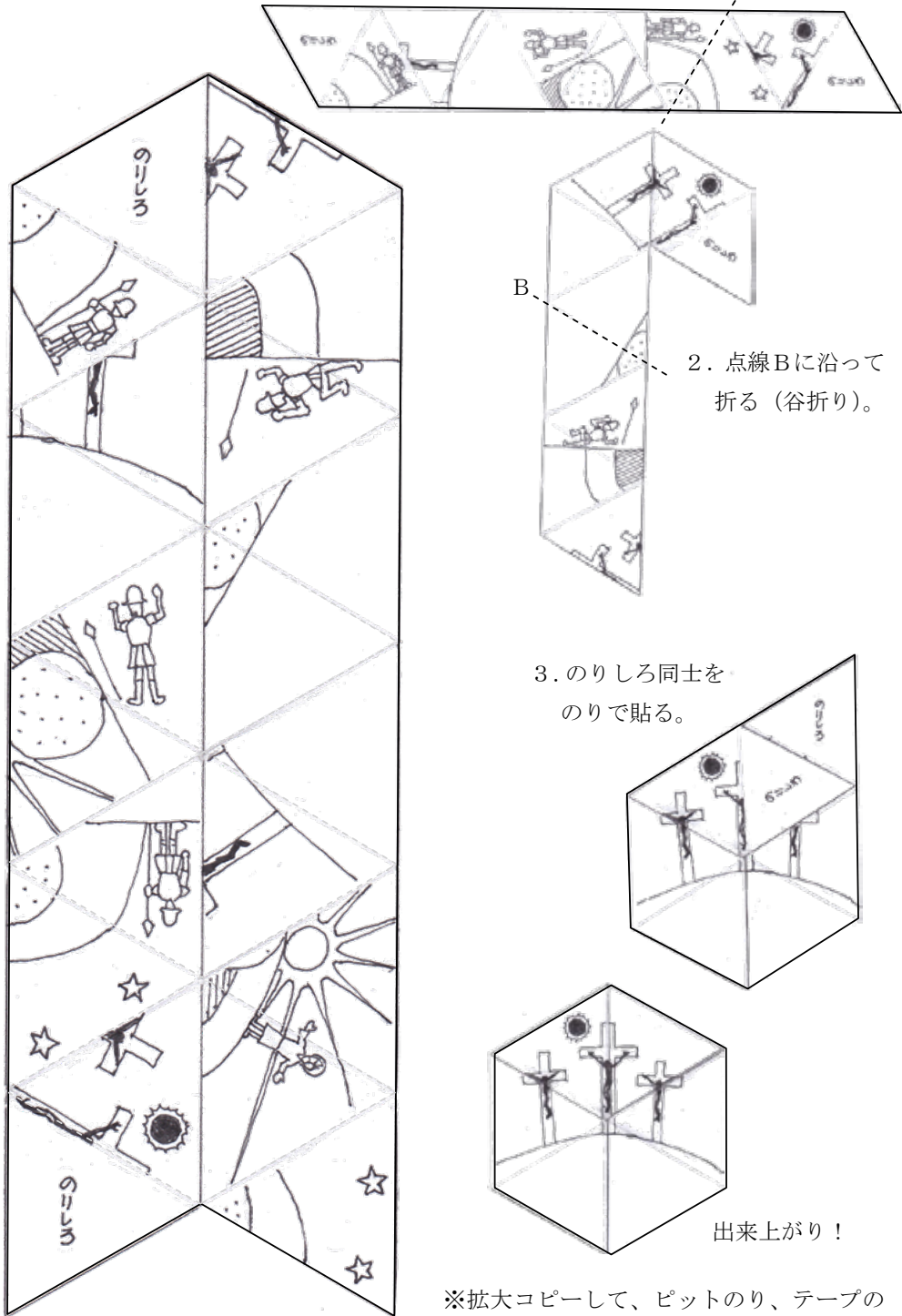
否むことができないからである。』

(二テモテ2:11-13)



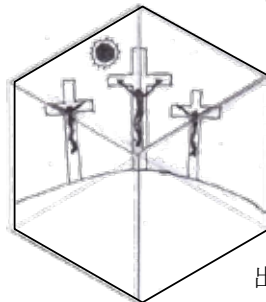
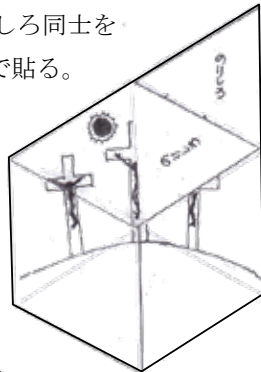
六角変わり絵（イースター）の作り方（24ページを参照）

1. 二つに折ってのり付けした後、点線Aに沿って折る（谷折り）。



2. 点線Bに沿って折る（谷折り）。

3. のりしろ同士を
のりで貼る。



出来上がり！

※拡大コピーして、ピットのり、テープのりを使うと折りやすいでしょう。

2012年7～9月カリキュラム (第45号)

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第1年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参考教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単元の目標			
7月1日	唯一の神	問8	ウ告白2:1、ウ小5
		申命記6:4, 5	申命記6:4, 5
真実の神はただお一人である。キリストによって示された神をほめたたえよう			
7月8日	生ける神	問9	ウ告白2:1、ウ小5
		エレミヤ10:6-11	詩編115:4, 5
死んだ神々、偽りの神々をしりぞけて、まことの神を仰ぐことに固く立とう			
7月15日	三位一体の神	問10	ウ告白2:3、ウ小6
		ヨハネ14:25-27	ヨハネ14:26
父・子・聖霊としてわたしたちに働きかける三位一体の神をほめたたえよう			
7月22日	主権者なる神	問11	ウ告白3:1, 5、ウ小7
		ローマ11:33-36	ローマ11:33, 36
弱いわたしたちを支えてくださる全能の神がおられることを喜ぼう			
7月29日	天地創造	問12	ウ告白4:1、ウ小9
		創世記1:1-5	創世記1:31
世界を極めて良いものとして造ってくださった天地創造の神をあがめよう			
8月5日 (平和)	平和を創り出す	—	
		ローマ15:7-13	マタイ5:9
平和の主イエス・キリストにならって、平和を創り出す者として歩もう			
8月12日	摂理の神 (一)	問13	ウ告白5:1、ウ小11
		ローマ8:28	ローマ8:28
救い主キリストの父である神が共にいてくださる。摂理の神を信頼して歩もう			
8月19日	摂理の神 (二)	問14	ハイデ26-28
		マタイ6:25-34	マタイ6:34
まことの神を知ると、恐れから解き放たれる。神に生かされる平安の中を歩もう			
8月26日	人間の創造	問15	ウ告白4:2、ウ小10
		創世記1:27, 2:7	一コリント15:49
人は神に似せて、神のかたちに造られた。人として生きることの幸いを知ろう			
9月2日	人の罪	問16	ウ告白6:1、ウ小13-15
		創世記3:1-7	創世記3:3
誘惑によって罪が入った。神の愛のまなざしの中で、人間の罪を見つめよう			
9月9日	罪と墮落	問17	ウ告白6:2、ウ小17-19
		創世記3:8-24	一ヨハネ3:4
罪とは何か、そして、その罪の広がりについて、御言葉から学ぼう			
9月16日 (敬老)	罪の悲惨	問18	ウ告白6:4、ウ小17-19
		創世記4:1-16	ローマ7:24
罪は現実の悲惨となって現れる。その苦しみと神の憐れみに目を留めよう			
9月23日	神の怒り	問19, 20	ウ告白6:3, 6、ウ小16, 19
		ローマ5:12	エフェソ2:3-8
わたしも神の怒りに価する罪人である。神の憐れみを知り、悔い改めに生きよう			
9月30日	贖い主の必要性	問21	ウ告白7:3, 5、ウ小20
		ローマ3:21-26	一ヨハネ4:10
罪の故に死すべきわたしたちに救い主が与えられた。愛の神をほめたたえよう			

2012年度 年間カリキュラム (第45～48号)

(2012年4月～2013年3月)

二年サイクル カテキズム カリキュラム 第一年 (子どもカテキズム問1～20)

	月 日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
2012年 第45号	4月1日	進級式・受難週	十字架のキリスト	—
	4月8日	復活祭	復活されたキリスト	—
	4月15日		人生の目的 一神を知る一	問1
	4月22日		神の栄光をあらわす	問1
	4月29日		救われた喜び	問2
	5月6日		神の子とされた喜び	問2
	5月13日	母の日	礼拝こそいのちの源	問3
	5月20日		いのちのパンで生きる	問3
	5月27日	聖霊降臨祭	神と人を愛する (一)	問4
	6月3日		神と人を愛する (二)	問4
	6月10日	花の日	キリスト証言	問5
	6月17日	父の日	神の御言葉	問6
	6月24日		霊なる神	問7
第46号	7月1日		唯一の神	問8
	7月8日		生ける神	問9
	7月15日		三位一体の神	問10
	7月22日		主権者なる神	問11
	7月29日		天地創造	問12
	8月5日	(平和)	平和を創り出す	—
	8月12日		摂理の神 (一)	問13
	8月19日		摂理の神 (二)	問14
	8月26日		人間の創造	問15
	9月2日		人の罪	問16
	9月9日		罪と墮落	問17
	9月16日	(敬老の日)	罪の悲惨	問18
	9月23日		神の怒り	問19, 20
9月30日		贖い主の必要性	問21	

年・号	月 日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
第47号	10月7日		二性一人格	問22
	10月14日		罪からの救い主	問23
	10月21日		謙卑のキリスト	問24
	10月28日	宗教改革記念	高挙のキリスト	問24
	11月4日		預言者イエス	問25
	11月11日		大祭司イエス	問26
	11月21日		真の王イエス	問27
	11月25日		恵みのみ	問28
	12月2日	アドベント	選びと有効召命	問29
	12月9日	アドベント	キリストを待ち望む	—
	12月16日	アドベント	キリストを待ち望む	—
	12月23日	降誕祭	主イエスの降誕	—
	12月30日	年末	一年の恵みの感謝	—
2013年	1月6日	新年	キリストとの結合	問30
第48号	1月13日		罪の赦しと義認	問31
	1月20日		神の子とされる幸い	問31
	1月27日		聖化の恵み	問32, 33
	2月3日		愛の歩み	問32, 33
	2月10日	(11信教の自由) (13-レント)	良心の自由と尊厳	—
	2月17日	レント	主イエスと共に歩む	問34
	2月24日	レント	再臨の約束	問35
	3月3日	レント	再臨に備える	問35
	3月10日	レント	死のときの祝福	問36
	3月17日	レント	苦難のキリスト	—
	3月24日	受難週	十字架のキリスト	—
	3月31日	復活祭	復活のキリスト	—

〈執筆よりひとこと〉

●子どもたちとの楽しい交わりのために、少しでもお役に立てればと思い執筆させていただきました。(山口英俊)

●教会学校の若い教師、ベテランの教師四名で分担し作成しました。少しでもお役に立てれば感謝です。(岡山西伝道所教会学校)

●教師会メンバーで分担して執筆しましたので、必ずしも統一が取れておりませんが、どうぞ分級の準備に参考としてお用いくだされば幸いです。(神港教会聖書学校)

●中学生分級は、どうあるのがふさわしいのでしょうか。試行錯誤中です。(坂井孝宏)

●数年前まで、毎週説教を担っていました。今は、月二回、教師の説教を聴いて、励まされています。皆さまの尊い奉仕、ご準備に少しでも資する弊誌となるべく、道は険しいながら、はるか目指しています。Soli Deo Gloria! (相馬伸郎)

●まきば幼稚園では月曜日に礼拝を行い、聖書のお話をしていますが、試練の連続で、幼児に届く言葉の獲得に四苦八苦しています。しかし、幼児たちとの交わりの中で、用いるべき言葉が与えられることも確かです。(長谷川潤)

●基本教理を物語るための聖書黙想を提供してゆく私たちの営みが、主の恵みと導きによって、教会学校を祝福するものとなりますように。(二宮 創)

〈あとがき〉

●新年度を迎えて、引き続き『教会学校教案誌』をお届けできますことを、神様と読者の皆様から心からの感謝を申し上げます。

●今号より、『子どもカテキズム』に基づく二年サイクルに戻ります。今回で四回目になりますので、これまでと形式を変えることを考えています。準備が整わず、今号は旧来の形式のままですが、次号より、新しい形式での提供を予定しています。

●カテキズムによるカリキュラムにおいて、「聖書研究」「カテキズム研究」「説教展開例」が一つに重なり合っていないというご指摘をしばしばいただいていたので、その克服を考えて、「教理説教のための聖書黙想」と「説教展開例」の二本立ての形式で提供することを予定しています。説

教展開例執筆者が、教理説教を執筆する道筋の中で、聖書研究とカテキズム研究を兼ね備える「黙想」を執筆するという仕方です。初めての試みであり、試行錯誤の面があることを否めません。実際に用いていただくことのできるものとして整えることができるよう、お祈りください。

●表紙イラスト作画者が交代しました。これまで担当して下さった田口裕美姉には、ありがとうございました。今号からは、片岡契一長老による、新しい雰囲気の色紙をお楽しみください。

●「信仰の証」を募集しています。教会で受洗者・信仰告白者がおられましたら、ぜひご連絡ください。喜びを分かち合いましょ。

●日本キリスト改革派教会の聖書日課『リジョイス』の「いのちのパン」についても、ご意見をお寄せください。教案誌編集部より提供させていただいています。それぞれの祈りの場が主の祝福に満たされますように。

●様々なご意見、情報をお気軽に編集部までお寄せください。弊誌は、皆さまのものです。皆さまに奉仕することこそ、その使命、目標です。今後とも宜しく願い致します。

〈購読の申し込み〉

●『教会学校教案誌』をぜひ購読ください。また、別冊『子どもカテキズム』(300円)をぜひお買い求めください。バックナンバーもあります。第40号までは一部500円で販売しています(品切れの号もあり)。

●別冊『子どもカテキズム』(300円)のお求めは、相馬伸郎までご連絡ください。

名古屋岩の上传道所 相馬伸郎まで

〒458-0021 名古屋市緑区滝ノ水2-2012

Tel/Fax. 052-895-6701

E-mail: iwanoue@me.ccnw.ne.jp

●教案誌購読受付と送付は大垣伝道所の辻幸宏教師が担当しています。お求めは下記までご連絡ください。副読本『主は羊飼』(800円)のお買い求めも下記までお願いします。

大垣伝道所 辻幸宏まで

〒503-0996 大垣市島町283

Tel/Fax. 0584-91-3538

E-mail: yukihiro.tsuji@nifty.ne.jp

☆ 執筆者一覧 ☆

まえがき	木下裕也 (名古屋教会牧師)
辻 幸宏 (大垣伝道所協力牧師)	松田基教 (高松教会牧師)
巻頭説教	説教展開例
吉田 隆 (仙台教会牧師)	長谷川潤 (四日市教会牧師)
本誌の基本方針	木下裕也 (名古屋教会牧師)
相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)	辻 幸宏 (大垣伝道所協力牧師)
聖書研究	望月 信 (高蔵寺教会牧師)
後藤公子 (神戸改革派神学校講師)	二宮 創 (太田伝道所宣教教師)
三川栄二 (稲毛海岸教会牧師)	相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)
袴田清子 (園田教会会員)	分級展開例
大西良嗣 (滋賀摂理伝道所宣教教師)	幼稚科 山口英俊 (豊明教会長老)
赤石純也 (伊丹教会牧師)	小学科下級 岡山西伝道所教会学校
小野静雄 (多治見教会牧師)	小学科上級 神港教会聖書学校
大場康司 (南浦和教会牧師)	中学科 坂井孝宏 (熊本伝道所宣教教師)
吉田 崇 (坂出飯山教会牧師)	イラスト作画
辻 幸宏 (大垣伝道所協力牧師)	表紙 片岡契一 (高島平キリスト教会長老)
カテキズム研究	本文 岡野美佳 (青葉台教会会員)
望月 信 (高蔵寺教会牧師)	

☆ 編集部 ☆

相馬伸郎 (長)	名古屋岩の上伝道所宣教教師
木下裕也	名古屋教会牧師
辻 幸宏	大垣伝道所協力牧師
長谷川潤	四日市教会牧師
二宮 創	太田伝道所宣教教師
望月 信	高蔵寺教会牧師

日本キリスト改革派教会 中部中会 『教会学校教案誌』

2012年4・5・6月号 (季刊)

第45号

2012年2月26日発行

発行	日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校委員会
発行所	日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部 名古屋岩の上伝道所 宣教教師 相馬伸郎 〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012 Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座	00890-2-148183 「伊藤治郎」
編集・印刷	株式会社あるむ
頒価	900円 (本体価格)
